

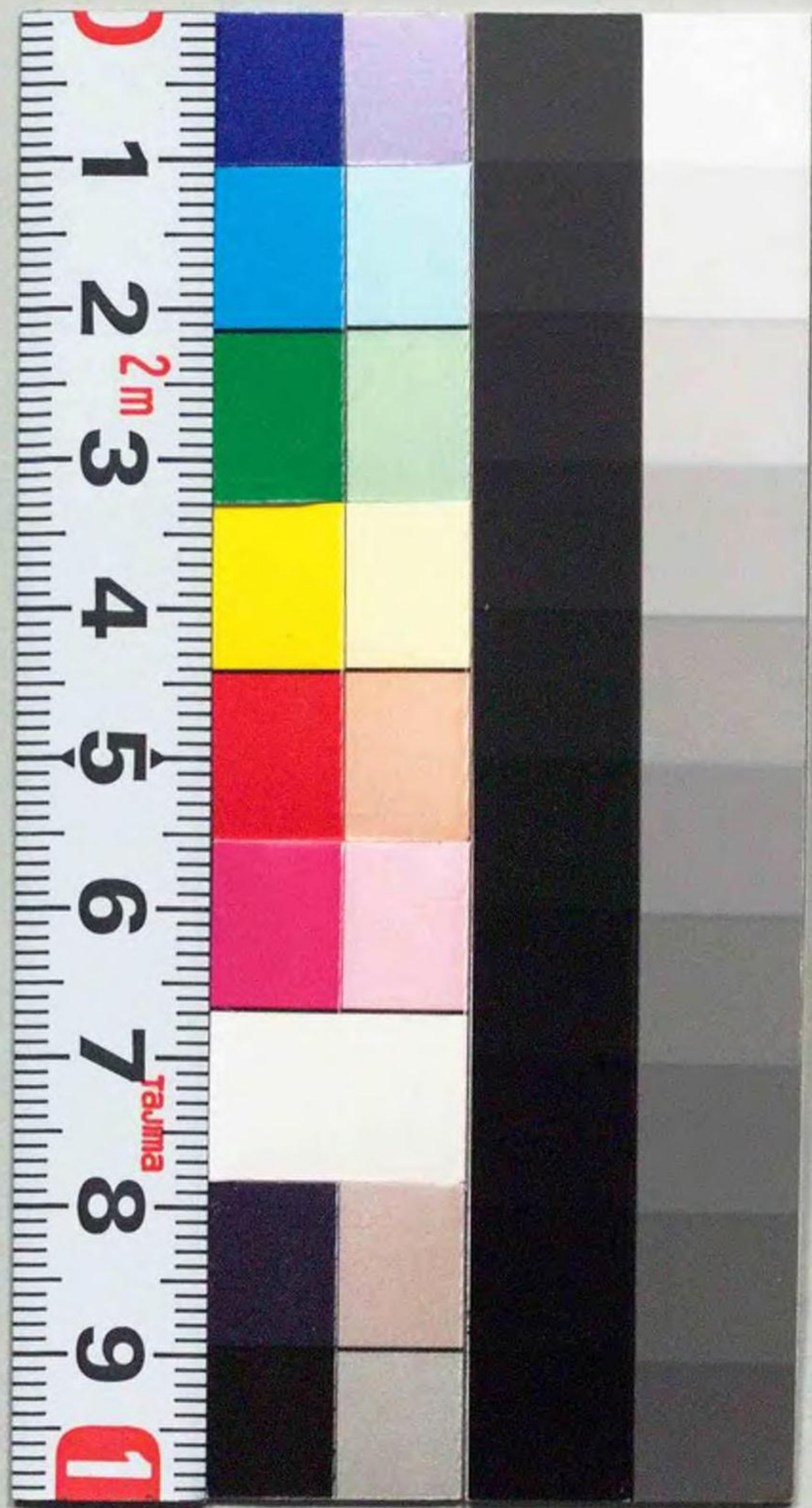
780-402



1200501602169

780

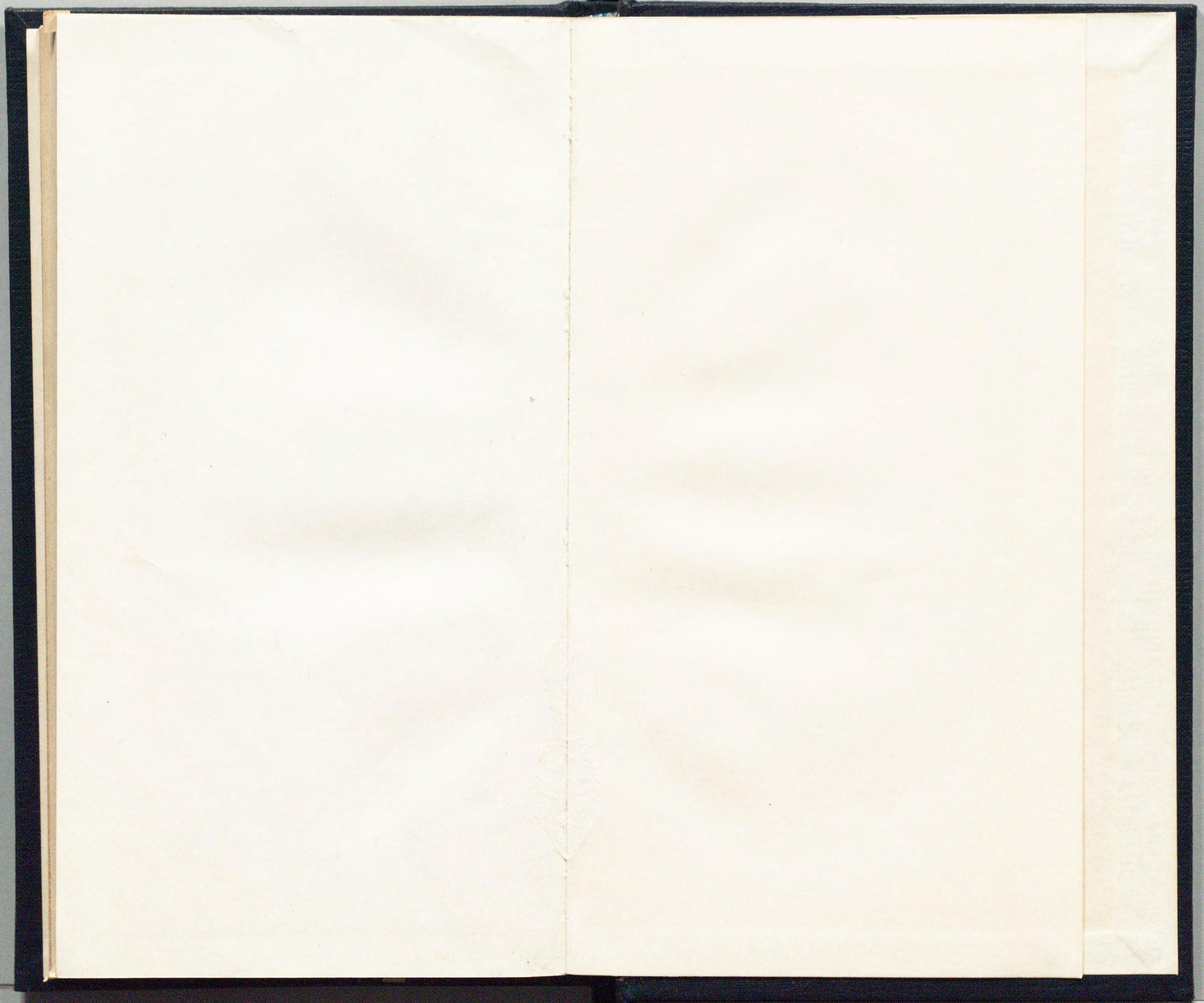
402













I-2M13



著郎一勝井龜

村 藤 崎 島

行刊堂文





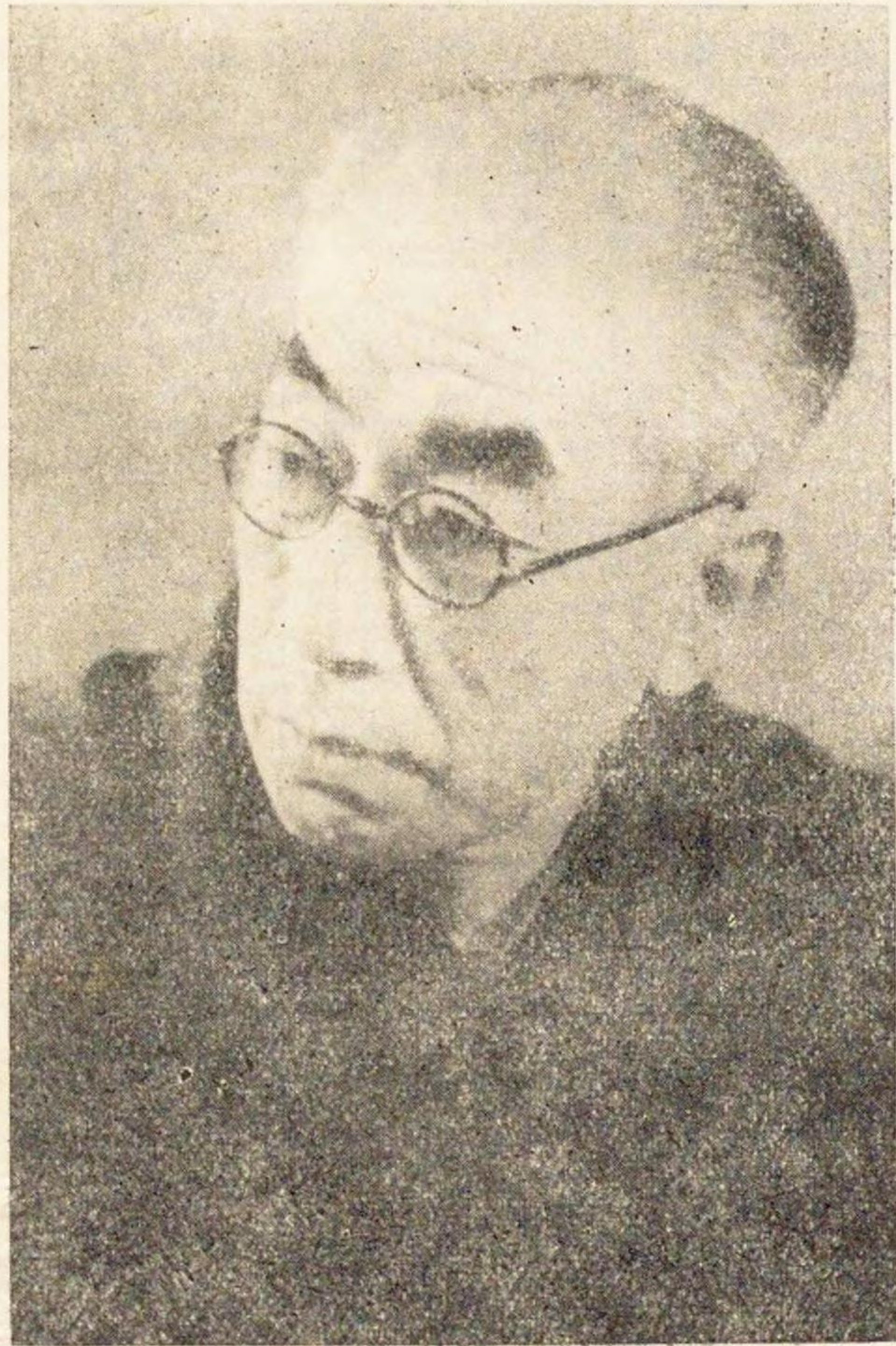
龜井勝一齋

島崎藤村

弘文堂刊行







淡江大學圖書館





780  
402

島崎藤村 目次

序章 漂泊の思ひ……………一

○第一章 若き旅人……………三

一 青年時代……………三

二 信仰……………三

三 戀愛……………三

四 友情……………四

五 生のあけぼの……………五

第二章 生々流轉……………五

一 破戒……………五

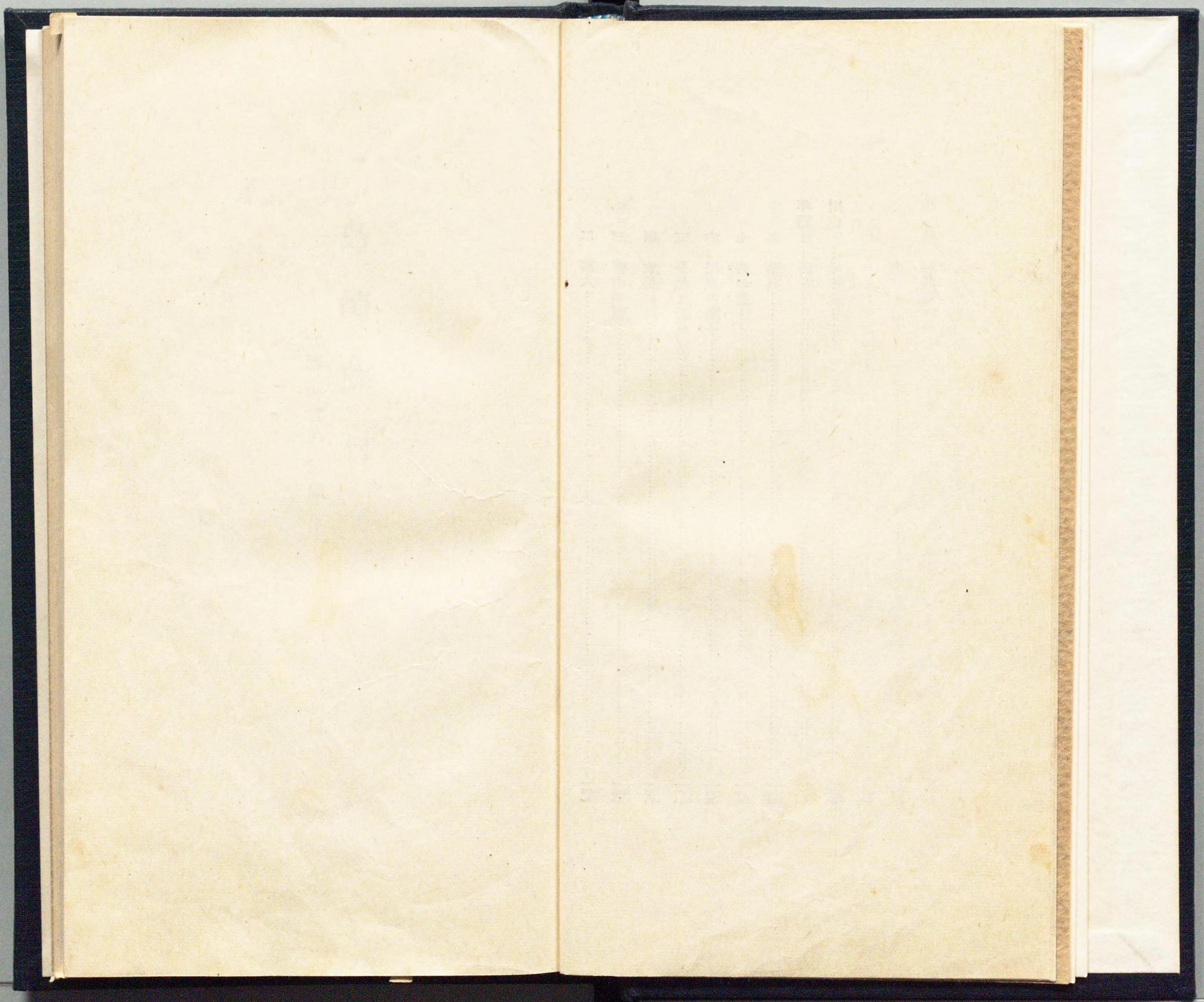
二 家……………六



三	生ひ立ちの記	七六
第三章 佛蘭西への旅		
一	海へ	八三
二	エトランゼエ	九三
三	歐洲戦争	一〇〇
四	歸朝	一〇六
第四章 新生		
一	生の危機	一一四
二	嵐	一二九
三	心の漂泊	一二七
四	告白	一三五
第五章 夜明け前		
一	故郷	一四四

二	旅人	一四九
三	青山半藏	一五三
四	宣長の説	一五六
五	憂愁と行爲	一六二
六	民衆の繼子	一六五
七	齋 <small>いっき</small> の道	一七一
八	落日	一七五
年譜		
	年譜	一八〇
附記		
	附記	一八四







島崎藤村

— 漂泊者の肖像 —



驕旅邊土の行脚

捨身無常の觀念

道路に死なん

これ天の命なり

芭蕉

### 序章 漂泊の思ひ

「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口をとらへて老をむかふる者は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。

予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず……」(芭蕉)

戦亂のあはたましい世に在つて、益々旅人の姿に思ひをひそめるやうになつた。人生は旅であるといふ思想、人をもわれをも一個の旅人として眺め、その無常からくる愛と悲しみを深くしたならば、動揺つねなき心も幾分の落着を得るであらうと考へてゐる。ここに奥の細道の冒頭をひいたのは、新しい解釋を試みるがためではない。旅に狂熱してゐる文章から、無常の世に處する心の姿勢を正したかつたからである。異常の戦時に際し、不動の姿勢を保つことはいかにして可能だらうか。現代は、人類を未曾有の放浪へ追ひやつた。それは天が我々に課した峻烈な刑罰のやうにさへみえる。



人々はいかに生くべきか、焦燥にみちた日々を送つてゐる。多くの思想や見解や宣言が、實にめまぐるしく流れて行つた。統一への要望にも拘らず、奥底には深い混迷が渦巻いてゐる。曾て我々の祖父達は「黒船」の姿をみて狂氣した、あの明治の黎明期から漸く一世紀を経たにすぎない。我々は祖父達の狂氣を笑ふことが出来るだらうか。島崎藤村は、死せる父への手紙の中で、「黒船」の幻影から切りはなしてあなたの御生涯を考へることも、あなたのいたましい晩年を想像することも出来ませんと、無量の感慨をこめてかいてゐる。西洋の物質的威力の象徴ともみられる黒船は去つたが、それから百年、思想の黒船は絶えず我々を脅かしてゐた。諸々の幻影が東洋の海邊に浮んでゐる。現代人は果して強い自律性をもつてこの幻影に對したであらうか。日本の運命を考へて狂氣した祖父達の血はいまいづこぞ。

憐れむべき世紀の焦燥は、我々の心を一日として安穩にしておかない。時代の異常性の故でもあらう。異常のなから一筋の道を求めたいと願ふ心は誰にでもあらう。しかし、溺るる者藁をも掴むたとへのやうに、焦燥にかられた現代人は、些々たる意見や立場にも容易にすぎりつき易い。物事の奥を、ほんとうに見究めんとする決意や、鈍重で執拗なエネルギーは次第に薄らぎつつある。今日様々の眞理らしいものが説かれてゐるが、その生命たるやかげろふの如きもので、朝に生じ夕にははや滅する運命にある。人間の浮沈も激しく、政治的色彩を帯びたものほど轉變が速かであつた。

\*  
戦争は我々の衰弱を快癒に導く絶好の試練であらう。戦場に戦ふものは、思想も見解も立場も黨派も必要としない。恩愛のきづなすら断ちきつて挺身しなければならぬ。あの見事な一切放下の姿が、人々を感動せしむる唯一の力なのだ。この刹那においては、人間はただ切實ないのちのみを露呈する。その純粹なるが故の放縦さ、自由さ、激しさ、また儂さ、さうした捕へ難い相が、暗黙の裡に我々の内部に流れこんでくる。戦場は變革精神の母胎であると云はれる。變革は政治的意味よりもつと深い、いはば人間の再生ともよばれるものではなからうか。死の危機に挺身して、過去のすべてから離脱しようとする意志は人間にのみ與へられた痛ましい可憐な営みである。生死の境には、渾沌とした無垢のいの



ちがある。何處より來つて何處へ去るかを知らぬ、叫喚と勇氣と野放圖な夢にあふれた生命の大河である。ここに身を委ねて、決死の裡に無常を感得する以上に高貴な試練はあるまい。人生は旅であるといふ思想の、厳しく鍛へられる場所でもあらう。既存の一切の原理はひとたび死なねばならぬ。

戰場を越えて、一の象徴として我々に迫ってくるものはかやうな姿である。島崎藤村は日露戦争の只中で「破戒」をかいた。出征兵士を送る、悲壯な生命掛けの叫び聲をききながら、「人生は大きな戰場だ」と肯きつつ机に向つた。また佛蘭西の旅で、歐洲大戦に遭遇し、自ら義勇兵になつてまで己の起死回生を試みんとした。どんな種類のものであれ、一つの目標に殉ずる決意はすでに「戦争」と云はねばならぬ。過去のすべてを放棄して、純粹の眼をもちたい、再生の心に燃えて新たなる日を迎へたい——これが旅人の門出の姿なのだ。戦争は象徴として旅人の姿をもたらしたと云ひたい。「人間全體の受くべき筈のもの、この内の我で受けて味つて見よう。この己の靈で人間の最上のもを深甚のものを捉へて、歡喜をも苦痛をも此胸の中に積んで、此自我を即人生になるまで擴大して、遂に

はその人生と云ふものと同じく滅びて見よう。」——ファウストが新生涯の出發に云つたこの言葉こそ漂泊の決意であり、また戦争が我々に煽動する最深のものだと言ひたいのだ。

西行や芭蕉の旅から、世捨人といふありきたりの概念をつくりあげ易い。しかし世の激變と無常から結果する旅人といふ考へは、激しい心にみだされてゐる。世捨人とは、一切放下した人であり、遂には人生といふものと同じく滅びて見ようといふ、滅亡への意志だと思ふ。一つの些事にすらよく苦惱しながら、大膽に人生を究めて行く豪華な心情なのかやうな夢に憑かれた人として旅人を見るべきであらう。どうかして人生を知りたい、どうかして生きたい——藤村の全作品からひびいてくるのもこの漂泊の聲だ。狂氣のごとく奥へ奥へ探つて行く涯のない巡禮である。「そぞろ神の物につきて心をくるはせ」と芭蕉は語つてゐる。「漂泊の思ひやまず」とも言つてゐる。そぞろ神の誘惑に身を委ねたものは遂に憩ひを知らないであらう。旅人といふ言葉に内在する激烈な戰鬥精神を没却してはなるまい。



旅あるひは旅人といふ理念は、近代に始つたものではなく、芭蕉は遠く萬葉の歌人や支那の詩人達にもそれを求めた。もつとさかのぼるなら、東洋の經典にも旅の心はみられるであらう。たとへば大乘の菩薩道を私を一種の旅人道とみてゐる。一切衆生の裡に純粹のいのちを夢み、それを追うて無限漂泊に赴いた菩薩たちは、東洋の古い旅人であつたらう。彼らの愛情は、旅人が旅人に注ぐ深い哀愁の情であつたとも考へられる。「一切衆生病まざることを得ば、即ち我が病も滅せん」と維摩は述べてゐる。「菩薩の疾は大悲より起る」とも語つてゐる。ここには戒律もなく教説もない。人間の生命に對する溺るるがごとき愛情だけだ。衆生病める故に我も病む、衆生の苦惱ある限り最後のひとりを救ふまで漂泊はやまないといふ決意だ。それは生命から生命へ純粹の聲を求めた永遠の流轉でなければならなかつた。或る激しい夢に憑かれた人々の、遂には生命の大河に寂滅するまでの苦行であつた。「古人も多く旅に死せるあり」とは、昂揚した宗教的情熱ではないか。旅の支度は滅びの支度でもある。

旅はまた無限の創造への意志を宿してゐる。断えず動く——芭蕉の「日々旅にして、旅

を栖とす」——は心の停滯を厳しく拒ける言葉ともうけとれよう。禪門に謂ふ「一所不住の徒」維摩の謂ふ「無住を本と爲す」「無住は即ち本無し」も同じ理であり、耶蘇の言葉、「狐は穴あり鳥は埒あり、されど人の子は枕する所なし」も旅人の心に通ずるではないか。あらゆる依拠物を拒否し、道なきところに道を求めなければならぬ。永遠の宿なしである。彼の眼にうつり心に信ずるものは自然のみだ。絶えず創造する自然に己を還元しようとする。人間・禽獸・草木から石塊にいたるまで全宇宙を貫くところの、自然の生命原理自體に同化せんとする熱意がある。それが「風雅の道」とも云はれるものであらう。「風雅におけるもの、造化に隨ひて四時を友とす。」人生を旅とみ、人をも己をも旅人と眺める氣持には一切の夾雜物を排した純粹性への深い憧憬がこもつてゐる。純粹なものは瞬時にして滅びるかもしれぬ。が、美しい刹那に身を滅して悔まないのが旅人の正義なのだ。

\*

旅人の心には、また自分をより大きい何ものかに委ね、微少な己を忘れようとする決心がある。忘却の精神は旅につき添ふ不可缺の要素であらう。私は一切放棄と云つたが、一



切忘却も同じ意味だ。心を起さうと思はばまづ身を起せといふ藤村の言葉がある。心を起す、即ち再生への欲求は身を起すことに始る。迷妄や過誤や罪禍にまみれた身を、大なる山嶽、大なる海、或は神に委ねて、流るるままに流れさせ、この流轉において過去の一切を洗ひ清めようとする心は、旅人の門出における悲しい決意ではなからうか。レエテの河を思はぬ旅人はおそらくあるまい。戦場に立つ兵士の心にも、同じ感慨は宿るであらう。「哲學も法學も醫學も、あらずもがなの神學も熱心に勉強して、底の底まで研究した。さうしてここにかうしてゐる、氣の毒な、馬鹿な己だな」といふファウストの獨白——それから一切の智識の塵から蟬脱して、生命の元つ泉への憧憬を云ふとき、彼の無限漂泊が始つてゐる。われいかに生くべきかとは、われいかに死すべきかと同義語なのだ。再生は己の完き忘却によらねばならない。

\*

再生は云ひ易く、決して遂げられ易いものではない。「道を求める」といふ情熱がある。旅といふ理念自體が深い意味で宗教的であつて、求道はその核心をなす。求道は冒険の意

思であり、發見と創造への憧憬である。しかし慘憺たる彷徨でもあらう。

——旅人よ、足をとどめよ。お前は何をそんなに急ぐのだ。何處へ行くのだ。何故お前の眼はそんなに光るのだ。何故お前はそんなに物を捜してばかり居るのだ。何故お前はそんなに齷齪として歩いて居るのだ。

——旅人よ。お前はこの國を見ようとしてあの星の光る東の方から遙々とやつて來たのか。この國にあるものもお前の心を満たすには足りないのか。

——旅人よ。夕方が來た。何をお前は涙ぐむのだ。お前の穿き慣れない靴が重いのか。この夕方が重いのか。それとも明日の夕方が苦しいのか。

——旅人よ。何故お前は小鳥のやうに震へてゐるのだ。假令お前の生命が長い長い恐怖の連続であらうとも、何故もつと無邪氣な心を有たないのだ。

——旅人よ。足をとどめよ。この國の羅馬舊教の季節が來てゐる。お前も來て、主しゅの受難を記念する夕方に憩へ。お前に食はせる麵麩、お前に飲ませる水ぐらゐはここにも有らうではないか……



藤村の「新生」の一節にある詩句である。旅人の寂寥をこれほど痛切に歌つたものはあるまい。おそらくすべての旅人は心に「何處クオウツァデスへ行く？」と叫んでゐるのではなからうか。無常の世に處すべき確乎たる姿勢をもちたいと思ふ心も、一切放棄せる純粹生命を追ふ夢も、人間全體の受くべき筈のものをこの内の我で受けて味はんといふ決意も、再生の意志も、畢竟人間にもたらずものは寂寥の旅にすぎまい。大いなる生命に身を委ねたときの喜びはあらう。見知らぬ國土に赴いたときの忘我の好奇心もあらう。様々の國土、様々の人の中へ行つて修業し訓練される。しかしこれが到達點だと思ふことは遂にないであらう。「假令お前の生命が長い長い恐怖の連続であらうとも、何故もつと無邪氣な心を有たないのか」と自らを叱咤しても、「そぞろ神の物につきて心をくるはせ」た人の運命は如何ともし難いのだ。人間のみ、何故かやうな重荷を負はねばならぬのか。藤村の言葉は、人生そのものが與へる嘆息のやうなものだ。求めてやむことなき流轉生命の切なる息吹が感ぜられる。

\*

心の宿の宮城野よ

みだれて熱きわが身には

日影も薄く草枯れて

荒れたる野こそうれしけれ

獨り寂しきわが耳は

吹く北風を琴と聽き

悲しみ深きわが眼には

色なき石も花と見き

「不思議にも自分の半生の旅はこの早い出發點で決してしまつた。私はまだ年も若く心も感じ易かつた時代に一旦自分の選んだ方針がこんなにも長く自分を支配するかと思つて心ひそかに驚くこともある。前途は暗く胸の塞がる時、幾度となく私は迷つたり蹉いたりした。私の歩いた道がどんなに寂しい時でも、しかしその究極に於いて、何時でも私は自



分の出發した時と同じやうに、生を肯定しようとする心に歸つて行つた。世にはさまざまの人があり、さまざまの性格があり、さまざまの生涯がある。長い旅の途中には私は『經驗』そのものと言ひたいやうな髪の白い翁にも逢つた。物に澁まず滯らず、世と共に押移ることを私にささやいて見せるのもその髪の白い翁だつた。ある友達はまた私の傍へ來て、あまりに人生を重く見るな、あまりに眞劍になるものでないと、私にささやいて呉れることもある。『愚かなるものは思ふこと多し』とか。實に齷齪とした自分なぞは、青年時代に踏み出した時と少しも變りのないやうな、それほど長い夢を今日まで見つけて居る。そして眼前の暗さも、幻滅の悲しみも、冬の寒さも、何一つ無駄になるものなかつたと思ふやうな春の來ることを信ぜずにはゐられないで居る。』（「春を待ちつつ」）

しかし藤村の生涯に、一度でもかやうな春の訪れたことがあつたらうか。藤村といふ旅人、彼の描いた旅人は、悉く憂悶に閉ざされ、暗澹たる道のみを好んで歩いて行つたやうに見える。右に引用した「草枕」の一節は、藤村の生涯をあらかじめ示唆してゐるのだ。蕭條としたこの一筋の道は「夜明け前」までつづいてゐる。「ああ、自分のやうなもので

も、どうかして生きたい——これは「春」の最後に出てくる述懐だが、どうかしてといふ執拗な人生探求の心は、度重る毎に益々陰鬱なものになる。初期の詩集の一部を除けば、藤村の作品はどれも重々しく暗い感じを與へる。「夜明け前」の主人公青山半藏も、「春」「櫻の實の熟する時」「新生」の主人公岸本捨吉、「家」の主人公小泉三吉も、すべて憂鬱な旅人である。いかなるときでも、靜かに、重厚に、一步一步進んで行く。彼の彷徨につきまとふこの暗さはどこから來るのであらうか。

\*

「さびしい雨の音を聽いてゐると、過去の青年時代を繞りに繞つたやうな名のつけやうのない憂鬱がまた彼に歸つて來る。

お民はすこし蒼ざめてゐる夫の顔を眺めながら云つた。

『あなたは溜息ばかり吐いてるぢやありませんか』

『どうして俺はかういふ家に生れて來たかと考へるからさ』

これは「夜明け前」の一節だが、ここにもかかれてゐる「名のつけやうのない憂鬱」は藤



村の旅人に一貫した性格である。それは彼自身の性格ともみとめてゐたらしく、様々の作品で根源をつきとめようとしてゐる。藤村の全作品を通して、「旅人」といふ理念の深められて行く相がみられるが、それが自己の血族に對する甚だ執念深い探求にむすびついてゐることは注目すべきであらう。或る「家」の宿命に對して彼は戦いてゐるのだ。藤村は自傳的要素の濃い作家であつて、作品は殆ど例外なく自分の肉親や兄弟や姪や甥や子供や友人を對象として描いてゐる。「破戒」「夜明け前」のごとき作品ですら、根本的にはこの範圍を出てゐない。そして同じ對象を繰返し描きつつ、存在の祕密を深めて行くのが藤村の特徴なのだ。これが一の絶頂に達したと思はれる作品は「新生」とフランス紀行である。

自己の一時期に襲つた異常な嵐を、藤村はフランスの旅舎で堪へ忍んでゐる。旅人といふ思想の深刻に鍛へられたのもこの時期であつた。己の骨を噛むごとく運命を噛みしめながら、新生を求めた藤村は、自分の幼年時代や父の生涯に遠く想ひをさせて行つた。「半生を通して繞りに繞つた憂鬱——云ふことも爲すことも考へることも皆そこから起つて來

て居るかのやうな、あの名のつけやうのない、原因の無い憂鬱が早くも青年時代の始まる頃から自分の身にやつて來たことを話して、それを聞いて貰へると思ふ人も、父であつた。岸本が最後に行つて地べたに額を埋めてなりとも心の苦痛を訴へたいと思ふ人も父であつた」といふ風に述べてゐる。

藤村は自分の、何か宿命的ともいふべき苦行を思ふにつけても、それを父の血液にまでつながらせ、己が體內を流れる不思議ないのちを究めようとしたのであらう。その父の面影は青山半藏の裡にある。半藏は悲惨な最後を遂げてゐる。さうした血の流れに藤村は恐れ戦いてゐたのだと思はれる。「自身の内部に一層よく父を見つけて行つた」(新生)——深い親愛の情と恐怖がある。父の憂鬱が昂じて狂死したのに比べるならば、彼は辛うじて狂氣じみたといふ程度に止まつてゐるだけだとも述べてゐる。藤村に特有な、あの執念深い凝視がどこから出てくるか、根源的にはこの邊の事情から理解出来るやうに思ふ。

\*

藤村のものをみつめる力は、凄慘とさへ名づけられるほど執拗なものである。それは一



種の狂氣である。「この世にある美しいことも、醜いことも、愚かしいことも、氣違ひじみたことも、すべてまことの姿に來て影を投ずる明るい鏡のやうな心。それを私は持ちたいと心がけた。私は自分の武器を磨いた。自分の力を訓練した。自分の器官を精銳にした。次第に私は觀察そのものを仕事とするやうになつて行つた。二六時中、休息することを知らなかつた。「自分はもう考へまいと思ふけれども、どうしても考へずには居られない」と嘆息した人もあるとか。私が矢張りそれだ。私は考へたところで仕方が無いと思ふことを考へて居るやうに成つて行つた。そしてその結果として、一つの不思議な窓が私の前に展ひらけて行つた。私はその窓から見たものを極靜の地獄と呼んで見たこともある。ある時は又、それを自分の靈魂の悲しい眼ざめとも思ひ慰めたこともある。その地獄から言へば、この世にある偉大な思想家も藝術家も、皿や林檎と異なるところが無かつた。人は皆な一個の「靜物」に過ぎなかつた。」「海へ」藤村をよむものは、作品の到るところに光つてゐるこの旅人の異様な眼をみよ。わが心は、北極の果なる太陽のごとくやがて紅くしてしかも凍り果つる唯一つの石に過ぎないであらうとは、藤村の嘆きを最もよく言ひあらはした言葉だ。

彼にとつて凝視——觀察は双刃の劍である。復讐の武器であり、自分自身を傷つける刃でもあつた。藤村は己が周圍にある一切に、ひとたび見据えたら決して離れぬ凝視をつづけた。その眼は、愛情の背後にある打算をみぬいた。結婚生活の裏に許し難い偽善をみとめた。愛想のいい異邦人の底にある意地のわるい蔑視をみとめた。そして最も入念に自分自身を凝視し、重々しい意味を與へては憂ひを深くした。人生に眼をひらくことは不幸である。或るものは罪禍によつて、或るものは戀愛によつて、或るものは疾病によつて、また戦場の生死の争闘によつて人生開眼が行はれるであらう。しかしそれは滅亡の日の自覺にひとしい。この人生の奥にひそむ諸々の不思議に、涯のない探求がつづくことを覺悟しなければならぬ。藤村の愛の影に宿る冷酷な眼をみよ。

\*

遂に憩ひといふものを知らぬ不斷の争闘がはじまるであらう。そして人間の一切がいかに徒勞であり無常であるかを知るであらう。



藤村の「夜明け前」にみらるるものは、父なる人の面影、ひいては自分の運命に對するこの慟哭である。青山半藏の旅は靜かな歩みであつたが、靜けさの底には不氣味な嵐を宿してゐた。嵐の狂ふときが晩年に訪れた。家も傾き、身も心も傾いて、一種孤高の悲哀だけが半藏の心にまつはつてゐた。「復古の道は絶えて、平田一門すでに破滅した」といふ寂しい叫びがあり、「平田門人は復古を約束しながら、そんな古はどこにも歸つて來ないではないか」といふ誹謗には返す言葉も失つてしまつた。この驚くべき徒勞を目前にして半藏は狂氣し、わが子の縛をうけて座敷牢に幽閉されるのである。

おのれを檻の中の熊にたとへ、荒い格子越しに「熊」と一字を書いた紙片を娘に示したりした。さういふ時狂へる彼は

……おのれを笑はうとするのか、それとも世を嘲らうとするのか、殆んどその區別もつけられないやうな聲で笑ひ出した。笑つた。笑つた。彼は娘の見てゐる前で、さんざん腹をかかへて笑つた。驚くべきことには、その笑が何時の間にか深い悲しみに變つて行つた。きりぎりす啼くや霜夜のさむしろにころも片敷き獨りかも寝む。

この古歌を口ずさむ時の彼の蒼ざめた頬からは留め度もない涙が流れて來た。彼は暗い座敷牢の格子に取りすがりながら、さめざめと泣いた。……

藤村の旅の理念と、父祖への愛が、かやうなたちで結着しなければならなかつたことは注目すべきである。彼の旅人といふ考へは決して明るいものではない。「春」も「家」も「新生」も「夜明け前」も、人間に希望を與へるやうな作品ではない。美しい崇高な理想も夢も希望も、無慚に裏切られる。「ある人は私の舊い詩を評して、私の詩の心は否定の惱みでなくて、肯定の苦に巢立つものだと言つてくれた。あの言葉は自分でよくうなづける」と述懐してゐるが、藤村は生涯肯定の苦に巢立たうとして却つて深い憂悶におちいつて行つたやうな作家である。旅人の恐ろしい孤獨のみがあとへ残るのだ。藤村自身も、つと無邪氣な心をもてぬものかと自らを叱り、ユーモアのない一日は寂しい一日であるなどと感慨をもらしてゐるが、また童心といふことについても屢々かいてゐるが、さうした憧憬の背後にはつねに重苦しい憂ひの影がつきまとつてゐた。人間の再生なども、ありうべからざることであつて、ただ人間はその夢を抱いて無限漂泊に赴くのかもしれぬ。成熟



した旅人の心は、おそらく無常に住みつつ、無常をそのままの姿で愛さうとするやうに成るのではあるまいか。無限漂泊を宿命と悟り忍苦して、ひたむきに生命の火を燃やしつづけるであらう。「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」——救ひはない。

20

すべての峯に

憩ひあり。

すべての梢に

そよ風も吹き絶えし

静けさあり。

森には鳥の歌もやみぬ。

待てよかし、やがて

汝も憩はん。

「旅人の夜の歌」(ゲエテ)である。待てよかし、やがて、汝も憩はんと歌つた心には、

いかに憩ひのない苛烈な争闘が宿つてゐたことであらう。人の子は枕する所なしと言つた耶蘇の旅心にも通じてゐる。すべての峯にある憩ひとは、「死」であらうか。「涅槃」であらうか。漂泊の涯にくる、静かな、休息のごとき死こそ、旅人が最後の憧憬かもしれぬ。



## 第一章 若き旅人

### 一 青年時代

青年時代の意味が漸く理解出来るのは、壯年から晩年へかけての成熟した時期においてであらう。世に眼をひらきはじめてた若者には、自分の姿は決して判断出来ない。彼らは自分の何ものであるかを知らず、混沌たる生命のままに生きて行く。それは様々の萌芽をふくむ可能性の時代だ。夢や希望や想像を追うて彼らは無意識の冒険家である。かうした放縦のもたらす作品は、たとへ稚拙でも甚だとらへ難い相をもつてゐるものだ。ゲエテが生涯を賭してかいた「ファウスト」や「ウィルヘルム・マイスター」と、青年時代わづか四週間でかきあげた「エルテル」を比較してみよ。後者の方が語るにははるかに困難である。難解な思想のあるわけではないが、放縦な生命の動きが我々を困惑させるのである。天才

の作品でなくともいい、各人が過去をふりかへつてみても、青春の時代は謎にみたされてゐる。何故いま我々がかうした生活をしてゐるか、その最初の動機は謎であつて、我々は謎を抱いたまま生きて行く。しかし成熟するにつれて（或は困惑するにつれてと云つた方がよいかもしれぬ）、人ははじめて青年時代の夢の意味を探らうと試みるらしい。偶然に支配されてゐる自分の裡に、一の宿命を達観しようとするのであらうか。そして結局、人間の生涯を決定するのは青年期だといふ感慨におちて行くやうである。

島崎藤村の「春」と「櫻の實の熟する時」は、青年期を描いた自傳的作品であるが、青年藤村の筆になつたものではない。「春」は明治四十年三十六歳の作、「櫻の實の熟する時」は大正三年四十三歳の起稿であつて、どちらも青年時代に別れを告げようとする頃の作品である。世の様々の経験をとり、人生の苦澁を味ひつつある人の眼を以て眺めた過去の姿なのだ。この點は充分注意しなければなるまい。無意識な冒険の所産ではなく、自己の青年時代に對する、周到に計量された探求なのだ。實際にあつたことの意味を、即ち詩と眞實をかいてゐるのである。



藤村は自己の青年時代を、過度に否定もせず、また溺るることもなく、或る餘裕をもつて凝視してゐる。この靜かな、しかも執拗な凝視は藤村の性格といへるが、「春」においてはじめて明瞭にあらはれてゐる。同時に、一定の距離をおいて回顧したとき、すべては旅であつたといふ感慨が彼の胸に湧く。人生は旅であり、自分もひとりの旅人にすぎない。過去にどれだけ堪へ難い苦しみがあつたにせよ、その暗い歩みを必然として眺め、意味を與へつつ、一の旅姿を構成して行くのだ。さういふときの藤村の眼は、絶えず懷疑的に光つてはゐるけれど、決して暖さを失つてゐない。どうかして肯定の苦に立ちたいと願つてゐる。自傳をかく氣持のなかには、必ず新しい生を求める心が動いてゐるのではなからうか。「若菜集」をかいた筆とは全く異なつたものだといふことを留意してほしい。

尙、藤村の青年時代——明治二十年代の文學的回顧を次に引用しておかう。

「私が白金の明治學院の學窓に居た時代のことを思ふと、當時に起つて來た學問と藝術の復活は可成めざましいものであつて、少年期より青年期に移る自分はいろいろな刺戟を受けた。

私の文學に志した時代はそれまで埋れて居た自國の古典が日本文學全書、歌學全書等といふ叢書になつて毎月の様に出版された最初の時であつた。徳川時代の文學、殊に元祿時代の文學があちこちの古い塵埃の中から掘り出されたのもその頃で、近松の淨瑠璃集が出版されたり、西鶴の著作が翻刻されたり、芭蕉その他の蕉門の諸詩人の書きのこしたものが漸く注意されるやうになつたりして、さういふクラシックの發見だけでも私達青年の受けた刺戟は少くなかつた。一方には十八世紀の末から十九世紀の初期に互つた歐羅巴の文學が非常に盛な勢で注意されるやうになつた頃でもあつて、殆んど私達はそれらの應接に暇がなかつた程だ。今日から見れば當時の學藝の世界は言はば處女地とも名づくべきで、國語には統一もなく、新しい詩歌はまだ形すら具へず一切が雜然たる有様であつたが、しかしその中を開拓して行かうとする人達のはげしい意氣込を考へて見たばかりでも何となく爽やかな感じが起つて來る。」

## 二 信仰



藤村は明治二十年、十六歳で基督教の明治學院に入學した。基督教の學校を選んだことは、藤村の自發的意志ではない。「恩人」なる人が、英語を修得させて彼を貿易商人にするつもりであつたのだ。むろん青年は、外部の期待に反して、おのが自由の道を歩まうとするものである。「明治の青年で、新島、内村、植村諸氏の言説に動かされないものがなかつたやうな一時代のあつたことを思へば、又透谷、樗牛、梁川諸氏の書き残したもので何等かの形で宗教に觸れないものないことを思へば、宗教の問題と理想とは早くも時代の意識に上つて來たと言へよう。」若き藤村も、かうした時代の雰圍氣にまきこまれて行つた。基督教を一の刺戟として、ひろく時代の理想や藝術の未來に思ひをひそめる青年となつて行つた。

開國とともに、日本は新しい精神と理想を求めた。傳統の復活が叫ばれるとともに西歐、文化への憧憬はますます青年の心を驅りたてた。當時のプロテスタントイズムが、胎動する若い魂に、どれだけの刺戟を與へたか、若く柔軟な心が、どんな情熱をもつてこの宗教を迎へたか。たとへば内村鑑三の「余は如何にして基督信徒となりし乎」等をよむなら

ば、當時の狀景を詳しく知りうると思ふ。いつの時代でもさうだが、新奇なものに對する流行心理が青年の間に在つたことは否定出來ない。時代の雰圍氣に青年は極めて敏感なものだ。一部の若者は、眞劍な氣持で基督を求めたであらうが、只何となく基督教に入つて行つた者も少くなかつたと思ふ。周圍の勧誘や強制によつて、つい何げなく洗禮をうけた者もあらう。藤村もその一人である。内村鑑三も然り。「余は遂に降參した」と鑑三は告白してゐる。「そして其に署名した。余は屢々自分自身に問ふ、余は斯る強制に降參す可きであつたかと。併し余は當時僅に十六歳の一少年に過ぎなかつた、そして余に『入る』ことを強制した學生達は悉く余より遙に大きくあつた。斯くて、御覽の如く、余の基督教への第一歩は強制されたものであつた、余の意志に反して、また(余は告白しなければならぬ)幾分余の良心にも反して。」と。しかし大切なことは基督教に入つたといふその形式ではない。この新しい教にふれようとした日本の若々しい精神、新らしい教を機縁として生れた青年の情熱の開花である。流派や教義は問題ではなく、求めるものの純粹な心をまづ尊しとしなければならぬ。



内村鑑三や島崎藤村が、基督教においてみた神とは、外國人のみた神と同一のものであつたか、「教會」といふ組織が教へる神と同一のものであつたか。鑑三の無教會主義は周知のところであらうが、その萌芽はすでに若年の頃にある。「余は山野を跋涉し、谷の百合花、天空の鳥を觀察し、『天然』を通して『天然』の『神』と交らんことを求めた。」と云つてゐるやうに、自由な旅人の眼に映つた神であつた。神は一なり、そして耶蘇がすべてであると云ふときも、鑑三の耶蘇は希臘の異教的な神々のやうに天空や花や鳥の間に美しく存在してゐるのであつた。自然に遍在する大きな美しい生命力の前に祈らうとする、詩人の心であつた。藤村の基督教も、内容的には鑑三と同じ経路を辿つてゐる。「櫻の實の熟する時」に次のやうな一節がある。

「お前はクリスチャンか、とある人に聞かれたら捨吉は最早以前に淺見先生の教會で洗禮を受けた時分の同じ自分だとは答へられなかつた。日曜日曜に定つた會堂へ通ひ説教を聞き讚美歌を歌はなければ濟まないことをしたと考へるやうな信者氣質から大分離れて來た。三度三度の食前の祈禱すら廢して居る。では、お前は神を信じないか、とまたある人

に聞かれたら自分は幼稚ながらも神を求めて居るもの一人だと答へたかつた。あやまつて自分は洗禮なぞを受けた、もし眞實に洗禮を受けるならば是からだ、と答へたかつた。」

この短い引用文のなかに、藤村の周到な心があらはれてゐるではないか。若年の頃、何げなく洗禮をうけたことへの淡い悔恨がある。當時の教會や信者氣質への失望がある。しかし藤村は「神」を否定する人ではない。幼稚ながらも神を求めて居る一人だといふ答は、おそらく今日の藤村からもきかれるのではなからうか。そのときの神とは何か。人間の氣持に様々な變遷があるやうに、神の姿にも幾多の變轉があつたであらう。私は神は一であると思つてゐるけれど、一なる神は千變萬化の姿であらはれるものだといふことを認めたい。戀する者にとつて戀人は神であらう。山嶽の頂上に立つ者にとつて流れ行く雲は神とみえるかもしれない。佛陀も耶蘇も、その時々の人の上に適當な姿で君臨するものだ。そして一切は自然の心のあらはれではなからうか。どんな美しいものも死から免れることは出來ない。しかし慘酷な死の次に、自然は再び美しい花を咲かせる。かかる無常にして無限の生命に對する憧れから、我々はふと神といふ嚴な言葉につきあたるのだ。祈りたく思



ふのだ。「櫻の實の熟する時」には、また次のやうな一節もある。

「神は何故に斯く不思議な世界を造つたらう。何故にあるものを美しくし、あるものを殊更醜くしたらう。何故に雀の傍に鷹を置き、羊の側に狼を置き、蛙の側に蛇を置き、鶏の側に鼯鼠を置いたらう。何故に平和な神の教會にまで果しなき暗闘を賦與し、富める長老と貧しい執事とを争はずだらう。

捨吉は斯く思ひ沈んだ。

姦淫する勿れ、處女を犯す勿れ、嫂を盗む勿れ、其他一切の不徳はエホバの神の誠むるところである。バイロンの一生は到底神の嘉納するものとも思はれない。英吉利の詩人が伊太利へ遊んだ時、エニスの町で年頃な娘をもつた家の母親はあの美貌で放縱な人を見せまいとして窓を閉めたといふではないか。それにしても、萬物を悲觀するやうなバイロンの詩が奈何して斯う自分の心を魅するのだらう。あの魅力は何だらう。假令彼の操行は牧師達の顔を澁めるほど汚れたものであるにせよ、あの藝術が美しくないとはいへない。若者の胸に宿つたこの疑惑は、二つの大きな思想の流れの相剋を、日本の一時代の青年

に象徴してゐるとも考へられる。即ち基督教思想と希臘思想、西洋の二大潮流を、明治の初頭に一部の青年は遠く瞥見したのである。藤村達の「文學界」には、この二大潮流の波紋が、極めて若々しいかたちで漂つてゐたのではなからうか。透谷や藤村は、かかる苦しみを漠然とながら味つた最初の日本人だつたかもしれない。しかし基督教から異教美への推移は、「春」「櫻の實の熟する時」をよんでもわかるやうに、大げさな思想的苦悶として現はれてゐない。洗禮も、教會からの離脱も、所謂轉身の苦痛を伴ふほどのものではない。これは傳統の然らしむるところでもあらう。宗教上の苦しみよりは、むしろ戀愛の苦しみとして描かれてゐるのだ。鑑三と藤村との本質的親近性にも拘らず、この二人が兩極の道を歩んで行つたことは興深い。鑑三は決然としてバイロンを撃つ人となつた。あらゆるものの上に彼は唯一の神基督をおき、他の一切を許さうとしなかつた。何げなく基督の門をくぐりながら、二人の運命は極端にちがつて行つた。青年時代のわづかの動機は謎である。人間の生涯を決定するものは、ほんの偶然だと言へないこともあるまい。

基督教思想と希臘思想の潮流について若干つけ加へておきたい。明治になつてから、基



基督教の方面では内村、新島、植村等のユニークな先驅者が現はれたのに、希臘やルネッサンスの傳統を日本にもたらすべき同じやうにユニークな先導者が何故現はれなかつたのであらう。藝術にも宗教にも日本には古い傳統がある。明治の基督教は、教義としてよりも一の理想精神として、日本人の純粹な宗教心を再生させたといへる。同じやうに、日本の古い藝術は、希臘精神の導入によつて一層鮮かによみがへつたのではなからうか。藤村達の「文學界」や後の「白樺」派はこの方面に一つの仕事を成就した。しかしより根本的に、たとへばゲエテが伊太利へ赴いてルネッサンスの心を自國へ植えようとした如く、生涯を希臘精神に捧げそれを宿命とした詩人はなかつたやうだ。基督教は多くの傳導師を東洋へ派遣したが、希臘の神々は怠惰の上に座してゐる。宗教の仕事と藝術の仕事を同日に談ずることは出来ないが、これらのことは今日の我々にまで残された一つの問題だと思ふ。

藤村はかかる問題を提出した最初のひとりであつた。しかし藤村は、一の知識として、或は單なる鑑賞の對象として提出してゐるのではない。右に引用した文章からも窺はれるやうに、基督教も異教美を慕ふ心も、すべて自己の内心の苦しみとして味つた人だ。小さな己の生き方を求め「どうかして生きたい」といふ情熱、求道の心から描いたのである。私は信仰といふ題のもとに、主として藤村の基督教時代の移り行きを瞥見したのであるが、「櫻の實の熟する時」「春」は、信仰の書といふよりはむしろ戀愛の書、戀愛によつて背徳者となるものの苦惱の書といふべきであらう。だが、この苦惱の裡にこそ、いかなる宗教的儀禮にもわづらはされぬ純粹の祈りが聞かれるのである。

### 三 戀愛

「ある日、捨吉は麴町の學校から下宿へ戻つて來た。彼は自分の部屋の疊へ額を押宛てるやうにして獨りで神の前に跪いた。

捨吉が幼い心の底にある神とは、多くの牧師や傳導師によつて説かるる父と子と精靈の三位を一體としたやうなものでは無かつた。神は知らざるところなく、能はざるところなく、宇宙を創造し攝理を左右して餘りあるほどの大きな力の發見であるとは言へ、左様した神の本質は先入主となつた極く幼稚な知識から言へるのみで、捨吉の心の底にあつた信



仰の對象は必ずしも基督の身に實際に體現せられ、基督の人格に合致したやうなものではなかつた。有體に言へば、エホバの神とはあの三十代で十字架にかかつたといふ基督よりももつと老年で、年の頃およそ五十ぐらゐで、親しい先生のやうでもあれば可畏いお父さんのやうでもある肉體を具へた神であつた。半分は人で、そして半分は神であるやうな斯の心像に、捨吉は舊約的な人物に想像せらるるやうな風貌を賦與へて居た。例へば、アブフハムの素朴、モオゼの嚴肅。斯のエホバの神が長いこと捨吉の心の底に住んで居たと聞いたら、笑ふ人もあるだらうか。實際、他界のことにかけては、捨吉は少年時代からの先入主となつた單純な物の考へ方に支配されて居て、まるで子供のやうにその日まで暮して來たのであつた。

隠れたところをも見るといふ斯の神の前に捨吉は跪いた。おごそかなエホバの神のかはりに、自分の生徒の姿が瞑つた眼前にあらはれて來た。若々しい血潮のさして來て居るその頬、かがやいたその眸。白い、處女らしいその手。

「主よ、ここにあなたの小さな僕が居ります。」

祈らうとしても、妙に祈れなかつた。

涙ぐましい夕方が來た。捨吉は獨りで自分の部屋を歩いて、勝子の名を呼んで見た。彼は自分の内部に眼をさましたやうな怪しい情熱が何處へ自分を連れて行くのかと思つた。言ひあらはし難い恐怖をさへ感じて來た。浮いた心からとも自分ながら思はれなかつた。

〔「櫻の實の熟する時」より〕

藤村に訪れた青春の夜明けは、かやうに重厚で内省的な苦しみとともに始つたのであらうか。戀愛のめざめ、性の覺醒が、與へられた基督信仰の道から彼をそむかせた。祈らうとして祈れぬ氣持は、背教の第一歩である。異端への道である。教へられた神ではなく、自ら創造した神——それはふと戀人の姿に變つて行く——の前に如何ともし難い欲情をもつて悶えるより他はない。バイロンに寄せた憧憬には、彼自身のみたされざる心の告白がある。青年がはじめて「自己」を感じ、新生の始るのを悟るときは戀愛であらう。それは藤村の場合、靜かに鈍重な相で展開されて行つた。「櫻の實の熟する時」をみても、「春」をみても、主人公岸本捨吉の戀愛は決して華美なものではない。才子佳人を得たりなどと





いふ言葉とはおよそ反対の印象をうける。戀するものの喜びの聲、森の中にひびく朗らかな談笑や、水邊の戯れや、熱い接吻や抱擁や、さうした生命の高いひびきは聞くことが出来ない。

トルストイの言葉に、「愛する者は天才的である。戀してゐる者を御覽なさい、皆天才的です」といふのがある。しかし藤村の描いた戀人は決して天才的ではない、むしろ鈍才にみえるほど沈鬱なのだ。戀人として輕快に振舞ふすべての行爲を、捨吉は悉く内的な自己苛責に轉化してしまふ。逡巡しつつひとり思ひ悩んでゐるのみであつて、彼は恐らく日本文學にあらはれた一番不器用な戀人かもしれない。だが戀愛を動機として、この人生を内部深くさぐつて行く執拗な力は、戀人としての外的華美を失ふに比例して益々つよくなる。若き藤村は、北村透谷の戀愛觀にあらはれたあの高い調子を、自己の沈鬱な調べに編曲しなほしたのだ。

「戀愛は人生の祕論なり。戀愛ありて後、人生あり。戀愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ。然るに最も多く人生を觀じ、最も多く人生の祕奥を究むるといふ詩人なる怪物の最も多く戀愛に罪業を作るは抑も如何なる理ぞ。」（「厭世詩家と女性」）

「天地愛好すべき者多し。而して尤も愛好すべきは處女の純潔なるかな。もし黄金、瑠璃、眞珠を尊しとせば、處女の純潔は人界に於ける黄金、瑠璃、眞珠なり。もし人生を汚濁穢染の土とせば、處女の純潔は燈明の暗牢に向ふが如しと言はむ。もし世路を荆棘の埋むところとせば、處女の純潔は無害無痕にして、荊中に點ずる百合花とや言はむ。われ語を極めて我が愛好するものを嘉賞せんとすれども、人間の言語恐らくは此至寶を形容し盡くすことを能はざるべし。噫人生を厭惡するも厭惡せざるも誰か處女の純潔に遭うて欣樂せざるものあらむ。」（「處女の純潔を論ず」）

かういふ文章が明治二十年代にかかれた。そこにあふれる純一な情熱が、當時の青年の胸に火を點じ、文學の黎明を準備したのである。若き藤村はこの激しい調べ——それは基督教の信徒を誘惑し攪亂する惡魔の調べだつたかもしれぬ——に心をひかれた一人である。そして捨吉の戀愛も、かやうな情熱を刺戟とし伴奏として營まれたのであつた。北村透谷は自分の戀人を奪ふやうにして自由結婚をした。兩親や周圍の反對を押しきり、生活の苦



しみを顧みず、ひたむきに愛するものとともに苦難の道を進んで行つた。しかし「春」や「櫻の實の熟する時」の主人公捨吉は、戀人勝子を遠まきにして様々思ひ悩んでゐる。師と弟子といふ特異の關係もあつたらう。勝子には既に許嫁の人もあつた。それらすべての外的事情を自己一身の重荷として、しかも戀人への純一の愛を失はず、益々孤獨に閉ぢこもりながら思ひ惑つてゐる。感情の露骨な表現はないが、ずつと奥の方で悶え苦しむ性慾が文章の背後にうかがはれる。

「こひすてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか」といふ歌があるが、「人知れずこそ思ひそめしか」の餘韻が捨吉の戀愛には終始つきまといつてゐる。それは藤村のダンディズムでもあらう。自分の愛を粗末な輕薄なものにしたくないといふ述懐もあつた。「初戀を思ふべし」といふ一句が「飯倉だより」のなかにあるが、自己の二十代を顧みて、藤村はいかに深い愛着と周密な心をもつて戀愛の想ひ出を綴つたかが窺はれる。だが戀愛には多少の輕薄さを——エルテル的輕薄さを私は欲しい。「春」「櫻の實の熟する時」の、水も洩らさぬ慎重さに必ずしも同感するものではない。

愛情の内攻する苦しさに堪へかねて、捨吉は、教職を去り教會の籍を脱してひとり旅に出かける。「旅」は、身を動すとともに心を起さんがための行爲である。自らひきうけた苦しみの重荷を背負つて、人生そのものの奥へ旅立つことを意味する。それは一つの決意であつて、芭蕉の、「古人も多く旅に死せるあり」といふ悲壯なひびきをつたへてゐる。捨吉はあてもなく山野を彷徨したり、友人知己の間に宿つたり、時に死を決心したり、結局破れ姿で「恩人の家」へ歸るのであるが、「我は敗者なり」といふ沈痛な心が描き出されてゐる。

「一體奈何いふ量見で其様に長く遠くへ行つて居たんだね。」

この老祖母の問は、誰も聞いて見たいと思ふことであつた。

「浮世を捨てたんでせうサ」

斯う叔父は叔父らしく解釋を下した。

岸本は無言である。彼が無言なのは、言へて言はないのでない、言へなくて言はないの



である。漂泊のそもそものは民助に告げた通り、彼が勝子に逢つてから、激しい精神の動揺を感じて來たのは事實だ。自分の家が自分の家でなくなつて來たのも事實だ。物の奥底に隠れた意味を考へるやうに成つたのも事實だ。洪水が溢れて來たやうに押出されて行つたのも事實だ。彼が其日まで經て來たことは、すべて、遽に起つた「新生」の光景である。何の目的があつて、其様な長旅をしたかと問ひ詰められても、それは口に言へず、目にも見えない。「春」

#### 四 友情

青年の最初の日結ばれた友情は、たとへ利那でも、その人の生涯に何らかの影響を及ぼすであらう。友情といふかたちでなくとも、たとへば善き師や戀人との邂逅であつてもよい、若年に心の窓をあけてくれた人の印象は、いつまでも消え去ることがあるまい。そして師でも戀人でも、心の窓のひらく時の交りには、多分に友情的なものがあるのだ。友情は一つの思想であり、人はそれを結ぶためにも才能がなければならぬ。

しかし、友情は實に偶然的であつて、善い友を得ようとして、必ずしも善い友は得られぬ。また誰が善友で誰が悪友か、これもはるか後年にならなければ判断出來ないことだ。青年時代の友情は殆んど天恵と云つていい。そこに友情の面白さもある。北村透谷と島崎藤村の邂逅を誰が豫想し得たらう。私は敢へて「運命」といふ言葉を使はう。乃至は「天」がこの二人をひきあはせたとでも云ふより他にない。「櫻の實の熟する時」「春」は、主人公の戀愛の書ではあるが、しかしこの戀愛が透谷達の友情によつていかに深く支へられてゐたか。この二つの作品ほど、友情といふ思想について教へてくれるものも少いであらう。戀人に遭つて、激しい精神の動揺を感じて來た日、自分の家が自分の家でなくなつて來た日、物の奥底に隠れた意味を考へるやうになつて來た日、この感受性の鋭い若い魂が、同じやうな魂と觸れあつたときはじめて友情が芽生える。人生の深い意味を探らうとする心と心が、純粹に接する刹那だ。それは普通の社交であつても駄目だ、政治的結合によつても、肉親的親交によつても駄目だ。すべての階級や血族や年齢を越えて、あたかも戀愛のやうに觸れあふのが友情で、ある場合には戀愛と區別出來ないことすらある。たとへば



プラトンの「饗宴」をみよ。古代希臘においては、道を求める者はまづ友情を求めた。ときには同性愛といふ變態的姿をとつたが、男性と男性との友情にのみ眞の思想的交りを認めたとその態度は美しい。

友情は或る場合、戀愛より高貴な感情なのもしれぬ。フロオベルとジョルジュ・サンドとの書簡往復をみると私はそのことを痛感する。男性、女性といふ性的差異が消えて、男でもない女でもない、しかも實に愛情の深い人間そのものがあらはれてゐるのだ。性があつて、性がなく、ふしぎな魂の往來がある。

「春」には、青木駿一の名によつて、北村透谷の姿が刻明に描かれてゐる。青木と岸本は、友人であり、また或る意味では師と弟子でもあり、先驅者と後繼者の關係でもある。岸本にとつて、この人生における眞の洗禮は、教會によつてではなく、青木によつて與へられたと云つてもよからう。藤村自身、戀愛の苦しみがあつたにせよ、透谷との邂逅がなかつたならば、その戀愛を機縁として人生の奥深く辿つて行く決意が深められなかつたらう。この友情によつて、藤村の魂は根源から揺り動かされたと云つていい。藤村は、透

谷とはじめて會つた日の感動を、次のやうにかいてゐる。

「逢つて見た青木は、思つたよりも書生流儀な心易い調子で、初對面の捨吉を擱へて、いきなりその時代の事を云ひ出すやうな人であつた。麴町の吉本さんの家で、例の應接間の大きなテエブルの前で、捨吉は自分の前に腰掛けながら話す四つか五つばかりも年長な青木を見た。男らしい眉の間に大人びた神経質の溢れて居るのを眺めたばかりでも、早くからいろいろなところを通越して來たらしいその閱歷の複雑さが思はれる。捨吉の心を牽いたものは殊に青木の眼だ。その深い瞳の底には何か燃えて居るかと思はせるやうな光のある眼だ。何よりも先づ捨吉はその眼に心を傾けた。」

透谷の生ける姿は、「春」にあますところなく描かれてゐる。私にとつては、「春」の魅力の大半が彼の姿にあつたと云つても過言でない。透谷は、時代の先驅者にふさはしい戰鬥的で激情的な精神の所有者だつたらしい。しかし彼の肉體は、この激しい意力を支へるにはあまりに弱かつた。彼は或る意味で一個の英雄でありながら、過度に繊細で感じ易い魂のため、「感受性の犠牲者」たるべき運命を擔はなければならなかつた。藤村の「北村



透谷二十七回忌に「(飯倉だより)といふ回想は、深い愛惜にみちた透谷論であるが、その中で藤村は、彼の生涯をつぶさに述べつつ「こんな風にして透谷の惜しい生涯は終つた。彼は誠意の籠つた戀愛をも、そこから出發した結婚生活をも、すべて疑問としてこの世に残して置いた。彼の生涯は結局失敗に終つた戦ひだつた。(中略)しかしその慘愴とした戦ひの跡には拾つても拾つても盡きないやうな光つた形見が残つた。彼は私達と同時代にあつて、最も高く見、遠く見た人の一人だ。そして私達のために、早くもいろいろな支度をして置いて呉れたやうな氣がする」と感慨を述べてゐる。

しかし藤村の「春」からうける感じはもつと強烈なものだ。あの時代の激情的な先驅者だけでなく、同時に、文學者といふものの本質と運命を象徴してゐると考へられる。世の常からみれば、幼い兒を未亡人に残したまま中途倒れたのは失敗であつたらう。彼の生涯は結局徒勞だとも云はれよう。しかし「失敗に終つた生涯」の中に、藤村は不滅の詩人を祝祭した。

透谷の姿を、あれほど痛切に描きえたのは、友情の賜物であらうが、また成熟した眼をもつて彼を靜かに眺めたこと、つまり四十歳の藤村が回顧しつつ描いたことが大きな原因になつてゐると思ふ。もし二十代の藤村が「春」をかいたとしたならば、ああした激情的な姿の描寫はよほど混亂したに相違なく、彼の結婚生活や日常の生活に筆をつくすことは不可能であつたらう。「春」には、壯年者によつてのみ、はじめてとらへられる透谷の姿がある。たとへば次のやうな一節。

「父さん、鶴ちゃんは斯ういふ好い前掛を戴いて來ましたよ。」と操は夫の顔を眺めながら言つた。

「見て下さい、鶴ちゃんに好く似合ひませう。」  
縁だけ刺繡のしてある、白い、品の好い前掛は、鶴子の邪氣ない顔附を一層愛らしくして見せた。

「東京の叔母さんが下すつたんです。」と操は附添した。  
「へえ、好いのを戴いて來たね。」と青木は答へる。



「鶴ちゃん、父さんにお話しないの？」と操は母らしく微笑ほほえんで見せて、聽て乳房を衝へさせながら、實家の話を始めた。青木は眼前の事物に興味を失つたといふ風で、煙草ばかり燻して居る。

「奈何でした、お仕事の方はあれから何か爲さいましたか。」と操は尋ねた。

「俺かい。」と青木は不安な眼附をして、「俺は考へて居たサ」

「考へて？」ホ、ホ、ホ、父さんは此節煙草ばかり喫んで居らつしやるぢや有りませんか。煙草が可くないんでせう。」

「馬鹿言へ。煙草でも喫まなくつて、やりきれるものか。」と青木は妙なところへ力を入れた。

「内田さんが譯した『罪と罰』の中にも有るよ、錢取りにも出掛けないで一體何を爲て居る、と下宿屋の婢まんなに聞かれた時、考へることを爲て居る、と彼の主人公が言ふところが有る。彼様おあいふことを既に言つて居る人が有るかと思ふと驚くよ。考へることを爲て居る——丁度俺のは彼あれなんだね。」

操には夫の言ふ意味が能く汲取くみとれなかつた。

「貴方、奈何かなすつたんぢやないんですか、大變顔色が悪いんですよ」と言はうとしたが、其を口へは出さなかつた。

若い夫婦の「慘として相對する日」の姿を藤村は冷靜に描いてみせる。見るべきものは實に正確に見てゐるといふ感じをうける。そして透谷の夫人も、或る意味でまた「しつかりした人」としてかかれてゐるのだ。

「春」のなかには、透谷その人である青木をはじめ「文學界」同人の姿が幾人か登場するが、激しい論争といふものがない。若い魂と魂のふれあふとき、それは個性の自覺を意味する。いくつかの異なる個性は互に争ふであらう。友情は他面において眞實の敵をつくるものだ。また孤獨の何ものであるかを教へるのも友情である。しかし「春」をみても、「櫻の實の熟する時」をみても、遂には離ればなれになつて行く場面はあるけれど、互の意志を露骨に出して撃ちあふ激しさはない。これは藤村その人の人柄にもよるのであらうか。



前に引用した、青木との最初の邂逅に「何よりも先づ捨吉はその眼に心を傾けた」といふ一句がある。透谷の病的な燃えるやうな眼を、じつとみつめてゐた藤村自身の眼を想像してみよ。この二つの眼の出會を私は興味ふかく思ふ。透谷と藤村は、性格的に對蹠的である。ひとりは疲れ易い肉體と、病的な神経と、露骨な戰意を示す人であるのに對し、他は頑丈な肉體と、根づよい神経と、沈鬱に深く喰ひいるやうな性格の所有者である。どれだけ心が破れても、自然によつて恢復する可能性を失はぬ。藤村は、透谷の激しい短生涯を、執拗に凝視してゐたのだ。一見鈍重に見えるが、彼の凝視力は無類の持続力をもつてゐるのだ。假りに透谷が生き永らへて、藤村の若い姿を描いたとしたらばどうであらうか。透谷は藤村の、一旦見据えたら永久に離れぬやうな眼差をどうみたであらうか。透谷の瞳には、薄命の天才の、狂ふやうな光りが燃えてゐた。藤村は天才といはるべき作家ではない。しかし、藤村の瞳には、透谷の短い生涯を、百年かかつても咀嚼しなければやまぬといふ程の驚嘆すべき決意とエネルギーが溢れてゐたのではなかつたか。さういふ藤村の根氣はやはり一種の狂氣であらう。

「春」「櫻の實の熟する時」、どちらをみても、透谷と藤村の執拗な、らみあひがある。其他の友人は影のやうに朦朧と背景に漂つてゐるのみ。しかしこの一團の友情の描寫は、遠い霧につつまれた一種の哀愁ともいふべきものを傳へてゐる。日本の夜明けに、多感な若者達が、互に肩を組みつつ時の嵐の中を漂つて行つた。さうした雰圍氣を、藤村の筆が細やかに描き出してゐることもみのがしえない。彼らが好んで歌つたといふオフエリヤの歌が全篇に餘韻してゐる。

いづれを君が戀人と

わきて知るべきすべやある。

貝の冠と、つく杖と、

はける靴とぞしるしなる。

かれは死にけり、我ひめよ、  
かれはよみぢへ立ちにけり、



かしらの方なたの苔を見よ、  
あしの方には石立てり。

柩をおほふきぬの色は  
高ねの花と見まがひぬ。  
涙やどせる花の環わは  
ぬれたるままに葬りぬ。

### 五 生のあけぼの

「春」「櫻の實の熟する時」、いづれも暗い作品である。「櫻の實の熟する時」は、藤村がフランス滞在中稿をつづけたものであるが、その頃の氣持を反映してゐることは否定出來ない。この點については第三章を参照して頂きたい。しかし、藤村の青年時代も事實暗澹たるものだったことは、後年二十代を顧みて、「長い冬の背景があつた」と述懐してゐる

のをみてもわかる。「春」にかかれたやうに、岸本は青木を失ひ、ついで愛人の死に遭ふ。「岸本が落ちて行つた思想かんがへでは、東西の大家が自分等青年に遺して置いて呉れた文學上の産物も多くは人間の徒勞を寫したものに過ぎない。悲壯な戯曲も徒に流した涙である。微妙な詩歌も溜息である。何を苦しんで自分等は同じ事を繰返す必要があらう。——斯う暗く考へるやうに成つた。何の爲に其日まで骨を折つて來たのか、それが岸本には解らなくなつた。」かうした失望の想ひは、全篇をよみ來つたとき、つよい説得力をもつて讀者に迫つて來る。藤村は青年時代に、早くも徒勞の悲しみを味つたのであらうか。友情と戀愛を一舉に失つた人が、その悲痛のどん底から、いかにして新しい生を發見して行くかは一つの大きなテーマであらう。「春」は、すべてを脱れて仙臺へ赴く捨吉の門出で終つてゐる。これは作品の結末であるが、藤村自身かやうな一時期を経た後、仙臺ではじめて早春の抒情歌を歌つたと述べてゐる。周知のごとく彼の早い出發は「若菜集」である。藤村にとつて、旅は一の脱出であり、變轉のための行爲であつた。「心を起さうと思はば先づ身を起せ」は、藤村が生涯にわたつて實行した箴言である。新しい旅に出かけるこ



とによつて、今まで自分の経て來た姿を顧み、それもまた人生に必至の旅だつたと回想する。「眼前の暗さも、幻滅の悲しみも、冬の寒さも、何一つ無駄になるものなかつたと思ふやうな春の來ること」を信ぜずにはゐられないのだ。透谷に比べるなら、藤村は或る意味で自然の寵兒である。透谷は一旦心に打撃をうけると、自然といへども彼を恢復させることは出来ない。透谷の眼は自然の中に一層兇暴な動亂をみた。自然すら彼にとつては一種の狂的現象だつた。しかし藤村は、荒れ狂ふ自然の裡にも尙暖い春の復活を思ふことが出來た人だ。自然の根づよさを、最も正統的にうけついで肉體と心の所有者だつた。彼にとつて、「旅」とは一種の快癒術であつたらう。逃亡であり放棄であり同時に新生の胎動であつたらう。それがたとへ慘たる彷徨に終つても、求める根づよさは失はれない。

今日、「早春」に収録された初期の抒情詩（仙台雜詩）は最初の調べであつた。「春」をよんで彼の暗い一時期を感じた人は、「早春」をひもどいたとき若草のやうな光りにみちた聲に驚くであらう。旅の靜かな宿で、過去を反皺し、冬に培はれた根を暖めながらやがてのびのびと花を咲かせようとしてゐる。その時の藤村の歌には次のやうな輕快な調べさへ

た。

うてや鼓の春の音

雪にうもるる冬の日の

かなしき夢はとざされて

世は春の日とかはりけり

ひけばこぞめの春霞

かすみの幕をひきとぢて

花と花とをぬふ絲は

けさもえいでしあをやなぎ

霞のまくをひきあけて

春をうかがふことなかれ



はなさきにほふ蔭をこそ  
春の臺うたなといふべけれ

小蝶よ花にたはぶれて  
優しき夢をみては舞ひ  
酔うて羽袖はそでもひらひらと  
はるの姿をまひねかし

緑のはねのうぐひすよ  
梅の花笠ぬひそへて  
ゆめ静かなるはるの日の  
しらべを高く歌へかし

この詩を私は最上のもものとして引用するのではないが、かかる軽い調べが藤村の心から湧き出たときもあつたのだ。その頃の藤村は、若い生命をのばすことの出来なかつた過去の暗さへ、つとめて反抗しようと試みてゐたやうである。「小さな経験がすべて詩になつた。一日は一日より自分の生涯の夜が明けて行くやうな心持を今だにわたしは想ひ起すことが出来る」と述懐してゐる。最初の詩集に掲げられた序文の一節——「生命は力なり。力は聲なり。聲は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。」(明治三十七年)——に當時の藤村の決心をみる事が出来る。自然に没入し、再生を求めんとした魂のおのづからなる調べがあつた。

しかし藤村詩集中、最も見事なものはすべて漂泊の歌である。旅人の喜び悲しみ憂ひの聲は、藤村の生涯にわたつて離れぬが、そのすべてが初期の詩集にあらはれてゐる。序章に一節を引用した「草枕」は、藤村自らいふごとく、この時代の心をあらはした代表作と云つてよからう。彼はつとめて生命の夜明けを歌はうとした。ともすれば沈鬱な調べに變つて行つたが、——散文に移るとともに益々暗い影を帯びて來たが、——青年時代の「生



のあけぼの」は、おそらく藤村自身にとつても生涯の憧憬であつたらう。彼はいつでもそこへ歸つて、そこから一筋の道を歩みつづけようと思構へてゐる。

## 第二章 生々流轉

### 一 破戒

「破戒」は藤村が詩から散文へ移つたときの最初の長編小説である。明治三十七年三十三歳の起稿である。「櫻の實の熟する時」「春」「家」等、自傳的要素の濃い作品系列の中で、「破戒」だけは特異の素材を扱つてゐるやうにみえるが、根底を流れるものは詩にひとしい青春の息吹である。「早春」が詩における青春の書であるならば、「破戒」は散文に於ける青春の書と云つてよからう。

藤村は序文（藤村文庫・再刊）のなかで、「風雨三十餘年、この作の中に語つてあるやうなことも、又その背景も、現時の社會ではない。曾てかういふ人も生き、曾てかういふ時もあった。藝術はそれを傳へていい筈だ。さうわたしは思ひ直した。」と再刊の意を述べ、



また「わたしはむかしを弔はうとする人のために墓じるしを新しくするやうな心持で、もう一度この部落の物語を今日の讀者にも読んで見て貰はうと思ふ」とかいてゐる。この序文は藤村自身が題材のもたらした反響にとらはれすぎたもので私の同感出來ぬところである。

「破戒」が今に到るも新鮮な光りを失はないのは、決して題材の特異性にあるのではない、むしろ作者の青春の苦惱が特異な人物を通しての故に、一層つよく人々をうつのだ。「若菜集」や「落梅集」の歌は、この作の到るところにひびいてゐる。少くとも私にとつては、「破戒」は散文にかかれた「早春」以外の何ものでもなかつた。藤村の社會問題に對する關心、民衆への愛情、部落民へのヒューマニスティックな態度を指摘する人もあるがさういふ距離を云々することは不當だ。總じて藤村は何かの態度を必要としてゐない。主人公丑松を通して、彼は自分の情熱をムキに語つてゐるにすぎない。その情熱は生命の秘密を解かうとする情熱だ。「春」や「家」にみられぬ、作者のあらはな息吹を感じることが出来る。「千曲川のスケッチ」における自然と人生の靜かな描寫も、この作に吸収されると

或るつよい熱氣を帯びてくるのだ。

丑松は特殊部落の生れである。自分の出生を一生涯人に隠せ、もしそれがあらはれると破滅だといふ父の言葉をまもつて、彼は師範學校を卒業し信州の村の小學教員となる。この作をみると、特殊部落民に對する侮蔑の念は、我々の想像出來ぬほど激しいものだつたことがわかる。それは或る時代の悲しむべき因習にすぎない。かやうな因習がなければ丑松の悲劇もありえなかつたらうと思はれる。一面において丑松は因習の犠牲者ともいへよう。「元來君は鬱いばかり居る人ぢや無い。唯あまり考へ過ぎる。もうすこし他の方面へ心をむけるとか、何とかして、自分の性質を伸ばすやうに爲たら奈何かね。」——事情を知らぬ友人の言葉である。丑松はこの注告に對してどうすることも出來ない。彼の生の秘密——不可避の運命を如何ともし難い。或る強制的な絶對的な苦惱である。しかし、丑松の心の重荷は、因習からくる苦痛のみではない。これらのすべてを感受する彼の感情が鋭敏すぎるのだ。因習の犠牲者たる運命を擔つて、彼は同時に感受性の犠牲者でもある。そこにこの書の青春の息吹がある。また藤村自身の青春の告白が。



「父はこの烏帽子ヶ嶽の麓に隠れたが、功名を夢見る心は一生火のやうに燃えた人であつた。そこには無慾な叔父と大いに違ふところで、その制へきれないやうな烈しい性質の爲に、世に立つて働くことが出来ないやうな身分なら、寧ろ山奥へ高踏め、といふ憤慨の絶える時が無かつた。自分で思ふやうにならない、だから、せめて子孫は思ふやうにしてやりたい。自分が夢見ることは、何卒子孫に行はせたい。よしや日は西から出て東へ入る時があらうとも、この志ばかりは固く執つて變るな。行け、戦へ、身を立てよ——父の精神はそこに在つた。今は丑松も父の孤獨な生涯を追憶して、あの遺言に籠る希望と熱情とを一層力強く感ずるやうに成つた。忘れるなといふ一生の教訓のその生命——喘ぐやうな性の靈魂の其呼吸——子の胸に流れ傳はる親の其血潮——それは父の亡くなつたと一諸にいよいよ深い震動を丑松の心に與へた。ああ、死は無言である。しかし丑松の今の身に取つては、千百の言葉を聞くよりも、一層深く自分の一生のことを考へさせるのであつた。」

「……勇み立つ青春の意氣もまた丑松の心に強い刺激を與へた。譬へば、丑松は雪霜の下に萌える若草である。春待つ心は有ながらも、猜疑と恐怖とに閉ぢられて了つて、内部の生命は發達することが出来なかつた。あゝ、雪霜が日にあたつて、溶けるといふに、何の不思議があらう。青年が敬慕の情を心ゆく先輩の前に捧げて、生きて進むといふに、何の不思議があらう。見れば見るほど、聞けば聞くほど、丑松は蓮太郎の感化を享けて、精神の自由を慕はずに居られなかつたのである。言ふべし、言ふべし、それが自分の進む道路では有るまいか。かう若々しい生命が丑松を勵ますのであつた。」

藤村が序文にしるしたごとく、「あるものは前途を憂ふるあまり身をもつて過去を掩はうとし、あるものはそれを顯はすことこそまことに過去を葬る道であるとした。」——「破戒」にはこの二つの像があり、この二つの間を往復するものもまた人の世の姿であらうと述べてゐる。この述懐は「破戒」に對してよりもむしろ「新生」に對して一層適切ではあるまいか。丑松とその父の間柄、丑松の告白の衝動は、殆ど同じかたちで「新生」のなかに生かされてゐる。題材の特異さを超えて、それが藤村自身の切實な問題であつたことがうかがはれる。丑松がこの二つの間を往復し、最後に一切を告白してその土地を去るに到るまでの描寫はつよい迫力をもつてゐる。決して身をあかすなといふ父の「戒」を「破」



つて敢へて赤裸々のまま人生に進まうとする決意——この悲壯な美しさは既に「新生」の筆を豫言してゐるやうなものだ。藤村の作品にはめづらしい戯曲的構成も、「破戒」のすぐれた特徴であらう。「若菜集」や「落梅集」の詩が散文のかたちで強烈ににじみ出てゐる。憂悶も生の渴望も戀情も美しい抒情も、それら一切が波濤のやうにうねりつつ、この一作に結晶したとみられよう。たとへば、丑松が父の死とともに故郷の山河に歸り、幼年の日の戀を偲ぶ一節がある。

「楽しい追憶の情は、唐人笛の音を聞くと同時に丑松の胸の中に湧上つて來た。朦朧ながら丑松は幼いお妻の俤を忘れずに居る。はじめて自分の眼に映つた少女の愛らしさを忘れずに居る。あの林檎畠が花ざかりの頃は、其枝の低く垂下つたところを彷徨つて、互ひに無邪氣な初戀の私語を取交したことを忘れずに居る。僅かに九歳の昔、まだ夢のやうなお伽話の時代——他のことは多く記憶にも残らない程であるが、あの無垢な情緒ばかりは忘れずに居る。……」

かういふ追憶の情は、とは言へ、深く丑松の心を傷けた。平素もう疑懼の念を抱いて

苦痛の爲に刺戟き廻されて居る自分の今に思ひ比べると、あの少年の昔の樂しかつたことは。噫、何にも自分のことを知らないで、愛らしい少女と一緒に林檎畠を彷徨つたやうな、楽しい時代は往つて了つた。もう一度丑松はさういふ時代の心地に歸りたいと思つた。もう一度丑松はあの少年の昔と同じやうに、自由に、現世の歡樂の香を嗅いで見たいと思つた。かう考へると、切ない慾望は胸を衝いて春の潮のやうに湧き上る。不思議な星の下に生れた人の子としての悲しい絶望、愛といふ樂しい思想、そんなこなが一緒に交つて、若い生命を一層美しく見せた。……」

右の文章から人は「若菜集」の「初戀」といふ一篇を想起するであらう。

まだあげ初めし前髪の

林檎のもとに見えしとき

前にさしたる花櫛の

花ある君と思ひけり



やさしく白き手をのべて

林檎をわれにあたへしは

薄<sup>うす</sup>紅<sup>くれなゐ</sup>の秋<sup>あき</sup>の實<sup>み</sup>に

人<sup>ひと</sup>こひ初<sup>はじ</sup>めしはじめなり

林檎畑の樹<sup>き</sup>の下<sup>した</sup>に

おのづからなる細道<sup>ほそみち</sup>は

誰<sup>た</sup>が踏みそめしかたみぞと

問ひたまふこそうれしけれ

「破戒」の稿をつづけた明治三十七年から八年へかけては、周知のとはり日露戦争の眞只中であつた。藤村はこの未曾有の動亂を心の刺戟として感受し、内部の激情を躍りたてべく意識的に對した。外部の戦争を内面の戦争に轉化した。これは後に佛蘭西に在つて歐洲大戦に遭遇したときも同様であつて、當時の紀行文のなかに次のやうな一節がある。

「……この御便りを書くにつけても胸に浮ぶは日露戦争の當時、私は信州小諸の方に居て東京の友人が従軍する前に呉れた手紙を読んだことが有りました。私も戦地の方へ行つて觀たいとは思ひましたが、それは果せませんでした。そこで私は創作の起稿を思ひ立つことが有りました。山家の冬の夜などに降り積つた雪に響く戦勝の祝の聲を聞きながら、机に對つて居た時の心持は今だに忘れられません。動き變つた月日は丁度自分等の境遇を置き換へたやうなものです。……」（「戦争の空氣に包まれたる巴里」より）

ここで「創作の起稿」と云つてゐるのは「破戒」のことである。藤村は當時小諸の私塾に勤めながら孤獨のうちこの創作をつづけた。當時の生活は「家」のなかに詳細に描かれてあるが、其他にたとへば「突貫」といふ短篇は、その頃の心を傳へてあますところがない。彼は自分の生活を一の戦場と觀じてひたむきに進まうとしてゐたらしい。「突貫」は小説といふよりは断片的な感想といつた方が適切であらうが、その断片の一つ一つに藤村の赫熱した決意がみられる。出征兵士のいのちがけの萬歳を聞きながら、必死机に向つてゐた彼の姿が躍如としてゐる。「凄まじい叫び聲が起つた。私はそれを停車場の方で聞く



のか、自分の頭脳の内部で聞くのか解らないやうな気がした。」

## 二 家

「千曲川のスケッチ」「破戒」「春」と、散文の荒地を開拓して行つた藤村は、「家」において遂に一つの峠に達した感がある。我々が作者とともにこの峠に立つて望見し、やがて徐々に下つて行くならば、散文の驚くべき大平原が展開されてゐるのを見ることが出来る。」「家」の題材も、他の多くの作とひとしく決して廣いものではない。描かれた対象は作者が身近い一族の流轉の姿にすぎぬ。しかし、この狭い小さな家族達の生命を、かくも奥深くみきわめ、堂々たる幅を與へて描寫しつくした點、明治文學にとつて劃期的な仕事であつたと云はねばならぬ。藤村の作家的力量は、この作において遺憾なくあらはれてゐる。近年の「夜明け前」の素地たるべきものは、量的にも質的にも「家」において發見出来るだらう。一部の評者は、この作において、「破戒」「春」等の主情性の否定をみるが、否定といふ言葉はつよすぎる。自然主義的思潮の影響も云々されてゐるが、それも決して

根底的なものではない。呼吸にたとへるならば、今まで強烈に發してゐた息を、胸の底深くひそめ、云はば息を凝らして一族の生の秘密をあかさうとしたのだ。「破戒」「春」等をつよい抒情性は、内部深く抑へられた。この抑へられたものは、博大な愛情となつてすべての人物の血脈に流れこんで行く。

「いかなる場合でも君は靜かだ。極く靜かに君はこの世の中を歩いて行くやうな人だ。」  
〔櫻の實の熟する時〕

「家」をかく折も、藤村は友人のこの言葉を自己の心として進んで行つたやうに思ふ。「家」に着手した明治四十三年は、日露戦争の後をうけて、新しい精神がこの國に漲りはじめた頃である。焦燥にみちた時代の裡にあつて、藤村は極く靜かに自己の血統をみつめて行つた。「青年及び壯年」(下卷)の奥書に當時の心構を述懐してゐる。「家を書いた時に、私は文章で建築でもするやうにあの長い小説を作ることを心掛けた。それには屋外で起つた事を一切ぬきにして、すべてを屋内の光景にのみ限らうとした。臺所から書き玄關から書き、庭から書きして見た。川の音の聞える部屋まで行つて、はじめてその川のこと



を書いて見た。そんな風にして「家」をうち建てようとした。なにしろ上下二巻に互つて二十年からの長い「家」の歴史をさういふ筆法で押し通すといふことは容易でなかつた。」(市井にありて)この感想でも明らかなやうに、「家」をうち建てるといふ言葉が一番この作品にふさはしい。着實で執拗な努力の跡を讀者はみのがさないと思ふ。だがかうした努力を可能ならしめたものは、リアリズムの筆法とか自然主義の影響などといふ薄弱なものではない。一言で云ふならば、驚嘆すべき凝視と愛情の賜物だ。「家」における藤村の姿は、あたかも舊約の族長のごときもので、同胞を率ゐて曠野をさ迷ふ多感な先導者を思はしめる。逞しき肉體をもてる族長の、執拗な凝視と愛の息吹が作品の根底を流れてゐるのだ。それが臺所へ玄關へ庭へと藤村を驅りたててゐるにすぎない。

作品の内的連關について云へば、「家」は「春」の終つたところから始る。「家」の主要人物たる小泉三吉は岸本捨吉の更に成長して行く姿である。「ああ、自分のやうなものでも、どうかして生きたい」——「春」の結びの獨白が、「家」において一層重厚で暗澹たる状景の裡にひびいてくる。若々しい情熱のままに、自由に放縱に時を過した捨吉は、小泉

三吉となつて既に一家の主人である。結婚して新しく自分の家をうち建てて行く人だ。しかし、家庭の建設において、今まで知らなかつたやうな新しい痛苦に直面しなければならなかつた。作品の前篇の前半には、三吉が、妻のお雪と彼女の古い愛人との關係について悶える場面がある。「春」における戀愛の苦惱は、家庭の苦惱に變つてくる。自責と悔恨と諦念のいりまじつた、云はば絹へ落ちた人のやうな足搔き、結婚ひいては女性に對する濃い懷疑の念が流れてゐること、これは「家」の一つの特色であらう。「どうかして生きたい」といふ祈念の強さ、それが激しくなればなるほど三吉の足搔は彼を益々深みへ引きづつて行く。多くの家庭にみられるであらう平凡な夫婦の争ひも藤村の筆にかかる身を削るやうな痛みを帯びてくる。

「錯亂した頭腦は二晩ばかり眠らなかつた爲に、餘計に疲れた。彼はお雪と勉の愛を心にあはれにも思つた。ブラリと家を出て、復た日の暮れる頃まで彷徨つた三吉は、離縁といふ思想を持つて歸つて來た。もし出來ることなら、自分が改めて媒酌の勞を執つて、二人を添はせるやうに盡力しよう、斯様なことまで考へて來た。」



家出—漂泊—死—過去つたことは三吉の胸の中を往つたり來たりした「自分は未だ若い  
—斯世の中には自分の知らないことが澤山ある。」斯の思想から、一度破つて出た舊い家  
へ死すべき生命も捨てずに戻つて來た。其時から彼は斯世の艱難を進んで嘗めようとした。  
艱難は直に來た。兄の入獄、家の破産、姉の病氣、母の死……彼は知らなくて可いやうな  
ことばかり知つた。一縷の望は新しい家にあつた。そこで自分は自分だけの生涯を開かう  
と思つた。東京を發つ時、稻垣が世帯持の話をして、「面白いのは百日ばかりの間ですよ」  
と言つて聞かせたが、丁度その百日になるかならないかの頃、最早自分の家を壊さうとは  
三吉も思ひがけなかつた。

倒死するとも歸るなと堅く言つてよこしたといふ名倉の父の家へ、果してお雪が歸り得  
るであらうか。それすら疑問であつた。お雪は既に入籍したものである。法律上の解釋は  
自分等の離縁を認めるであらうか。それも覺束なかつた。三吉は、ある町に住む辯護士の  
智慧を借りようかとまで迷つた。蚊屋の内へ入つて考へた。夏の夜は短かつた。

この一節は、「春」から「家」へと續く心の重荷を要約して示してゐると思ふ。しかし藤

村の内部には、かやうな危機を耐へて行く不思議な力がある。妥協ではない。逃亡でも諦  
念でもない。まづ危機に身を横へ、苦惱の底に汗を流しながら、どうかして生きたいとい  
ふ執念深い生命力がある。それは信仰のごとき強さをもつて藤村の生涯を貫いてゐるもの  
だ。「家」の後篇における、三吉とお俊の危機にもねばりづよくあらはれてゐる。淡い戀愛  
の情ではなく、直截な肉慾の痛苦を、三吉は微妙な陰影の多い家族關係の中で味つた。荒  
寥たる周圍の山を眺め、その中にある種々な物の意味を學んで心の空虚を充さうと努めた。  
己が家を僧院にみたてて、清淨に行ひすまさうと決心もした。お雪は三吉の奴隸、三吉は  
お雪の奴隸と云つたやうな自嘲ともみられる告白もある。家といふもののもつ複雑で重苦  
しい關係その中で身悶えしつつ生きて生かうとする三吉の姿を藤村は美事に描いた。さう  
いふ苦しみの底には、だが我も人も所詮は旅人といふ考へがほのかに浮んでゐることも見  
逃しえまい。次のやうな對話はいかにも藤村的ではないか。

「俺の家は旅舎だ——お前は旅舎の内儀さんだ。」

「では貴方は何ですか。」

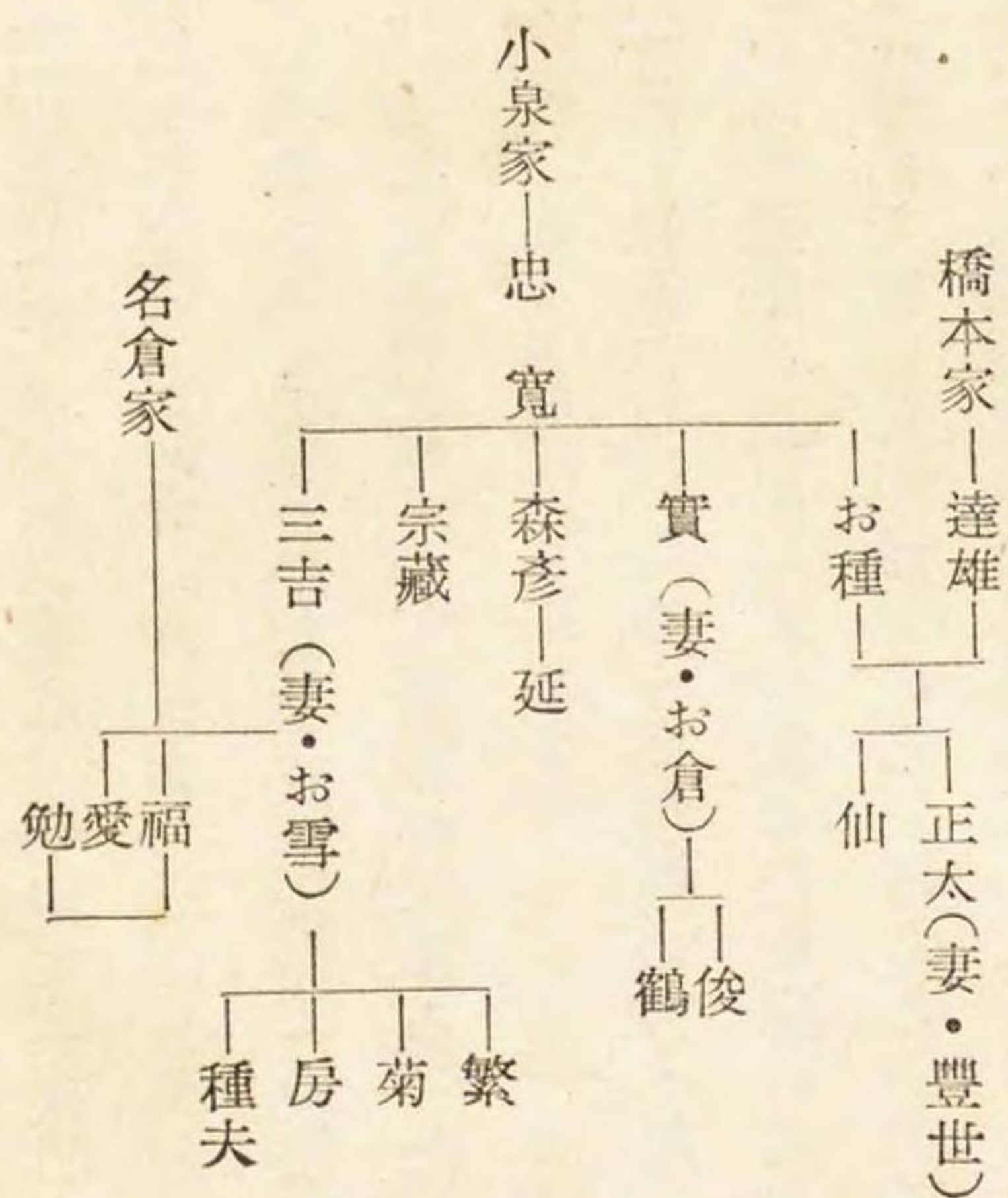


「俺か。俺はお前に食物を拵へて貰つたり、着物を洗濯して貰つたりする旅の客サ。」  
「そんなことを言はれると心細い。」

「しかし、斯うして三度々々御飯を頂いてるかと思ふと、有難いやうな氣もするネ。」

「家」に描かれた対象は、三吉夫婦を中心にしてはゐるが、しかし、彼の縁故者の殆んどすべてが登場する。その各々が美事に性格づけられ、各人の生活をもち、一つの宏大な社會相を象徴してゐる點驚嘆すべきである。藤村がこの作品において、いかに執拗に自己の故郷と血統をみきわめようとしたかが窺はれる。木曾山中における舊家の末裔——その病み弱まつた血の凄慘ともいふべき敗退がある。「舊家に生れたものでなければ無いやうな頽廢の氣」を藤村は充分に嗅ぎつけたのだ。登場人物の世代をいへば、「夜明け前」の次の世代に屬する人々であらう。二十年の歲月にわたる小泉橋本兩家の流轉の姿は、ちやうど暗い凄い大河のやうな感じを興へる。三吉はこの大河に生を享け、大河とともに流れ、そして生きようともがいてゐるのだ。藤村といふ作家がいかにして生育したかの祕密を解く重要な鍵ともならう。またわが國の古い傳統をもつ家族、いかにも日本的な家族の典型

として眺めることも出來よう。家といふものの奥深い祕密や陰影をかくも美事に描いたことは、日本文學にとつて空前のことだと思ふ。その堂々たるスタイル、重厚な筆致にも驚くが、結局全篇を読み終つて胸をうたれるのはすべての血族に對する宏大な深い愛情が流れてゐることである。私は試みに家の系圖を左に掲げておかう。





三吉の父たる小泉忠寛は、やがて「夜明け前」の主人公青山半藏であり、また實の娘お俊は「新生」の節子であらう。三吉と俊との関係はすでに「新生」の誕生をあらかじめ示唆してゐるやうなものだ。「夜明け前」の終末における半藏の悲劇は、この作品では父の想ひ出として子達によつて語られてゐる。たとへば次の一節。

「三吉は思ひ付いたやうに戸棚の方へ起つて行つた。實が満洲へ旅立つ時、預かつて置いた父の遺筆を取出した。箱の塵を拂つて、姉の前に置いた。その中には、忠寛の歌集、萬葉假名で書いた短冊、いろいろあるが、殊にお種の目を引いたのは、父の絶筆である。漢文で「慷慨憂憤の士を以つて狂人と爲す、悲しからずや」としてある。墨の痕も淋漓として、死際に震へた手で書いたとは見えない。

父忠寛が最後の光景は、いつも三吉が聞いて見たく思ふことであつた。お鶴が通夜の晩に、皆を集つて、お倉から聞いた時の話ほど、お種は委しく記憶して居なかつた。そのかはり、お種はお倉の記憶に無いことを記憶して居た。

「大きく『熊』といふ字を書いて、父親さんが座敷牢から見せたことが有つたぞや」と、お種は弟に微笑んで見せて、「皆、寄つて集つて、俺を熊にするなんて、左様仰つてサ……」

「『熊』はよかつた。」と三吉が言つた。

「それは、お前さん、気分が種々に成つたものサ。可笑しく成る時には、アハハ、アハハ、獨りでもう堪へられないほど笑つて、そんなに可笑しがつて被入つしやるかと思ふと、今度は又、急に沈んで来る……私は今でもよく父親さんの聲を覚えて居るが、きりぎりす啼くや霜夜のさむしろに衣かたしき獨りかも寝む、左様吟じて置いて、ワアツと大きな聲で御泣きなさる……」

お種は激しく身體を震はせた。父が吟じたといふ古歌——それはやがて彼女の遺瀨ない心であるかのやうに、殊に力を入れて吟じて聞かせた。三吉は姉の肉聲を通して、暗い座敷牢の格子に取継つた父の狂姿を想像し得るやうになつた。彼はお種の顔を熟と眺めて、黙つて了つた。



狂死した父の血は、様々な頽廢の氣となつて子達に傳つてゐるのではなからうか。藤村は意識的にか無意識的にかその氣配を作中に漂はしてゐる。「新生」においては明かに自覺してゐる。これは讀者の深く注目すべきところだと思ふ。三吉の考へすぎる性質や、沈鬱でありながら突如狂はしい情熱となる愛慾などにも、父の血統をみることが出來よう。藤村はかうした父の姿を、多くの作品で繰返し繰返し描いてゐる。あたかも彼自身の存在の祕密を解かうとするかのごとく、この點に最も執念深い凝視と愛情を注いでゐるのだ。

### 三 生ひ立ちの記

藤村の旅は、すでに遠い少年時代にはじまつた。彼は十歳のとき故郷を去つて東京に遊學した。「私は全く獨りで——母からも姉からも離れて——早くから他人の中へ投げ出されたやうなものでした。それが私に取つての修業といふものでした。私はいかにせば、驚津の姉さんのやうな性急で氣むづかしい人を喜ばすであらうかとそんなことに心を碎きました。」とかいてゐるとほり、他人の家から家へ轉々しながら、藤村は早くも人の世の勞苦

を味つて行つた。それは少年の心を傷けるやうな境遇ではなかつたにせよ、世の普通の遊學のやうに氣樂なものではなかつたらしい。「櫻の實の熟する時」にもさうした幼年時代の一半はうかがはれる。この「生ひ立ちの記」は、故郷の生活と、東京へ出た頃の生活と、云はば幼年から少年へかけての回想を中心としてゐる。しかし「春」や「家」の筆致とはかなり趣を異にして、自己告白的な激しさを背後にひそめ、むしろ佛蘭西紀行、「新生」などの筆に似かよつてゐる。この作の意味をはつきりさせるものは、やはり「新生」ではあるまいか。

藤村は、既に母を失つた子達にかこまれてゐる。さういふ境遇に追ひこまれた父の苦い心勞が「生ひ立ちの記」の到るところにみられる。自分の少年時代と、現在の境遇とが對比されてゐるところからも、この作は決して明るい姿を與へない。「生の危機」(第四章第一節參照)が藤村の心に深く根ざしたときの——捨てうる限りのものを捨てて外國へ「逃亡」しなければならなかつた直前の作品である。我々が普通に想像するやうな、懐しい愛情につつまれた回想ではない。藤村は自己の宿命的ともいふべき苦痛の根源を探つてゐるのだ。



この作をかいた意圖を藤村は附記のなかで次のやうに述べてゐる。

「……わたしはよく自傳的な作者のやうに言はれてゐるが、これはたゞ自傳の一部として書かうとしたものではない。自分の生命の源にさかのぼらうとする心を起した時にこれが書けた。あの地を割つて頭を持ち上げる春先の草の芽が緑濃い夏のさかり頃よりは色にも形にも反つて鮮かな特色が見られるやうに、一人の芽出しとも言ふべき幼年期、少年期には、その人がずつと成長してからの時代にもまさつて、一層個性のよくあらはれる場合もある。あだかも擬寶珠は擬寶珠、芍薬は芍薬で、あるものは卷煎餅のやうに頭を持ち上げ、あるものは紫の焰のやうに萌えて出るといふ風に。その意味から言つても、自分ながらこれは楽しく書けたかと思ふ。これを書く間、わたしは殆んど一切を忘れてゐた。そして、ずつと後になつて童話集の「ふるさと」、「をさなものがたり」、又は子供のことを取扱つた作品などを書く土臺ともなつた。……」

私が傍點をふつたところは、佛蘭西紀行や「新生」を読むことによつて、はじめて明らかとなると思ふ。自分の青年時代の意味が、ほんとうにわかるのは壯年を経た成熟期におい

てであらうと、私は前章で述べたが、幼年の日への思慕も、やはり壯年の頃の危機において一層切實になるのではなからうか。毒藥を仰がうとするファウストが、幼年の日にきいた復活祭の鐘の音をきいて、再び生を思ふやうなものだ。即ちそれは新生の序曲なのだ。我々が後天的に身につけたあらゆる夾雜物を拂ひのけて、生の元つ泉へ還らうとするとき、幼年は一の啓示となつて我々の前にあらはれるのではなからうか。それを再び一筋の道として、己が新たな生涯をはじめようとするのだ。幼年を回想すれば新生が成就するといふ意味ではない。問題は、新生を求める心そのものだ。現在の自己を死なしめようとする決意ともいへる。「自分ながらこれは楽しく書けたかと思ふ」といふ藤村の述懐の裏には、どれだけ苦い涙があつたか。これを書く間、わたしは殆んど一切を忘れてゐた——この忘却の精神が「生ひ立ちの記」の背後に流れてゐることをみのがしてはなるまい。

生ひ立ちの記は佛蘭西へ出發の直前（大正二年四月）まで「婦人畫報」誌上に掲載されたもので、とくに婦人のために、「ある婦人に自分の少年時代を語る」といふ手紙の形式をとつてゐる。「私達が子供の時分、相手にするものは多く婦人です。私達は女の手から手



へと渡されたのです。それを私は今、貴女に書き送らうと思ひ立ちました。この手紙は主に少年の眼に映じた婦人のことを書かうと思ふのですから。」と第一節に述べてゐるが、藤村は附記（定本藤村文庫）に、自分の意圖を更に敷衍して、

「この手紙の終の方にもことわつて置いたやうにわたしは母の手に抱かれた頃から始めて、つぎつぎにいろいろな婦人の手から手へと渡され、最後に全く婦人の手を離れるとは言へないまでも、すくなくとも獨り立ちの出来る頃までを書いて見ようといふところからこの手紙を思ひ立つた。生物研究の學者に言はせると、婦人が生理的にも子供に近いといふのは、幼いものを養育するためにあることで、そこに大きな自然の力が働いてゐるといふ。人間が自然の懷裡ふところに抱かれてゐるとは、さういふ見地からも考へられることだ。それにしても子供の世界にはいろいろなものが隠れてゐる。たゞ子供はそれを深く意識しないまでだ。そこでわたしは自分の遠い過去を辿り、幼年期や少年期に自分の身に起つて來たことのさまざまな記憶を語つて、世の子を持つ母親達や、あるひはさうでない人達にも讀んで見て貰はうと思ひ立つたのであつた。」

この附記はしかし疑問である。云ふまでもなく後年の藤村の考へで、「生ひ立ちの記」をかいた頃への回想であり、老人の穩かな心づかひがあらはれてゐるやうに思ふ。執筆當時ならば、おそらくかうは書きえなかつたであらう。單に表面上の動機を述べてゐるにすぎない。子供にとつて、婦人は自然のいのちであり、その流れに浴しつゝ成長する姿——さうした根源の生命力への憧れは「生ひ立ちの記」から看取出來る。また彼の新生を思ふ心には、女性をいま一度さういふ位置において眺めたいといふ願ひがあつたとも考へられよう。「家」「新生」は悉く女性への失望を告げてゐるのだ。——この背後にある暗さについては藤村は「附記」で一言もふれてゐない。

また「初戀を思ふべし」と、それだけの一句が「飯倉だより」のなかにみられる。「生ひ立ちの記」には、かうした無限の感慨をこめた言葉を想起させる場面がある。「破戒」に引用した詩を、讀者は再びここでふりかへつてほしい。藤村につきまといつた沈痛な生を念頭におくことなしには、かうした遠い幼年への思慕も理解することは出來ない。佛蘭西旅行前後の告白を知る讀者にとつても、この作だけの讀者にとつても、教育家めいた右の附



記は作品の眞意を歪めるおそれがあると思ふ。

### 第三章 佛蘭西への旅

#### 一 海へ

「……わたしの生涯は先づ若かつた日の放浪の旅にはじまり、それから仙臺へ行き、信州小諸へも行つて、その度に身の行き詰りを打ち開き、物をも學び、心の持ち方をも改め、いくらかづつでも自己を新しくすることが出来たやうに、佛蘭西での三年間は随分さびしく又骨の折れた旅ではあつたが、歸國した後になつて見ると空しい骨折りでもなかつたことを知る。だんだんこの世の旅をして、いろいろな人にも交つて見るうちに、いつの間にか自分の小さな胸も開けて行つたかと思ふ。」

藤村が佛蘭西の旅に上つたのは、大正二年の春であつた。藤村の生涯にとつて、おそらく最も大きいまた深い悲しみを伴つた旅だつたと思ふが、それについてかき残した文章は



明治以後の文學において空前の大旅行記をなしてゐる。「海へ」(航海記)、「エトランゼエ」(佛蘭西旅行者の群)、「歐洲戦争」の三篇がそれである。しかしこの旅の意味を、ほんとうに我々に告げてくれるのは「新生」だ。「新生」を併せ讀むことによつて、はじめてこの旅の姿が全體的に刻印されるであらう。「新生」については次の章で詳しくふれるつもりである。「汝、わが悲みよ猶賢く靜かにあれ。」——ボオドレエルのこの詩句が藤村の胸に斷えず去來してゐたといふ。いかに深い孤獨と悲痛と、ひるまぬ精神をもつて佛蘭西へ門出したか。多くの文學者が國外へ赴き、印象や心境をかきとめてゐるけれど、藤村の紀行はそれらのすべてを絶して、酷烈な人生記録をなしてゐる。

人間の生涯には、様々のかたちで危機が訪れる。生の沈滞や頽廢や斷末魔を味はぬものはおそらくあるまい。さうした危機に遭つてはじめて新たな生への希望が湧く。それは過去一切の忘却であり放棄であり、旅は過去から離脱せんがための悲しい決意である。藤村の「佛蘭西への旅」も、新たな生を求めての門出であつた。「海へ」。あの淺草新片町の小樓を去る時の心から言つても、私は獨りで船に乗るつもりであつた。あだかも暗夜に父

母の家を遁れ出づる人のごとく人目を恥ぢらひつつ、あだかも火宅を遁れ出づるといふ可憐な求道者のごとく捨て得るかぎりのものを捨て去りつつ、こつそりと故國に別れを告げて行く積りであつた」と述べてゐる。愛する日本を忘れ、その憐れな世紀の焦燥を忘れ、其他一切を忘れて異邦人の間にいきなり飛びこみ、またみしらぬ大自然に身も心も委ねて、おもむくままに流れ去らうとしてゐたのだ。出發の折、日本船を選ばず、佛國のエルネスト・シモン號に乗船し、殆んど唯一人の日本人として故國を去らうとしたところにも、藤村の心はあらはれてゐると思ふ。

「海へ」の第一章には、故國を離れる波の上での激しい回想がある。過去の自分を、あれこれと思ひめぐらしつつ、遂に休息を知らなかつた半生に嘆聲を放つてゐる。このあたり藤村の筆はかなり性急に冴えわたつて美しい。一刻も早く故國を去りたいと願ふ心、西歐へ西歐へとひたばしりに航海をつづけるエルネスト・シモン號、渦巻く大洋の怒濤、それらの描寫が互にいり亂れて激しい格調を呈してゐる。

「青い、明るい海は私の眼にあつた。まだ私は、あの淺草新片町の方の二階から降りて



來たばかりのやうな氣もして居た。あの單調な佗しい物音の響いて來る部屋のかはりに、今は刻々に動いて行く船がある。あの長いこと凝視<sup>みつ</sup>めて坐つて居た冷い壁のかはりに、今は動揺して止まない波濤がある。あの二階から外に見える瓦屋根の續いた町々の眺めのかはりに、今は遠く光る漁船の帆影がある。あの閉籠めた部屋の障子の外へたまさか訪れて來る小鳥のかはりに、今は船を追つて隨いて來る海の鷗の群がある。どうかすると鷗は、その海風に抵抗する怒つた羽翼から、その紅い嘴から、その鳥の眼までも見得るほど船に近く飛んで來て、空中の滑走を示すかのごとく私の前で舞つて見せ、やがて復た風と共に海のかなたに飛去つて行つた。」

この急調子な文章の美しさをみよ。外界の急激な變動を、藤村は息をはづませながら歌つてゐるのだ。原始の海——それに身を委ねたならば、或は新しいのちが得らるるかも知れぬ——狂暴にして博大な海、その上を流れ走るエルネスト・シモン號、これら一切が藤村の心を昂揚させてゐるやうに思はれる。第一章、二章、即ち歐洲へ行くまでの航海記は、藤村詩集にみらるるロマンティックな調べを更に昂揚させた文章である。「家」の重

厚沈鬱の筆ではない。「エトランゼエ」にみらるるごとき旅の深さからくる靜かな筆致もない。憂愁にとざされつつも藤村は思ひきつた主情的態度で歌ひつづけてゐるのだ。そこにある激しい流動感を見逃してはなるまい。はじめてみる大海の旅が、いかに藤村の心を煽動したかがうかがはれる。

過去から離れようとする心には、過去はまた一層はつきりした姿であらはれるのであらう。藤村の紀行文(新生も)は悉く、新しい國土への眼と、同時に古い日本と自分への切實な回想にみたされてゐる。藤村は自己の享けた宿命的ともいふべき苦痛について告白してゐる。

「……この世にある美しいことも、醜いことも、愚かしいことも、氣違ひじみたことも、すべてまことの姿に來て影を投ずる明るい鏡のやうな心。それを私は持ちたいと心がけた。私は自分の武器を磨いた。自分の力を訓練した。自分の器官を精銳にした。次第に私は觀察そのものを仕事とするやうに成つて行つた。二六時中、休息することを知らなかつた。「自分はもう考へまいと思ふけれど、どうしても考へずには居られない」と嘆息した人も



あるとか。私が矢張それだ。私は考へたところで仕方が無いと思ふことを考へて居るやうに成つて行つた。そしてその結果として、一つの不思議な窓が私の前に展ひらけて行つた。私はその窓から見たものを極靜の地獄と呼んで見たこともある。ある時は又、それを自分の靈魂の悲しい眼ざめとも思ひ慰めたこともある。その地獄から言へば、この世にある偉大な思想家も、藝術家も、皿や林檎と異なるところが無かつた。人は皆な一個の「靜物」に過ぎなかつた。」

いまはかうして身につけた武器をさへ捨てようとしてゐる藤村である。「憐むべき觀察者。然り、我等は遂に眞心の何物をも持たぬであらう」とも述懐してゐる。藤村の天性ともいふべき、あの鈍重な執拗な凝視は、たとへば「春」における青木にむけられてゐることは前にも述べたとほりだ。それは峻鋭に華美にもえあがる性質のものではない。沈鬱な相をもつて、徐々に遠まきにからみついて行き、しかも一旦からみつくとその根源を吸ひ盡さぬ限り離れることのない恐るべき力なのだ。藤村はいま船の上で、さういふ自分の悲しみを語つてゐる。彼の執拗な觀察力は、失望に失望をかさねたものの復讐の武器とも考

へられる。それは捨てようとしても捨てきれぬものだ。異國の船で味ふ人種的差別や數々の非禮に對し、觀察の武器は、唯一の復讐の武器であつた。

回想はまた遠い父祖にもつながつて行つた。佛蘭西の旅に出て、一層父への愛を深めたとは、藤村のくりかへし述懐してゐるところである。父への愛は、やがて日本の維新を準備したすべての生命への愛をも喚起した。異國へ驚異の眼をひらいた最初の航海者達への思慕も起つた。「海へ」の第二章(地中海の旅)は、亡父への手紙といふかたちでかかれてある。「父上」とよびかけながら。

「私はいつまでもあなたの子供です。異郷の客舎にあつた間も、私の心はよくあなたの前に行きました。あなたの愛を喚起よびおこしたのも寂しい異郷の旅でした。もし無事に歸國して筆執る折もあらば、私は自分の長旅の全部をあなたに宛てて書いて見たいとさへ思つたことも有りました……」

「父上。あなたの御生涯のなやましかつたやうに、私の半生もなやましいものでござい



ました。私の心は暗うございました。私は動くことによつて、わづかに自らを救はうとい  
たしました。御許しが出て出なくても、私はあなたから離れて青い深い海の方へ出て行  
つたらうと存じます。」

「まだ私がこの旅を思ひ立たない以前でございました。あなたの墓を建てるために一度  
歸省したことがございました。其節、私は姉の家へ立寄り、あの舊い家に残つた黒船の圖  
といふものを見てまゐりました。粗末な木版刷ではありましたが、それを見てもあの異國  
の船がいかに當時の人の眼に映じたかといふことが思はれました。まるで斯の圖は幽靈の  
圖です。と私は姉にも申したことでした。何といふ驚異の念が、何といふ不安と狼狽とが、  
そこに表はれて居りましたらう。あの全く別の世界を暗示するかのやうな、迫り来る外來  
の威力の象徴とも見るべき幻の船が、いかに青年時代のあなたの心をなやましたかは略想  
像致されました。」

「……私はあの黒船の幻影から切りはなして、あなたの御生涯を考へることも、あなた  
のいたましい晩年を想像することも出来ません。」

「父上。私は自分の乗つてまゐりました。エルネスト・シモンの甲板の上で、曾ては斯  
うした異國の船が恐ろしいまぼろしと見られた時代もあつたことを胸に浮べ、さうした  
時代と今との隔りはやがて若いさかりのあなたと私との隔りであることを胸に浮べまし  
た。」ある幻のいかに眞實で、眞實以上にいかに眞實であるかは、人のよく經驗するところ  
でございます。私はあなたを生けるごとくに自分の胸に描きました。あの木小屋に假りに  
つくられたといふ牢屋にも等しいあなたの御部屋の格子から、御見送り下さるあなたの眼  
を自分の胸に描きました。あなたの黒い幻の船に乗つて遠く波にゆられて行く自分の身を  
も胸に描きました……」

「……そもそも私が英語の讀本を學び始めようとした少年の日にそれを私に御許し下さ  
つたあなた自身の寛大を今更のやうに後悔されたかもしれませぬ。けれども私のために御  
心配下さつたあなたの心は長く私に残りました。そのあなたの心は私のたましひの奥底に  
とぼる一點の燈火のやうに消えずにありました。あなたの前ではありますが、私は無暗と  
西洋を崇拜するために斯の旅に上つてまゐつたものでもございませぬ。私に取つては西洋



はまだまだ黒船でございました。幻でございました。幽霊でございました。私はもつとその正體を見届けたいとぞんじました。そして自分の夢を破りたいとぞんじました。その心をもつて私は更に深く異郷に分け入り一筋の自分の細道を辿り行かうと致して居りました。この手紙からなる第二章は、第一章とともに、藤村の全作品中最高の一つに位するものだと思ふ。藤村の痛切な旅心があらはれてゐるばかりではない。彼はこの深い愛情を「夜明け前」に到るまで強烈に貫いて行つたのである。

## 二 エトランゼエ

父は黒船の幻影に憑かれて狂死したが、子はそのまぼろしの船にのつて佛蘭西の旅に上つた。「エトランゼエ」には、佛蘭西に集ふ日本の旅行者達の幾群かが描かれてゐる。晝家の群、學徒の群、留學生の群と、來てはやがて去つて行く人々の姿が、印象深くしてゐる。その一人として當代の日本を象徴してゐないものはなく、開國日の浅い東洋の旅人達の、様々に求め且つ思ひ惑ふ有様を、藤村は靜かにみつめてゐる。また歐洲大戰の

はしまつた頃の巴里や田舎の、名状し難い雰圍氣をつたへ、その間に在つて互に助けつつ見聞した多くの印象をまとめてもある。これらすべてを通して、「更に深く異郷に分け入り一筋の自分の細道を辿り行く」藤村の姿が、くつきり浮び出てゐるのだ。

「エトランゼエ」の文章には、「海へ」のやうに、自己告白の激しさも悲痛な回想の言葉もない。藤村は出會つたかぎりの印象を、一日一日と、楚々たる筆でかきつづけて行つた。たとへば、セザンヌの繪をみたときの喜び、ドビツシーの音楽を聞いた折の感動、またアベラアルとエロイズの墓を眺めての感慨など、多くの旅行者ならば誇張して描くであらうことも、彼は簡勁にしるしてゐるのみ。しかしこの楚々たる筆の跡を辿るならば、旅の次第に深まつて行く有様がみられよう。藤村が、深い靜かな孤獨に徹して行く姿こそ、「エトランゼエ」がもつ美しさだ。

「いかなる場合でも君は靜かに歩いて行く人だ。」——藤村を評したこの言葉は到るところにあてはまる。日本を忘れ、己を忘れたいと念じた人は、つとめて異邦人の中へ行き、新しい風習や言語や感情を求めた。言葉が通じない淋しさに堪へつつ、殆んど沈黙のまま



彼は多くの日を送つたやうである。だが、見るべきものは眼を凝らして見てゐる。あの執拗な凝視と観察は、沈黙によつて一層冴えたものではなからうか。佛蘭西に旅する多くの日本人の姿は、極めて印象的であつて、一つの舉措、一つの會話にあらはれる旅人の思ひを、藤村は敏速にかきとめてゐるのだ。

歐洲戰爭勃發前後における、佛蘭西思想界の動きにも、出來うる限りの觀察を試みた。言葉の不自由からくる障害はあつたにせよ、時代のただならぬ雰圍氣を鋭く感じとり、そこに動く文人達の姿を描いてゐる。たとへば佛蘭西近代の作家で、修道院へ行かうとしたユイスマンスを偲び、「カソリシズムのやうな他力の信仰に趨くものも少くないといふ佛蘭西の詩人のことなどが何時でも私の想像に上つて來た」と。またブウルジエの「現代心理論集」をひもどき、佛蘭西革命の悲惨な結果から諸外國へ眼をむけた所謂エキゾチスムの傾向、それからドレフユウス事件を機縁としての自國への復歸を調べ、「自分等は互ひに取る道こそ違へ、同じ佛蘭西のルネッサンスを期待する」といつたバレスの言葉を想ふ。「私が旅の窓から見直さうとして居たのも斯の佛蘭西だ」と。——藤村の眼がどこに

注がれてゐたか了知出來よう。それは佛蘭西の再生である。その固有の美しさと復活の相を藤村は探つてみたかつたのだ。現代佛蘭西には稀有の沈滯と生活の倦怠があつた。随分行き詰つたといふ感じがあつた。そこへ大戦が勃發したのである。戦時の巴里を眼前にしなから、藤村は次のやうな感慨を述べてゐる。

「……唯私には、丁度あのアンナ・カレーニナの終りに書いてあるヴロンスキーの出發のやうにして、進んで戦地に赴き、自ら救はうとする若い佛蘭西人のあることを想像するに難くないやうな氣がした。佛蘭西の再生——心あるこの土地の人達が戦時にかけて熱望しつゝあつたのも、その死の中から持ち來す新しい力ではなかつたらうか。春の來るのが待遠しかつた。」

戦場に倒れたペギイのやうな詩人への哀悼も、ここから發してゐると思ふ。藝術を犠牲にしてまで死の戦ひに赴いた詩人は、未完成のまま去つたところに深い暗示を残したのであらうと語つてゐる。新時代の佛蘭西人の氣持をある點まで自己の身に實現し得た人のやうな氣もすると述べてゐる。不安と焦燥のどん底へ追ひつめられた佛蘭西人にとつて、戦



争が意味するところのものを藤村は深く洞察したのである。さういふ洞察が可能だつたのは、彼もまた再生を求めて佛蘭西の旅に上つた人だからではなからうか。捨てる限りのものは捨て去り、起死回生を求めて旅に出たあの悲しい決意が、戦場に倒れた詩人への哀惜となつてあらはれたのであらう。「死の中から持ち來す新しい力」を夢みることなくしては戦争の意味は決して感得出來ぬ、といふ一つの例證がここにもみられる。藤村は事實、義勇兵となつて従軍することさへ考へてゐたのである。

リモオジュの片田舎に戦亂を避けて、穩かな田園に子供達と戯れる藤村をみよ。死を思ふ苦しい旅に在つて、彼の心は故國に残した子供達につよくひかれてゐたのだ。再生を願ひつつ、深く低迷する淋しさは、「エトランゼ」の後半に到るに及んであらはれてくる。佛蘭西の田舎で、子供達が歌つてきかせた合唱ほど旅愁をそそるものはなかつたであらう。戦争が長びくにつれて、無氣味な沈鬱な空氣が周圍に漂つてきた。名狀し難い無刺戟と孤獨から、藤村はあのエトランゼをよび起してゐる。「自分の影法師のやうでもあり、外からこつそりやつて來るもののやうでもあり、斯うした長い旅の途中に隠れ潜んで居たも

ののやうでもあり、私がエトランゼを迎へ入れる心持は一寸説明する事が出來なかつた。唯、感ずることが出來た。あだかも暗夜の實在を感じ得られても、それを説明する事の出來ないのに似て居た。」——この一種のまぼろしと藤村は對話をはじめてゐる。言葉の通じない異郷で、彼の出會つたものはあまりにも重大な事件であつた。彼は戦亂の意味する深さを知らうとした。自己の半生を通してまつはりついてきた宿命的ともいふべき課題もあつた。しかも沈黙の生活をつづけざるをえなかつたとき、その酷烈な孤獨がエトランゼを招いたのである。

「例の『ソクラテスの死』と題した銅版畫の古びた額は、相變らず私の部屋の壁に掛つて居た。私はその下に獨り腰掛けて、旅に老いるといふことを悲しく思つた。どうかして私はエトランゼといふ特別な心は持ちたくなかつた。自分の國に居ると同じ氣分でこの異郷に暮したかつた。さういふ私には、又この佛蘭西の旅に來てから自分の内部まで入つて來るやうな一人の異性もなかつたのだ……」

海外旅行者の多くが味ふ性の悶えも、畫家達の部屋に集るモデル女——落魄した彼女達



の旅人に寄り添ふ姿をも、藤村は旅のあはれとしてしるした。紀行は、終りに近づくにつれて、云ひやうもない寂しさにあふれてゐる。モデル女の歌ふ「カアナヅル」の祭の唄に旅情をそそられつつ「どうかして生きたい」とひたむきに心を起さうとする藤村の姿がある。この言葉は、「春」のむすびにかかれたときよりも一層深いひびきを傳へてゐる。「エトランゼエ」ほど旅のはるけさを思はず紀行はあるまい。人は「落梅集」におさめられた「椰子の實」を想起するであらう。若い日の歌は、半生を過ぎたこの日にも尙脈々と流れてゐたのだ。

名も知らぬ遠き島より  
流れ寄る椰子の實一つ

故郷の岸を離れて  
汝はそも波に幾月

舊の樹は生ひや茂れる  
枝はなほ影をやなせる

われもまた渚を枕  
孤身の浮寝の旅ぞ

實をとりて胸にあつれば  
新なる流離の憂

海の日沈むを見れば  
激り落つ異郷の涙

思ひやる八重の汐々



いづれの日にか國に歸らん

### 三 歐洲戰爭

「歐洲戰爭」は、大正三年、佛蘭西にありて歐洲戰爭に際會し、故國宛に書き送りたる戦時の旅の消息、と傍題されてゐるとほり、短い通信文から成つてゐる。内容は必ずしも戦時状態のみでない。前の「エトランゼエ」に重複してゐる部分が多いが、ここには藤村の文明批評家たる側面が、それとして端的にあらはれてゐるので興味ふかい。直接従軍しなかつたが、包圍を危ぶまれた巴里に在り、リモオジュに逃れ、云はば銃後のただならぬ雰圍氣を身近に知りえた。さうした角度からの通信である。戦争といふものの姿を、藤村がいかに感じ、また當時の佛蘭西に何を索めんとしたか——我々は周到で根底の深い觀察に接するであらう。あはたらしい昂奮の中に在つて藤村の筆は冷靜である。不安がつればつゝのほど益々重厚に沈思する姿がある。この通信集の附記に、藤村は日支事變にも言及して、「今日の事變に直面せらるる讀者諸君は一層よくわたしの書かうとしたことの意味を感知せらるるであらう」と述べてゐる。

歐洲大戰が佛蘭西にとつて、國運を賭した戦ひであつたことは云ふまでもない。しかしこの戦争前後における精神の危機は、一層苛烈な戦ひを西歐にもたらした。普佛戦争當時「聖アントワヌの誘惑」をかきながら、佛蘭西の滅亡を豫言したフロオベルを、藤村は改めて回想してゐる。「佛蘭西は奈何なるだらう、ラテン民族の精粹をあつめた幾多の天才者が受け継ぎ受け継ぎして築き上げた藝術と學問の世界は果して奈何なるだらう、私は自分の部屋へ行つて獨りで種々なことを思ひました。」——佛蘭西人にとつても戦ひの次に來るものは全く見當がつかなかつたに相違ない。死地に赴いて新生を得んとする希望、行き詰つた文明と生活の打破、また一切の分析をとほして來るべき綜合への意志、様々の芽が戦ひの中から感得はされたであらう。藤村はつとめて來るべき「春」をみようとして、むしろ暗澹たる戦時の光景を描いてみせた。「夜が來ました。いよいよ始まらうとする戦争の前觸のやうな靜かさが襲ひ迫つて來ました。平素は夜遅くまである珈琲店も早く店を仕舞ひ、周圍はヒツソリとして、町の響も絶えました。」その無氣味な靜けさの奥へ、藤



村は歩みをすすめて行つた。

自分の旅舎で、室を隣りあはせた佛蘭西人の辯護士が出征した後の有様を、次のやうに  
しるしてゐる。

「……好ましい人物でしたが、隣室にはこの辯護士の残して置いて行つた藏書や雑誌の  
類がまだ其儘そつくりしてあります。時々私はその空虚な部屋を覗いて見て、凄惨を極め  
た戦争の記事などを讀むにも勝る恐るべき冷たさを感じます。その冷たさが壁一重隔てた  
自分の部屋の極近くにあることを感じます。召集されて行つて行方の知れなくなつた人は  
今はどの位あるか知れません。」

また街を行進する軍隊と、次第に沈痛な相を呈する巴里の空氣を描いてゐる。

「……六頭の馬に挽かれた砲車の列が今日この町を通りました。一砲車毎に彈藥の函を  
載せた車が八頭の馬に挽かれて其後から續きました。街路に集つてこの光景を見る市民の  
中には一語熱狂した叫び聲を發するものもありません。いづれも皆靜肅な沈黙を守つて馬  
上の壯丁を見送るのみでした。この光景は何を語るものでせう。戦時の空氣はそれほど濃

い沈鬱なものと成つて來て居ます。私は水を打つたやうにシーンとして來た町のさまを眺  
めて、數月前よりは反つて一層胸を打たるることが有ります。暮の淋しい降誕祭ノエルを送り、  
正月を送り、一日は一日よりこの空氣の中へ浸つて行きました。激しい亢奮と動搖との時  
は過ぎて、忍耐と抑制との時が今はそれに代つて居るのです。」

「……戦争が長引けば長引くだけ、ますます私の身に感じて來たのはこの制おさへに制へよ  
うとして居るエナアジイです。佛蘭西人の消極的な勇氣です。」

これらは通信から拾つた一端にすぎないが、藤村の感得したものがよくあらはれてゐる  
と思ふ。まだ身體の出來てゐない若い兵士をみ、數々の別離の場面に接し、或は負傷兵の  
姿やそれを勞ふ婦人達の群を眺めつつ、藤村は人間の痛ましい苦悶に眼を凝らしてゐるの  
だ。さういふ有様は、佛蘭西人よりも、通りすがりの旅人の眼に映つたとき、一層悲痛な  
ものとして感得されたのではあるまいか。藤村は到るところに、沈思の底にうづく苦痛の  
表情を讀みとつてゐる。そして靜けさの中にかすかながら動く新生の芽を期待した。

「私は今自分の周圍を見廻すと、戦後の佛蘭西の爲に——來るべき時代の爲に——せつ



せと準備しつつあるものに気が着く。どう見てもそれは芽だ。間断なく怠りなく支度して居るやうな新生の芽だ。それは可成もう長いこと萌<sup>きざ</sup>しに萌<sup>きざ</sup>して來たものであるとも言へよう。けれども何人の骨髓にまで浸<sup>し</sup>み渡るやうな歐羅巴の寒い戦争が來て、一層その發芽力を刺戟されたやうだ。かうした者が自分の周圍にある。それが春待つ心を餘計に深くさせる。

メレジュコウスキイの「人として、また藝術家としてのトルストイ」を讀んだ時、伊太利文藝復興のことが論じてあつて、あの精神の發揚した時代の特徴は藝術的であり又宗教的であつたが、近代の露西亞のルネッサンスが正にそれだ、と言つてあつたことを記憶する。ルネッサンスとは何であらう。再生の謂だ。私が自分の周圍に見つけるものは、それに似た芽だ。或はもつと強烈な綜合だ。その特徴は藝術的であり宗教的であるばかりでなく、哲學的にも政治的にも結び着かうとして居る。

先頃モオリス・バレスはジャン・ダアクの記念の日に「レコオ・ド・パリ」紙上へ一論文を寄せて、「吾儕<sup>われら</sup>は互に執る道こそ違へ、同じ佛蘭西のルネッサンスを期待する」と言

つた。自分の感ずる時代の綜合力はこのバレスの言葉をすら手<sup>ゆる</sup>温しとして居るやうに見える。戦後には果して何が來るか。何が生れるか。この今からせつせと準備しつつあるものに自分は注意を怠るまい。」

かうした感慨は、やがて故國の状態にも眼をむけさせた。戦争と佛蘭西の再生をみようとする心は、また明治維新前後と日本の再生をも改めて考へさせたのである。明治時代とか、徳川時代とか區劃されるが、藤村はそれを排して、過去つた一世紀をまとめて考へ、この間における様々の準備と芽をみようとしてゐる。少くとも十九世紀の前半期にまでさかのぼり、我々の祖父達の長い苦闘の道を眺め、その累積の上に、はじめて歐洲文物をうけいれえた強靱な生命力をみようとした。明治以降のみならずもつと前代の苦しみ、それを藤村は戦時の巴里に在つてしみじみと感じたらしい。封建時代からの不斷のエネルギーがあつて、はじめて明治にあの改革が可能だつたと考へてゐる。佛蘭西の現状を思ひ、また若い日本の一世紀を顧みて、安き心地がなかつたといふ。

「ストリントベルヒは巴里で三年晝寝をして來たと人に語つたとか、この言葉は異郷に



暮して見たものでなければ一寸傳へ難い。二年近くの間、自分も大分この苦い晝寢を味つた」と述懐してゐる。

#### 四 歸朝

「僕は冷いかねえ」

とエトランゼエが言出した。

「別に君が冷いとも思はない」私は他に言ひ様がなかつた。

「僕はこれで大分君の國の人達に逢つた。海から歸つて行く君の國の人で、左様話の合はないやうな人は無かつた。一體、君の國の人はあまり自分を知らなさ過ぎる。海へ出て来て皆な眼を開けて歸る。見給へ。その證據には一人として満足して歸つたものは無い。絶望して自分の國を呪ふか、あきらめて黙つてしまふか、さもなければもう何事も爲る氣がなくなつて隠遁するかだ。」

「自分の國を思へばこそ左様だよ。冷淡なものなら、呪ふ氣にも成らない。隠退もしない。僕に言はせると、左様いふ人達こそ本當の愛國者だ。」

「でも、君、愛國心なんでものは寢言だと思つて歸る人が多いぜ。」

「君には國が無いのかね。」

「行く先が僕の國さ——到るところが僕の國さ——だから、僕は君に訊いてるぢやないか。僕は冷いかつて言つてるぢやないか。疑ぐつて言ふ譯ぢやないが、君は僕を煩いとでも思つて來たのかい。」

「君もまた妙なことを言ふねえ。」

「試みに僕から離れて見給へ。それが君に出來たらえらい。君は僕から離れたつもりでも、僕はもう絶えず君に働いて居る。一旦海の洗禮を受けたものが、どうして心に革命を引起さないで濟むものか。」

「海へ」の第三、第四、第五章は歸國の船旅をかいてゐるが、右はその一節である。甲板の上であのエトランゼエを招きつつ、藤村はかやうな對話を試みてゐるのだ。會ては愛



する歴史を忘れようとし、同胞を忘れようとし、捨てうるかぎりのものを捨てて故國を去つた。今はその反對の氣持で日本へ急いでゐるのだが、一旦海の洗禮を受けたものが心に起す革命を、その動搖と不安と懷疑を、藤村は如何ともし難つたのであらうか。「日本——三年の異郷の旅にある間、一日も私の心から離れることのなかつた日本——その故國へ近づけば近づくほど、遠く旅窓で私の胸に描いたものは美しい夢のやうに消えて行きかけた。信じ難いほどの孤獨と無刺戟とが左様した美しい夢を生んだのかと疑はせるやうに成つて行きかけた。愛あるものの胸に闘ふ幻滅ほど悲しいものはない。その愛が切なれば切なるだけ餘計な悲しみを増して来る。私は早やその矛盾に陥りかけた。と言つてそれを奈何することも出来なかつた。」

藤村は歸途ケエプタウンを廻り、ダアバンを過ぎ、マダカスカル島——印度洋——スマトラ島——新嘉坡——香港——上海を通つて日本近海に入つてゐる。この船旅は、藤村の心に英國の支配力といふものを深く刻印したらしい。到るところに強大な植民地があり、そこには本國を淺く模倣したやうな文化がある。悲惨な勞働に甘んじる多くの被征服民族がある。ひ

とたび地中海を離れ、大西洋を離れると日本にくるまでは一つとして獨立した自由の國はなかつた。この印象を藤村はつぶさに描いてゐる。日本に近づくに隨つて起るあのふしぎな動搖も、歐洲文物を受けようとしてゐる故國の悲しむべき混亂が今更のやうにくつきり浮び上つてきたからであらうか。エトランゼエとの次のやうな對話をかいてゐる。

「でも君、上海まで来ると氣分が違ふね。獨立した自由な空氣が吸へる。寄る港も今迄のは皆な西洋人の殖民地ばかりで厭に成つた。」

と私が言ふとエトランゼエは笑つて、

「上海だつて半分殖民地サ。英租界、佛蘭西租界、中央租界をヌキにして見給へ、この港から君、何が残る。」

「まあ、眞實の獨立したものは神戸まで行かなくちや見られないかな。」

「歸つて行つて見給へ——君の國の神戸が殖民地のやうに見えなかつたら仕合せだ。」

エトランゼエは半分私に調戲ふやうにして笑つた。

藤村の心からこのエトランゼエの冷笑は消え難かつたのであらうか。國が戀しい。神戸



へ着いたら、一番最初に逢つた人を捉まへて咬り着きたいやうな氣がするほど懐しい故國——さういふ感情とともに、エトランゼエの冷然たる聲がひびいてゐた。ひとたび海を渡つて眼をひらいたものは、深い懷疑なしに日本をみるこゝろが出来ぬのであらうか。「故郷は戀しい。美しい、懐しい夢の國として故郷は戀しい。併し自分の研究しなくてはならぬことになつてゐる學術を眞に研究するには、その學術の新しい田地を開墾して行くには、まだ種々の要約の闕けてゐる國に歸るのは残り惜しい。」と森鷗外はかいた。霧圍氣のないところ、高壓の下に働く潜水夫のやうに喘ぎ苦しんでゐる日本の友人が氣の毒だとも云つてゐる。「自分は失望を以て故郷の人に迎へられた」と。鷗外のあの冷然たる傍觀的態度は、「エトランゼエ」の姿そのままではないか。鷗外にせよ漱石にせよ藤村にせよ、歐洲に旅して、ニル・アドミラリの状態におちいるのは何故であるか。

「……遠く故國をさして歸つて來るほどのものは一人として旅の楽しかれと願はぬは無からう。歸國の後に於いても實際彼等が經驗するところのものは果して何であらうか。激しい神經衰弱に罹るものがある。強度に精神の沮喪するものがある。種々な病を煩ふもの

がある。突然の死に襲はれるものがある。驚かれるではないか。それを見ても、異常で複雑な作用が、制へがたい動搖が、ある隠されたる働きが、假令眼には見えず人には知られない迄も、多くの歸朝者の心を決して靜かにしては置かないことが分る。是はそもそも長い外國生活の結果がまだまだ吾儕われわれの異人種相競ふ海外の旅に慣れない證據なのか、張り詰めた神經の急激な靜止と休息とに因るのか、吾儕日本人の本國の生活が外國のそれに比べて餘りに隔絶かきはなれて居る爲なのか、それともまた風土の激變の結果か、いづれとも私には一概に言ふことが出来ない。日本に歸つて半年ほどの間、殆ど茫然自失の状態にあつたとは、ある友人の私に話したことだ。私は斯の友人の言葉の意味を自分の身に切に感ずる。」

歐洲に旅して、歐化主義者になつたか日本主義者になつたかといふやうな問題は、恐ろしく愚劣な問題である。藤村が國外から擔つて來たものは、大なる重荷だ。彼は自分の肩に喰ひいる重荷の痛さを語つてゐるのだ。日本の運命に深く思ひをひそめるやうになつたとき、どうして手輕な發言が出来よう。藤村は、長崎が新嘉坡にならず、日本がともかく殖民地から免れえた根本事情を、我々の祖父達の苦しい準備に求めてゐる。支那も印度も、



根づよい中世をもたなかつたために殖民地化した。わが封建時代に、人しれず蓄積されたエネルギー、あのつよい生命力に思ひを馳せ、「今日の日本文明とは、要するに吾國の封建制度が遺して置いて行つて呉れたものの近代化ではないか。」と語つてゐる。かかる謝念の上に立つて、彼は日本のルネッサンスを夢みたのである。

「海へ」の最後の節に、藤村は無量の感慨をこめつつ隅田川によびかけてゐる。

「流れよ、流れよ、隅田川よ。少年の時分からのお前の舊馴染ふるなじみが復たお前の懷裡ふところへ歸つて來た。」

「お前の岸にある不思議な不統一。私はそれをお前に問ひたい。お前が眼まのあたり見た驚くべき大改革とは人の心に「推移」をば齎あづかしたらう、しかしながら人の奥に「改革」を齎あづかしたらうかと。それを思ふと私は言ひ難い幻滅の悲哀に打たれる。お前はセエヌでもなくテエムスでもなく、矢張一番親しみの深い隅田川だ。往昔、多感多情な詩人が口くちばしの紅い都鳥を見て情人の生死を尋ねた歌をお前に残した。それほど古い歴史のあるお前だが、私は若いお前を夢みつつそれを頼りにして遠い旅から歸つて來た。何となくお前の水はま

だ薄暗い。太陽の光線はまだお前の岸に照り渡つて居ないやうな氣がする。お前の日の出が見たい。」



## 第四章 新生

### 一 生の危機

自分の半生は、原因のわからぬ、名づけやうのない憂鬱につきまとはれてゐた——かういふ感慨を藤村は屢々作品の中で洩らしてゐる。少年期から青年期へかけての自分を顧みても、仙臺の一頃をのぞけば、すべて濃い憂悶に閉ざされがちだつたと。「櫻の實の熟する時」「春」などをよむと明らかであらう。かうした気分は「家」にきて一層はげしくなるが、藤村自らその根源をみきわめようとして、執拗な血統の探求を試みてゐる。「新生」における父への回想をみても、自己の体内に流れる血を知らうとする心がつよく動いてゐることがわかる。藤村ほど自己の生の秘密を深くさぐらうとした人は稀であらう。「新生」はその極点である。

青年期が終つて壯年に入らうとする四十歳前後、云はば人生の峠において、藤村は沈鬱のどん底に在つた。過度な労作の結果か、半生を通してめぐりにめぐつた原因の無い憂鬱の結果か、それとも母親のない幼い子供を控へて三年近く苦難と戦つた結果か、とにかく生活の興味をほとほと失ひかけた。「新生」の序章に告白してゐる。藤村の年譜をみると、小諸を辭して東京に居を構へてから、長女の死、次女の死、三女の死、妻の死、親しい甥の死と、絶えず死におびやかされてゐたことがわかる。主人公岸本捨吉は云ふまでもなくかかる藤村の自畫像である。彼の友人も或ものは沈黙し、或ものは死んで行つた。「夕方」が來て見ると、あだかも彼方の木に集り此方の木に集りして飛び騒いで居た小鳥の群が、一羽黙り、二羽黙り、ガヤガヤとした楽しい鳴聲が何時の間にか沈まつて行つたやうに、丁度さうした夕方が岸本の周圍へも來た。」次第に獨りぼつちになつて行く、名狀し難い憂ひの叫びが「新生」の序章にひびいてゐる。

これは以前の作にも暗示せられたところだが、「新生」に到つて全篇悉く悲痛な絶叫にまで高まつて來た感がある。「新生」を、自己の過失に對する懺悔の文學とのみ解すること



は出来ない。「不義」な戀愛に對する道德的苦悶とのみ片づけることも不當であらう。社會の制裁に恐れ戦きつつ、尙人間のつよい本能を如何ともし難い——生命のあるがままの叫びがある。生の直截な、そこへ身を投げ出しての告白がある。岸本と節子の關係といふ筋にみとれる前に、人間の或る時期に訪れる痛烈な生の不安を思はねばならぬ。岸本と節子の關係は、この作品だけをよむと、いかにも唐突であるけれど、藤村は周到な用意をそれ以前の作品で示してゐるのだ。自分の生涯の一步一步を注意深く掘りさげ、これを一の體系に組みたてて行くのは藤村の一貫せる態度であることは前にも述べた。「新生」の序章は、その意味でひとつの締くくりともみられよう。「春」「家」をかいた頃の己の姿を、人生の時にさしかかつた時の不安を、象徴的な筆致でここに要約してゐる。「中野の友人」の書簡を引用したのもそのためであらう。

「岸本の四十二といふ歳も間近に迫つて來た。前途の不安は世に男の大厄といふやうな言葉にさへ耳を傾けさせた。彼は中野の友人に自分を比べて、こんな風に言つて見たことがある。友人のは生々とした寛いだ沈黙で、自分の死んだ沈黙であると。その死んだ沈

黙で、彼は自分の身に襲ひ迫つて來るやうな強い嵐を待受けた。」——更年期に訪れた死の不安は、藤村の出會つた數々の不幸とともに、「新生」の到るところにつぶさに描寫されてゐる。「自分はもう駄目かしら」——かういふ嘆聲がきこえる。「死」の影が極度に彼を脅してゐたのだ。たとへ節子といふ女性があらはれなくとも何かの方法で新生を求めぬ限り、やりきれなかつたのだと思はれる。火か、水か、土か、何かかう迷信に近いほどの熱意をもつて生々しく原始的な自然の刺戟に觸れて見たら、あるひは自分を救ふことが出来るかとも考へたと。

「破戒」、「春」、「櫻の實の熟する時」、「家」、「新生」、いづれも明るい作品ではない。一步一步人間に希望や理想を興へ、生存を讚美させるやうなものではない。むしろ生そのものの暗澹たる姿について、深く思ひ惑はせるやうな、厭世的と云つてもいい作品である。藤村の内奥にひそむ生の祕密が然らしめたのであらうか。宏大な愛情も絶えずかかる暗さにつきまとはれてゐたのだ。

心の宿の宮城野よ



みだれて熱きわが身には  
日影も薄く草枯れて  
荒れたる野こそうれしけれ

獨り寂しきわが耳は

吹く北風を琴と聴き

悲しみ深きわが眼には

色なき石も花と見き

青年時代に発表したこの詩について、後年藤村は「春を待ちつゝ」の中でかいてゐる。「ある人は私の舊い詩を評して、私の詩の心は否定の悩みでなくて、肯定の苦に巢立つものだと言つてくれた。あの言葉は自分でよくうなづける」と。この心は「新生」についても言ひうるであらう。生の慘憺たる相を描いても、尙肯定の苦に巢立たうとする願ひは激しくあふれてゐる。眼前の暗さも、幻滅の悲しみも、冬の寒さも、何一つ無駄になるもの

のなかつたと思ふやうな春の來ることを信ぜずにはゐられない——心からの願ひであつたことは肯ける。しかし「新生」は藤村の待ち焦れた「春」であつたらうか。「新生」は言葉のごとく新生の喜びをもたらしたらうか。火か、水か、土か、何かかう迷信に近いほどの熱意をもつて生々しく原始的な自然の刺戟に觸れて見たら、あるひは自分を救ふことが出來よう——かうした強い再生の願ひにも拘らず、運命は一層はげしい重壓をもつて藤村の上に迫つて行つた。「新生」は新生の曉を望まうとして更に暗澹たる夜を招いた。その苛烈な身悶えがこの作品の生命である。

## 二 嵐

「嵐は到頭やつて來た。」——「新生」第十五の冒頭の一句である。節子から身の異常を告げられて、岸本は激しい懊惱につきおとされる——この間の筆は、讀者にとつてあまりに唐突に思はれるだらうが、前章にも云つたごとく、「家」をふりかへつてはじめて納得出來る。妻お雪の旅の留守に、三吉がふと姪のお俊の手にふれるところがある。三人の子



供達が眠る墓場を近くにのぞみながら、「不思議な力は、不圖、姪の手を執らせた。それを彼は奈何することも出来なかつた。」——悲劇はこのとき胚胎してゐるのだ。藤村の描く自畫像風の主人公はすべて、思ひつめること深いだけ、その行爲はいかにも唐突でなかば狂的にすらみえることがある。生命のもつ危険性、ふしぎな爆發は藤村の痛感したところであらう。自分で自分を叱咤する激しい聲もきかれる。「家」のなかで藤村は、三吉の性の苦しみを次のやうに描いてゐる。

「其日から、三吉は成るべく姪を避けようとした。避けようとするほど餘計に卷込まれ、蹂躪ふみにじられて行くやうな氣もした。彼は最早、苦痛なしに姪の眼を見ることが出来なかつた。どうかすると若い女の髪が蒸むされるとも、身體が燃えるともつかないやうな、今迄氣のつかなかつた、極く極く幽かな臭氣が、彼の鼻の先へ匂つて来る。それを嗅ぐと、我知らず罪もないものの方へ引寄せられるやうな心地がした。斯の勢で押進んで行つたら、自分は畢竟奈何なる……彼は思つて見た。

「俺は、もう逃げるより他に仕方が無い。」

到頭、三吉は斯様な狂人じみた聲を出すやうに成つた。」

右の一節が「新生」の發端となつてゐるのである。「斯の勢で押進んで行つたら、自分は畢竟奈何なる」——それが「新生」の、「嵐は到頭やつて来た」といふ言著につながるのだ。しかし藤村がここに告白したのは、節子との間柄ばかりではない。彼は「家」から春にまでさかのぼり、そこに描いた苦い愛の經驗を、この嵐のなかでもう一度反芻してゐる。愛とは何か。慾情とは何か。いかにして自分の誠實が裏切られたか。女性に對する失望を藤村は青年の日に味つたやうである。どの作品をみても、藤村は決して女性崇拜者ではない。「新生」を激しい愛慕の書と思ふのは間ちがひである。

「多くの場合に岸本は女性に冷淡であつた。彼が一個の傍觀者として種々な誘惑に對つて来たといふのも、それは無理に自分を抑へようとしたからでもなく、むしろ女性を輕蔑するやうな彼の性分から来て居た。」——この一節は藤村を知る上にも、また「新生」をよむ上にも大切である。岸本と節子の間をみるならば、かやうな告白は矛盾してゐるやうに思はれるであらう。だが、女性蔑視は直ちに慾情の消滅を意味しない。「何といふ『生』の



皮肉だらう」と述懐してゐるやうに、我々は人間のいのちの不思議を痛切にみせつけられるのだ。「新生」はドン・ファンの悩みではない。ゲエテの苦悶でもない。むしろストリンドベルクの懊惱——女性を憎みながら、しかも人間の本能に敗北して行く悲痛な姿に近いのではなからうか。煩惱のはげしさ、慾情のあさましさ、いはば危険な爆発物のやうな性の悲劇を藤村は描いたのだ。心の裡に女性を憎悪しながら。彼の愛が深かつたから、失望もまた一層大きかつたのであらう。

しかし藤村は、はじめからかやうな境地に達してゐたのではあるまい。「春」や「家」に描いたやうな愛の経験が、彼をここまでひきずつて來たのだ。「新生」において藤村は、はじめてその意味を感慨深く語つてゐる。たとへば「春」の一風景が再び想ひ出としてくりかへされてゐる。

「青木、市川、菅、足立——それらの友人と互に青春を競ひ合ふやうな年頃に、岸本はあの勝子に逢つた。すべてまだ若いさかりの彼に取つて心に驚かされるばかりであつた。不思議にも、世に盲目と言はれてゐるものが、あべこべに彼の眼を開けて呉れた。彼の眼

は勝子に向つて開けたばかりでなく、それまで見ることの出来なかつた隠れた物の奥を讀むやうに成つた。彼は自分の身の周圍にある年長の友達や先輩の心にまで入つて行くことが出来たばかりでなく、ずつと遠い昔に情熱の香氣の高い詩歌などを遺した古人の生涯を想像し、誰しも一度は通り過ぎねば成らないやうな女性に對する情熱をそれらの人達の生涯に結び着けて想像するやうに成つた。若い生命がそれから展けて行つた。しかし彼の前に展けた若い生命とは、さう明るく楽しいばかりのものではなくて、寧ろ慘憺たる光景に満たされた。彼は自分の手からもぎ放されて結局父親の命ずるまゝ他へ嫁いで行く勝子を見た。簡単に言へば、彼が貧しかつたからである。彼は同じ年の若さであつても、今少し豊かな家に生れたならば彼女を引留め得べき多くの暗示を受けたことを忘れる事が出来なかつた。彼のささげ得るものとは、一片の心のまことに過ぎなかつた。「わたしは、お前を愛する、わたしはもう死んだものと同じものだ、残るものは唯お前を慕ふ心があるばかりだ。」かう言ひながら勝子は父親の手に引かれて行つてしまつた。彼はそれを自分の身に経験したばかりでなく、彼の周圍にあつた友人の場合にも経験した。市川のやうな賢



い青年であつても、情人の姉なり親戚なりに經濟上の安心を與へ得なかつたものは失敗した。そして日本橋傳馬町の鯉節問屋に生れた岡見は成功した。この事實は彼の若い心に深い感銘を刻みつけた。愛の爲すなきを悟つたのは實にその時であつた。」

讀者はこの告白に深く留意してほしい。青年の日にうけた打撃のいかに深く、またそれが生涯の傷ともなるといふことを。「新生」を通讀してくると右の文章は激しい切齒と號泣にみたされてゐる。捨鉢と云ひたいほど痛切な調子を帯びた文章である。愛の徒勞を悟つた人の悲しみが「新生」の背後にこびりついてゐるのだ。つづいて「家」の一狀景が再びくりかへされてゐる。(三吉と妻お雪の關係——これは「新生」では岸本と妻園子になつてゐるが。)

「父さん、私を信じて下さい……私を信じて下さい……」

さう言つて、園子が彼の腕に顔を埋めて泣いた時の聲は、まだ彼の耳の底にありありと残つて居た。岸本はその妻の一言を聞くまでに十二年も掛つた。園子は豊かな家に生れた娘のやうでもなく、艱難にもよく耐へられ、働くことも好きで、夫を幸福にするかざかずの

好い性質を有つて居たが、しかし激しい嫉妬を夫に味はせるやうな極く不用意なものを一緒にもつて岸本の許へ嫁いて來た。自分あまりに妻を見つめ過ぎた、とさう岸本が心づいた時は既に遅かつた。彼は十二年もかかつて、漸く自分の妻とほんとうに心の顔を合はせることが出來たやうに思つた。そしてその一言を聞いたと思つた頃は、園子はもう亡くなつてしまつた。……岸本はもう準備なしに、二度目の縁談などを聞くことの出來ない人になつてしまつた。獨身は彼に取つて女人に對する一種の復讐を意味してゐた。彼は愛することをすら恐れるやうに成つた。愛の經驗はそれほど深く彼を傷けた。」

「……彼は自分の妻も亦、下手に禮義深く尊敬されるよりは、荒く抱愛されることを願ふ女の一人であることを知つた。……それから岸本の身體は眼を覺ますやうに成つて行つた。髪も眼が覺めた。耳も眼が覺めた。皮膚も眼が覺めた。眼も眼が覺めた。其他身體のあらゆる部分が眼を覺ました。彼は今迄知らなかつた自分の妻の傍に居ることを知るやうに成つた。彼が妻の懷に啜泣しても足りないほどの遺瀨ないこころを持ち、ある時は蕩子戯女の痴情にも近い多くのあはれさを考へたのもそれは皆、何事も知らずによく眠つて居



るやうな自分の妻の傍に見つけた悲しい孤獨から起つて來たことであつた。岸本の心の毒は實にその孤獨に胚胎した。」

「新生」の苦惱は、節子をめぐりつつ、實は藤村の半生の苦痛を悉くそこへ叩きつけてみせたやうな作品だ。愛を粗末にしまいと努めたことが愛の空しさを彼に教へた。信のな心——失望に失望を重ねた結果であつたといふ。そこから孤獨が生れた。退屈も生れた。女といふものの考へ方なども實にそこから壞れて來たと述べてゐる。岸本は節子のことであれほど懊惱しながら、國外に逃れ、節子の小さな胸を展けてみせた手紙に接しても、信ずる心のもてないやうな人に成つて行つた。藤村は「春」や「家」でかいた苦い愛の經驗を執拗にほりさげ、「新生」の悲劇の根底を開けてみせようとしてゐるのだ。

姪の妊娠といふ異常な事件を前にして、岸本はひとたびは死を決意する。「どうも仕方が無い。最早是迄だ」——彼の妻と三人の娘の眠る墓の方へ行くより他なかつた。藤村はここで再び「春」にかいた一場面を想ひ出として簡潔にくりかへしてゐる。「春」では「萬事休す！」となつてゐる。だが「春」の岸本は海に身を投じない「此世の中には自分の知らないことが澤山ある——今ここで死んでもツマラない」と思ひ直して再び新しい生を求めて行つた。「新生」の危機はしかし「春」に比して一層酷烈である。此世の中には自分の知らないことが澤山あるといふ言葉に對應して、「新生」では、「あの情人の夫を殺すつもりで過つて情人を殺してまでも猶且生きることに出來たといふ文覺上人の様な昔の坊さんの生涯の不思議を考へた。そこからもつと自己を強くすることを學ぼうとした。」となる。そして海外の旅を思ひ立つ。

### 三 心の漂泊

「新生」の苦惱は、事件の異常性に基くことは云ふまでもないが、それを一層悲劇的たらしめたのは岸本の性格にもよる。關達な精神の所有者であつたならば、苦しみは苦しみとしても、より決斷にとんだ行爲が出來た筈である。何故、不徳はある人に取つて寧ろ私かなる誇りであつて、自分に取つてこんな苦惱の種であるのだらうといふ嘆きもあつた。彼の考へすぎる性癖、執拗な凝視と孤疑逡巡、それらにもまして激しい自己苛責は、この



旅を苛烈な苦行とした。自己の「過失」を何びとにも告げず一切の罪禍を重荷として身ひとつに背負ひながら、黙々として彼は國を去つた。藤村はそのときの心を描いて、「丁度あの囚人の姿こそ自分で自分の鞭を受けようとする岸本の心に適あてはしいものであつた。眼に見えない編笠。眼に見えない手錠。そして眼に見えない腰繩。實際彼は生きて還れるか還れないか分らない遠い島にでも流されて行くやうな心持で、新橋の停車場の方へ向つて行つた。」

藤村の旅はすでに述べたやうに、心を起すために身を起すことだ。「新生」は心を起さうと奮ひ立つ痛ましい姿を、くりかへし描いてゐる。異國の新しい言葉を學ぶことによつて、心を新らしくしようとした。異國のみしらぬ人との間に交つて自分の想ひ出を忘れようとした。しかし暗澹たる思ひは消え去る筈もなかつた。

「何物を犠牲にしても生きなければ成らなかつたやうな一生の危機に際會したものが、どうして明白な、條理の立つた矛盾の無い、道理に叶つたことが言へよう。長い限りの無い悪夢にでも襲はれたやうにして起つて來た恐怖——親戚や友人に對してさへ制へること

の出來なかつた猜疑心——眼に見えない迫害の力の前に恐れ戰いた彼のたましひ——夢のやうに急いで來た遠い波の上——知らない人の中へ行かうとのみした名のつけやうのない悲哀——何といふ恐ろしい眼に遭遇であつたらう。何といふ心の狼狽を重ねたらう。何といふ一生の失敗だつたらう。この深い感銘は時と共にますますはつきりとして來ることは有つても薄らいで行くやうなものでは無かつた。」

新生への幽かな希望と、襲ひくる罪禍の想ひとが、潮のやうに干満してゐる。新生は無い。明るい確乎たる希望もない。唯波のごとくうちかへす苦惱の増減が、そのままの姿で迫つてくるだけだ。このことは慾情の誤ちについてのみ云へることではあるまい。一生の危機は、思想の問題である場合もあらうし、癒し難い疾病の痛苦である場合もあらう。これらのすべてに對して「新生」は強烈な示唆を與へる。危機の苦しみが激しければ激しいほど、溺るるもの藁をも掴むたとへのごとく、人は手輕に、「理想」や「神」や「立場」にすがりつくのだ。しかし藤村はまづ與へられた運命の底まで身を沈めて行く。己の骨を噛むごとく運命を噛みしめてみるのだ。藤村に憑いた神ありとすれば流轉の神であらう。一



切の據り所を破壊して、ひたすら地上の涯から涯へ永久の巡禮を強ひる神であらう。「新生」が我々に與へる感銘は、遂に止むことのないこの永久の苦行に他ならぬ。

藤村はかかる心を刻明に告げつつ、自分の幼年時代や父の生涯に想ひをさせてゐる。半生を通して繞りに繞つた憂鬱——言ふことも爲すことも考へることも皆そこから起つて來て居るかのやうな、あの名のつけやうのない、原因の無い憂鬱が早くも青年時代の始まる頃から自分の身にやつて來たことを話して、それを聞いて貰へると思ふ人も、父であつた。岸本が最後に行つて地べたに額を埋めてなりとも心の苦痛を訴へたいと思ふ人も父であつたといふ風に述べてゐる。父なる人の悲惨な最後は前節の「家」において引用したところである。藤村は自分の苦行を思ふにつけても、それを父の血にまでつながらせ、己が體內に流れるいのちの不思議に恐れ戦いてゐたのであらうか。「彼自身の内部に一層よく父を見つけて行つた。」そこには深い親愛の情とともに恐怖がある。父の憂鬱が昂じて狂死したのに比べるならば、彼は辛うじて狂氣じみたといふ程度に止まつてゐるだけであつた。かうした宿命を知れば知るほど、青年時代から人知れぬ心の戦ひを重ねざるをえなかつたとも述べてゐる。父への親近性——恐怖とともにある云ひしれぬ懐しさ——「新生」はかやうなところまで藤村の心を漂泊せしめたのであつた。

「一日は一日より岸本の旅の心は濃くなつて來た」

巴里の頽廢のなかから、わづかながら次の時代の準備であるやうな芽がきざしてゐた。一度は頽廢しつくしたものの再生——それが岸本の心に希望の火を幽かに點じてくれた。

「お前も支度したら可いではないか。澱み果てた生活の底から身を起して來たといふお前自身をそのまま、新しいものに更へたら可いではないか。お前の倦怠をも、お前の疲勞をも——出來ることならお前の胸の底に隠し有つ苦惱そのものまでも。」

火か、水か、土か、何かかう迷信に近いほどの熱意をもつて生々しく原始的な自然の刺戟に觸れて見たら、あるひは自分を救ふことが出來ようか——かうした再生の意志が少しづつ動いてきた。アベラアルとエロイズの墓に、お伽話のやうな愛情の世界を夢みつつ、自分の寂しさを顧み、また幼年の日の心の失はれて行くのを嘆いた。「さうだ。何よりも先



づ自分は幼い心に立ち歸らねばならない。」幼年時代は遙かな懐しい「原始的な自然」だつたかもしれぬ。新生を希ふものは、純粹のいのちを夢みる。人間のまことの生れつきを省み、これを一筋の道としようとするものの祈念だ。「櫻の實の熟する時」のむすびは、「まだ自分は踏出したばかりだ」となつてゐる。この作品がフランスの旅でかかれたことを思ふなら、右の言葉も再生への門出の心とみられよう。しかしそれらは前にも云つたやうに、憂悶の渦巻のなかから幽かに動かうとする芽にひとしいのだ。決して華麗に燃えあがるものではない。あたかも歐洲大戦に遭遇した岸本は、出征するフランスの兵士達を見送りながら、死の中から持來す回生の力を胸深く熱望してゐる。

「新生」は最近編纂された藤村文庫では、「寢覺」と改題され第一部のみが収録されてゐる。これについて藤村は次のやうに語つてゐる。

「こんな悲哀と苦惱との書ともいふべきものを、今更讀者諸君におくるといふことすら氣がひける。しかし、これなしにはあの「嵐」にまで辿り着いた自分の道筋を明かにする

ことも出来ない。

この作、もと一部より成るが、本來なら更に一部を書き足し全體を三部作ともして、結局この作の主人公が遠い旅から抱いて來た心に歸つて行くまでを書いて見なければ、全局の見通しもつきかねるやうな作で人生記録としてまことに不充分なものである。それにこれを書いた當時と二十年後の今日とは、周圍の事情も異り、人も變り、さういふ自分の心の持ち方も改まつて來てゐる。そんなわけで、この文庫第七篇のためにはむしろ第一部を選び、作中の主人公が遠い旅に出るから歸國を思ふまでのくだりにとどめ、題も「寢覺」と改めた。

今日になつて見ると、これを書いた當時わたしは新生といふ言葉に拘泥し過ぎたことに氣づく。新生が新生であるといふのは、その達成せられないところにある。さう無造作に出来るものが新生でもない。その意味から言つても、今回改題の寢覺こそ、むしろこの作にふさはしい。」

この附記は私の疑問とするところである。「氣がひける」のは尤もな感慨としてうけと



れるけれど、嚴密にかうした氣持を徹して行くならば、作家はすべての作品を抹殺しなければなるまい。或る時期に或る作品を残すのは天命ともいへるのであつて、後にどれだけ訂正や解説を加へても無駄でなからうか。作品は作者から獨立して生きて行く。「新生」はさういふ風に今日も尙生きつづけ、現に立派な古典である。藤村の現在の心境とは關係がないのだ。また「さう無造作に出来るものが新生でもない」といふ言葉は、それとして肯けるが、作品「新生」が無造作な新生を語つてゐるとは思はれない。新生といふ言葉に拘泥してゐるやうに今日の藤村にみえるのは、あの激情に對する老人の誤算であらうか。

ついでに一言するならば、定本藤村文庫には悉く藤村の附記や奥書や想ひ出等がついてゐる。我々の参考にもなるが、邪魔になることも少なからずある。さういふ點は前の各章でもふれた。しかし過去の作品に、繰返しかやうな執着をあらはすのは、藤村の性格にもよるのである。執念深い凝視の故に、同じ問題を再三反覆し描き深めて行つたことは前に屢々述べたところだが、その延長なのだ。長所は短所ともなつてゐる。「寢覺」と改題し第二部を除いたことは、納得出来ない。新生の達成せられない所以を教へるのも第二部ではないか。

#### 四 告白

第二部は、岸本の歸國前後から筆をすすめてゐる。眼前の暗さが消え去つたわけではないが、いまひとたび新しい氣持で出發し直さうとする心が動いてきた。「……抑制と忍耐との三年近い苦行(?)」をまがりなりにも守りつづけて來たことは多少なりとも彼の旅の心を軽くした。彼は出獄の日を待受ける囚人のやうにして、もう一度國の方に自分の子供等を見得るの日を待受けた。「歸國が赦さるやうに思はれた。彼はその心を實際に自分の身にも現さうとする。「春」の岸本は、死を思ひとどまつた後、頭をまるめて主家に歸るのだが、それに対応して「新生」の岸本は髯を剃り落す。かういふ場面に對して、藤村の意味のつけ方が重々すぎることは他の人も指摘してゐるが、藤村といふ作家には意味のない描寫など一つもないのだ。鷗外漱石にみらるる所謂「遊び」は求められない。あらゆるところに自己の宿命を凝視する。その莊重で貪婪な探求心が、讀者にはたまらないポーズとし



てうつることもあらう。

佛蘭西における岸本の動きは、前章に述べた紀行文に重複してゐるところが多く、二つを併せよむと、藤村自身の旅姿が鮮明に浮んでくる。自ら鞭をうけるつもりで異國を放浪した三年間は、何をもたらしたらうか。歸國した岸本は、自分の眼前に小さく震へてゐる犠牲者を再びみるのである。「眼前めのまへにある事象ことからにのみ囚はれまいとする心、何とかして不幸な犠牲者を救ひたいと思ふ心、その二つの混淆した氣持を胸に抱きながら」、岸本はやはり暗澹たる生活をつづけて行く。「過失」を隠蔽出来るものなら、そのまま過ぎようとする心と、一切を告白して赦しを求めようとする心と、この二つの氣持もなほとけないままに一層彼を苦しめた。この間の描寫は、第二章「破戒」にもふれたごとく丑松の心理に對應してゐる。「思へば、過去は何時活き返らないともかぎらない。わたしの「破戒」の中には二つの像がある。あるものは前途を憂ふるあまり身をもつて過去を掩はうとし、あるものはそれを顯すことこそまことに過去を葬る道であるとした。この二つの間を往復するものもまた人の世の姿であらう。」(再刊の序)と云つてゐるのは、「新生」にもあてはま

る言葉だ。

ところで岸本は再び節子と同じ關係をくりかへすやうになるのだ。「可憐な心を持つ人を救はうがためには、彼は何もかも彼女に與へやうとするほどの情熱を感じて來た。」叔父と姪といふ間柄から、たとへ結婚が許されなくとも、節子の運命に最後まで責任をもたうとする決意が動いてきた。しかし藤村が描かうとした「救ひ」とは何であつたらうか。佛蘭西の旅で、アベラルとエロイズの像に夢みたやうな高き思想家達の「清淨な戀愛」であつたらうか。……「愛と智慧とに満ちたアツソシエ」の言葉が浮ん來る。「アツソシエ」とは生涯の伴侶といふ意味に當る。そこまで行くといふことは容易でないまでも、すくなくとも彼が節子と共に辿り着きたいと願ふところは、多分に「友情」の混つた男女の間柄であつた。二人が愛情の生ひ立ちから言つても、これから將來のことを考へても、彼の心は抑へに抑へたものであらねば成らなかつたとかいてゐる。かういふ「救ひ」は可能だつたらうか。

第二部には、節子の手紙が數多く載つてゐるが、岸本の心の影を淡く反映したものにす



ぎない。女の心の淺さをみせつけられるやうな日記とか手紙とかを、藤村は苦い表情でな  
らべてゐる。ただ身も心も投げ出して「救ひ」を求めてゐる姿だけが、はつきり岸本の心  
にうつつてきてそれが彼を苦しめるのだ。藤村自身の激情的な告白衝動は、節子といふ女  
性を強引にひきずり廻してゐるやうな感を與へる。女性に對する疑惑は底深く漂つてゐて、  
學問や藝術と、男女の戀愛が果して兩立するかといふ疑問も告げてゐる。激しい情愛と冷  
酷な觀察が心の裡で戦ひ、決して女性のなかに甘い夢を描いてはゐないのである。

「……歸國以來再會した節子と彼との間に起つて來たことも結局互の誘惑ではなかつた  
か。二人の結びつきは要するに三年孤獨の境涯に置かれた互の性の饑に過ぎなかつたので  
はないか。愛の舞臺に登つて馬鹿らしい役割を演ずるのは何時でも男だ。男は常に與へる。  
世には與へらるることばかりを知つて、全く與へることを知らないやうな女すらある。そ  
れほど女の冷靜で居られるのに比べたら男の焦りに焦るのを腹立しくは考へないかと。斯  
うした聲から誘はれる心持は、節子のためと考へてゐる一切の重荷や、眼に見えない迫害  
の力のために踏みにじらるることや、耐へに耐へて居る心の痛憤や、それらのものをどう

かすると堪へがたく果敢なく味氣なく思はせた。」

「新生」は倫理的に潔癖な苛責の聲にみたされてはゐるが、その反面に慾情へ溺れて行  
く性の悲しみも喜びもある。節子を罪の中に咲いた花にたとへたりしてゐるが、罪禍の底  
で味ふひそかな甘美を、藤村は充分知つてゐるのだ。オスカア・ワイルドに對する思慕も  
そこから起つてきたのであらう。「牢獄にまで下つた末にデカダンスの底から清淨な智慧  
の眼を見開いた」詩人を想像してゐる。

日影も忍ぶ草がくれ、蜻蛉はひとりみ空より  
解けにし藍の一すぢの絲かとばかりかかりたる、

「時」の翹もさながらに二人の上に休らひぬ。

噫、うち寄せむ、胸と胸、これや變らぬ珍寶、

美し契のこまやかにたとしへもなきこの刻

二重に合へる静けさぞ君と我との愛の歌。



互に指を組みあはせ、軽く身體を抱いて踊る靜かな生の舞踏——さうした愛の世界に漸く辿りついたといふ告白がある。岸本に對して節子は胸をひらき、彼の愛のままに新しい宗教生活に入らうとする支度の描寫もある。しかし、何ものにもとらはれぬ生命の讚歌が高くひびいてゐるだらうか。藤村の欲した「愛と智慧とに満ちたアツソシエ」が果して到來したか。わづかに辿りついたと思ふ利那、その高調した氣持から、岸本は一切を告白しようと決心する。佛蘭西の旅も節子との愛も癒すことの出來なかつた心の重荷を、告白によつて消し去らうとする。それが待ち受けた夜明けの到來する時かもしれぬ——結局岸本は「破戒」の丑松と同じ道を進るのである。「……彼は誰を相手に言葉の上の争ひをしようでは無かつた。唯自分を投出さうとして居た。そして一切を生命の趨くままに委ねようとして居た。」

半生に蒙つた自分の傷を、悉く「新生」に叩きつけんとした藤村の悲壯な氣持は、作品からもうかがはれる。しかし、激情的な告白の背後にさへ、冷然たる作家の眼のあること

を見逃してはなるまい。「新生」の悲劇が岸本の性格にもよることは前述したが、それ以上、この主人公が作家であること、即ち藤村の生々なまなましい分身たることが、悲劇を一層苛烈ならしめたと思はれる。節子との反道德的な關係に對しどれだけ自己を責めたにせよ、彼は決して宗教的隱遁にたちこもりうる人ではない。背徳のもつ喜びを歌ひあげるデカダンス詩人に傾倒してゐる。また節子への愛がいかに深まつたとはいへ、彼はそのひとりの女性に溺れつくすことも出來ないのだ。倫理的な自制とともに、唐突な慾情への没落がある。愛の抱擁とともに、冷靜な觀察の眼は光つてゐるのだ。藤村自ら名づけた「極靜の地獄」は嚴然として存在する。作家なるが故の特有の悲嘆を彼はくりかへし述べてゐる。

「我等藝術の憐むべき勞働者よ。普通の人々にはしかく簡單に自由に與へらるることも我等には何故許されぬのだらう。それも理ことわりである。普通の人々は眞心ハートを持つ。我等は遂に眞心ハートの何物をも持たぬ。我等は到底理解せられざる人間である……」

この言葉に籠るいたまはさを藤村は痛感して、しかも如何ともし難いのだ。節子への愛をかくときでも、消し去ることは出來なかつたであらう。「新生」は激しい告白の書であ



るが、しかしあくまで藝術なのだ。作家として果すべき一切の計量は、たとへ藤村がどれほど苦衷を述べたにせよ、その主情性の背後に冷ややかに營まれてゐるのである。「新生」ほど或る意味で作家の祕密を語つてゐるものはない。

藤村がここに求めたやうな「救ひ」——「新生」の願ひを徹して行くならば、或ひは彼自ら作家たることを止揚する結果になるのではあるまいか。だがそれは不可能である。自己の一切を筆にして告白出来る、そのことが彼には或る意味で「救ひ」ともなつてゐるからだ。眼にみえぬ牢獄から脱出して、心から青空を眺めうる日は、告白し終つたときであらうかといふ意味の述懐もある。心の重荷がおりたやうに感ずるではあらう。しかしあの執念深い凝視、あの眼の光りの失せぬ限り、「救ひ」は決して到来しまい。

「新生は言ひ易い。然しながら、誰か容易く「新生」に到り得たと思ふであらう。北村透谷君は「心機妙變」を説いた人であつた。そして其最後は悲惨な死であつた。「新生」を明るいものとばかり思ふのは間違ひだ。見よ。多くの光景は寧ろ暗黒にして、且つ慘憺たるものである。」（感想集「五月雨草紙」）

これは「新生」をかく以前の藤村の感想だが、自己の運命を豫言してゐるにひとしい。死に到るまで止むことなき争闘は、すべての旅人の宿命であらう。藤村が芭蕉からうけつた「旅」の理念は、「新生」において苛烈な試練をうけた。「新生が新生であるといふのは、その達成せられないところにある」——これは眞實だ。しかしさればと云つて諦念のなかに閉ぢこもることが出来ないのも眞實であらう。人間の再生などありえぬことを知つて、しかも再生の希求に身を燃やしつづけるのが人間の可憐な運命かもしれぬ。

藤村は直接「新生」第三部はかかなかつたが、「をさなものがたり」「子に送る手紙」「嵐」「伸び支度」から更に「夜明け前」に到る努力はすべて新生の願ひに發してゐると思はれる。これらの短篇や長篇は、「生ひ立ちの記」「佛蘭西への旅」「新生」がなくはありえなかつたであらうし、その點私も各章でふれておいたつもりだ。「……眼前の暗さも、幻滅の悲しみも、冬の寒さも何一つ無駄になるものなかつたと思ふやうな春の來ることを信ぜずにはゐられない」——その「春」がいつ藤村の上に訪れるか。彼も芭蕉のごとく、一步は一步より動搖の上に靜座する精神的の生活を創造して行かうとしたのである。



## 第五章 夜明け前

### 一 故郷

佛蘭西の旅で深められた父祖への愛と、生命の根源にさかのぼらうとする願ひ——かうした氣持から「夜明け前」が成熟して行つたことは前の各章から充分肯けるであらう。明治維新への歴史的關心は第二義的なのだ。新生のための彷徨が、藤村を導いて、次第に彼の故郷、彼の血の成育したところ、彼の父祖の夢みたところへ赴かしめたのである。「父母のしきりに戀し雉子の聲」——漂泊者の無限の旅愁をこめたこの一句が、「夜明け前」の心ともなつてゐることを見逃してはなるまい。「新生」第三部は未だかかれなかつたが、そこでこの慟哭は「夜明け前」に到るまで脈々とつづいてゐる。だが激しい告白的態度はもうみられない。「動搖の上に靜座する」姿を藤村はこの大作で求めたかつたのだと思ふ。

木曾路はすべて山の中である。あるところは岨そはづたひに行く崖の道であり、あるところは數十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いてゐた。

「夜明け前」冒頭の一節である。第一部二部を通讀して再びこの冒頭の書きだしをふりかへり、木曾森林地帯の風景を偲ぶと、鬱蒼たる自然の姿は、やがてこの作全體を象徴するものではないかと思はれた。「夜明け前」にみなぎつてゐるのは、かかる大森林の重厚と靜寂と、高原の透明な空氣と、清らかな水の流れと、それら自然のすべてが備へてゐる孤高嚴肅の性格である。そして曲折する道の難澁さがこれに伴つてゐる。さういふところに極めて忍耐深い人間の一團が成育した。ここに登場する宿場の家族達、召使たち、百姓たちをみるがいい。彼らの性格は自然の性格を見事に反映してゐる。彼らは一見愚かにまのみえる動き少い心もち、しかもこまやかな家族愛と友情を内部にたたへ、ともすれば杉の葉の纖細を思はせるほどその感情にはデリケートなものがうかがはれる。つよい忍従



の力と、相互愛の豊さは、長い封建時代の重圧が然らしめた美德であらうが、彼らの故郷の先天的影響がつよく作用してゐるとも考へられた。人物のみではない。この作の驚くほど悠然たる速度、森嚴な文體、思想追究の原始的ゆるやかさ、それらすべてが自然の姿を反映してゐるやうに感じられる。藤村自身かやうな地帯に生を享けたとすれば、彼の身内に息づくものもまたかかる森林の息吹きに他なるまい。人の一生は重荷を負うて遠き坂路を行くがごとしと云つた辛抱づよさ、根氣、ひとつとして故郷の姿ならぬものはなく、それが彼の血となり、「夜明け前」のごとき作品にも脈々と流れてゐるのであらう。

云ふまでもなく「夜明け前」の舞臺は、明治維新といふ大變革を中心としたこの地方山間におかれた。藤村の意圖は、この巨大な流れを「叢の中」から眺めんとする史的興味からのみ發したのではない。轉換期に直面して、わが心をいかに正すかと迷ふとき、人はみな必ず己が故郷を思ひ血統を探るものだ。父祖の血はけふのわが身にも流れてゐる。故郷の風景はわが心の風景となるし、幼年の日に歌はれた子守唄はいつまでも心の唄としてあとへ残る。個人もまたあらゆる自己の歴史と生存をあげて事に當らねばならぬ、さういふ

時が再生の時代と云へるのであらう。

唄づたひに行く崖の道、深い谷、荒々しい山路、かうした木曾森林の風景は藤村の奥深い心の姿を思はせる。しかし、そこには光りのやうに走る一筋の街道があつた。その道はどこへ通ずるかわからぬ。ただ求めに求めてこの道を東へ西へ作者はけふまで動いてきた。主人公青山半藏の根づよい探求心は、父祖の血統であるとともに、藤村のとほつた長い長い曲折と難澁の道の表現でもあつたらう。

半藏も時の激しさに動かされつつ、この一筋の道を歩いて行く。ここを通るものは、明治革命の動きさながらに、ある時は和宮御降嫁の行列であり、ある時は水戸浪士の叛亂部隊であり、ある時は落魄した武家の一族である。若い半藏は抑へに抑へてこのめまぐるしい動きを眺めてゐるが、遂には自らもこの道を東に西に旅する人となる。様々な群衆にまぎれてためらひ勇みながら身を進めて行つた。身を起すことは心を起すことだ。それが晩年までひたむきにつづいたあげく、老いた半藏は狂氣となる。呆けた面をあげて彼はこの街道をさすらふ人となる。



かうした人間の悲劇的な生涯と、それを圍繞する混沌たる轉換の時代と、それら一切が藤村の心をとほし、大交響樂となつて鳴りひびいてゐるのである。その音はあたかも大森林を襲ふ暴風のうなりのやうに聞えるときがある。大木の倒れる音、樹々の摩擦する音、技のすれあふ音、街道を散りゆく落葉の音までを私は聞く思ひがする。同時に、この暴風がはたと止むと、あとには繪畫的な靜寂がのこる。この繪畫は、一切の華美な色彩を排して、ただ墨一色で濃淡をつけた繪卷であり極めて確實なデッサンを背後にうかがはせるやうなものだ。かやうに音樂的なものと繪畫的なものとの壯大な交錯のうちに、おぼろげながら浮ぶ夢は、やはり木曾大森林の霧につつまれた茫莫たる姿だつた。そして、いつ果てるともない旅人の群が時雨れた街道の上を通つてゆく。

送られつ送りつ果は木曾の秋

芭蕉の句碑が、あたかもこれらすべての運命を達觀するかのごとく、靜に路上に建つてゐた。

## 二 旅人

藤村が「旅」あるひは「旅人」といふ言葉を意味ふかく用ひてゐることは、前の各章でもふれたが、「夜明け前」をよむものにとつても必至の理念である。たとへば半藏の父吉左衛門を描いたあたりで、「彼も殺風景な仕事に齷齪として來たが、すこしは風雅の道を心得てゐた。この街道を通るほどのものはどんな人でも彼の眼には旅人であつた。」——旅人を愛しいたはる心は、この父子特有のものでなく、古い街道筋の住民が長い間に養つてきた傳統であり、木曾山中なればこそ一層床しい風習として描かれてゐるのだが、藤村の理念とする「旅人」はより複雑な内容をもつてゐる。「草枕」や「千曲川旅情の歌」に始り、佛蘭西の旅において深まつたもの——多感にして憂愁な人生探求家の心に他ならない。身を動すばかりでなく心の漂泊を意味する。それが「風雅の道」といふ表現をとるところに日本の美しいダンディズムがある。

獨逸文學において漂泊者 (Wanderer) といふ言葉に最高の詩的表現を與へたのはゲー



テである。彼の創造したエルテルもファウストもマイスターも自らを漂泊者と呼んだ。

「旅人とわが名よばれん」といふ気持は日本固有のものでもない。それは世の謂ふ單なる遊子ではなく、一の戦闘家、火のごとき異端者を意味した。彼らは現世に對する辛辣な批判と思想の格闘をつづける流轉の冒險家だつた。この血は、ニイチエにもハイネにも力づよくうけつがれてゐる。明治以後の作家として、藤村が西歐の漂泊者の影響を深くうけたであらうことは當然だ。他方、日本文學において「旅人」といふ言葉に最高の詩的表現を與へたのは、萬葉以後では芭蕉であるが、これを現代文學に正しく生かさうとしたのも藤村である。彼の芭蕉に對する愛は青年時代からつづいてゐる。

「佛蘭西の旅に行く時、私は鞆の中に芭蕉全集を納れて持つて行つた。異郷の客舎にある間よく取出して讀んで見た。『冬の日』、『春の日』から、『曠野』、『猿蓑』を経て『炭俵』にまで到達した芭蕉の詩の境地を想像するのも楽しいことに思つた。

昔の人の書いたもので、それを讀んだ時はひどく感心したやうなものでも、歲月を経る間には自然と忘れてしまふものが多い。その中で、折にふれては思出し、何時取出して讀んで見ても飽きないのは芭蕉の書いたものだ。

『朝を思ひ、また夕を思ふべし。』

含蓄の多い芭蕉の詩や散文が折にふれては自分の胸に浮んで來るのは、あの『朝を思ひ、また夕を思ふべし』といふやうな心持から生れて來て居るからだとは思ふが、まだその他に自分の心をひく原因がある。近頃私は少年期から青年期へ移る頃にかけて受けた感動が深い影響を人の一生に及ぼすといふことによく思ひ當る。丁度さうした心の柔い、感じ易い年頃に、私は芭蕉の書いたものを愛讀した。その時に受けた感化が今だに私に續いて居る。どうかすると私は、少年時代に芭蕉を愛讀したと少しも變りのないやうな、それほど固定した印象を今日の自分に見つけることがある。」「〔飯倉だより〕

しかし芭蕉の精神を峻烈に鍛えあげたのも藤村だ。芭蕉の猿雖に宛てた書簡に、「其日のあはれ、其時のかなしさ、生死事大無常迅速、君わするゝことなかれ」といふ言葉があるが、半ば熱帯的な日光と、一年に一度はきまりでやつてくる霖雨と、さうでなくても多量な雨と秋季の汎濫と、烈しい風と、強い濕氣と、休息することを知らないやうな地震と——斯



う數へて來ると、日本の自然は無常迅速の思ひをそそらないものはない。深川の大火に逢つて漂泊の思ひが一層強くなつたと書きのこしたのは芭蕉であると、藤村はかいた。ここに世捨人といふありきたりの概念を思ふのは間違ひだらう。この無常から結果する旅人といふ考へは、却つて世の流れにどつしりと身を構へ、一の些事にもよく苦惱しながら大膽に歩んで行く豪華な心情ではなかつたか。私はツアラトウストラ的戦闘者をさへ夢みたい。「あかあかと日は難面も秋の風」といふ一句にみらるる、悲壯豪放の旅を思ひえがくだ。

世にまみれ、世に抗して、遂に孤高の悲哀に達するものは多くの人生探求家の運命であらうが、「旅人」もその例にもれない。「この道や行く人なしに秋の暮」——「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」と云つた蕭條たる悲しみがある。芭蕉ほど旅を愛し、旅人のあらゆる悲しみを歌つたものはあるまい。「夜明け前」にみられる旅人といふ言葉も、むろん芭蕉の血統として考へられる。これに外國文學の漂泊者ヴァンデラーがつよく影響してゐると思ふ。藤村にとつて、外國の文學にひろく求めたことが、却つて自國の古典を新たに發見する機縁と

もなつたらう。さうした點は、第三章にもふれておいた。藤村は芭蕉の心を、現代に最大の幅と深さをもつて生かした第一人者であることは、この作をみる上にも忽かに出來ぬ點である。

### 三 青山半藏

時代の變化は、父と子との間にも様々の距離をつくる。吉左衛門とその子半藏は、ともに宿役人として忍従的な生活を送つてゐるが、世を眺める眼において半藏は積極的に傾いてきてゐることは當然であらう。「かういふ時世になつてきたのかなあ」と嘆息し諦観する父に對して、子は「こんな山の中にばかり引込んでゐると、何だか俺は氣でも違ひさうだ。みんな、のんきなことを言つてゐるがそんな時世ぢやない」と云ふ。父は旅人を眺めてくらす旅人であつたが、子は自ら旅人として動かうとする旅人である。異質的なものが同時に發足しようとする混迷の時代がそれを彼に迫つてきた。その苦痛が、彼をしまづ本居宣長の説へ耳傾けさせたのである。なほここには、父と子との時代的差異が兩者の葛



藤を起すといふ悲劇はない。子は父を愛し、父は子に自由な教育を許すといふ甚だ好ましい家族である。

本居の學說、及びそれを繼承した平田學派の思想が、半藏にいかにとりいれられ彼の生涯とともにいかに展開したか。この綜括的な批判は後に譲るが、藤村はこの思想を體系としてあらはに語らず、まづ憧憬として半藏の性格描寫のうち織りまぜて行くといふ賢明な方法をとつてゐる。「夜明け前」のなかから本居學說を詳しく知らうとするのは無理であつて、むしろこの學說にふれた半藏といふ個性の思想消化の姿をみなければならぬ。

半藏はこの說に學的研究を加へるやうな學者的タイプの人ではない。激しい論争や、政治的分野への適用を試みる實踐的タイプの人でもない。説明することは出来ないが感じることだけは出来るといふ、茫漠とした未來への憧憬としてこれを信じようと努めてゐる。理論でなく感動によつて消化しようとする詩人的態度の人である。それだけに我々は、思想人としての彼からつかみ難く煮えきらぬものをうけとるのであるが、しかし半藏の憧憬は非常に純粹率直な感銘を與へる。「古代の人にみるやうなあの直ぐな心は、もう一度この世に求められないものか。どうかして自分等はあの出發點に歸り度い。そこからもう一度この世を見直したい。」「どうかして自分のやうなものでも生きたい」といふ再生を思ふ激しい心である。それは一種の祈りにさへ似てゐるものだ。藤村の全作品を通してひびいてゐる聲だ。

半藏は宿役人の長子として、旅人の世話から家族全體の統制といふあらゆる封建的重荷を背負はされてゐる。そして絶えず自分を抑へてきた。だから憧憬はその影としてつねに詠嘆を伴ひがちである。周囲の人々は彼を指して、嘆息ばかりしてゐる人、宗教へでも行くやうな人、もうすこし樂な氣もちがあつていい人と言つてゐるのもその故であらう。心のなかには現状打破への熱い要求を持つてゐながら、あくまで行爲を戒め、無口で瞑想的で、外部からみるとまるで木念仁といった感じのする性格、みてゐて齒がゆくほど靜に身を構へ、あるときはひどく大人びてゐて、青年らしくない頗る不快なところもある。かういふ型の人間は山間の農村にふさはしいのかもしれない。半藏は木曾山中の宿役人の子として、若干の財産と若干の教養をもつ言はば下層インテリゲンチヤに屬してゐる。こ



の社會的位置が孤疑逡巡の性格をもたらしたともいへるが、一層重要なのは、彼の血統——藤村が「家」「新生」などでつぶさに描いた——の然らしむるところであらう。かの深い原因の無い憂鬱、執拗な凝視、根氣、百姓への關心、上層武士への反感それらが混淆して彼の性格を形成してゐる。明治維新の大渦巻の中に彼自身をおいてみると、居るのか居ないのかも分らなくなるほど一見影薄いものとなり、讀者にも鮮明な印象を與へなくなる場合がある。描寫の不充分ではなく、さういふ性格に藤村は顧慮なく沈潛して行つてゐるのだ。

しかし、半藏は次第に身を動かさず、彼なりの實踐に身を投じてゆく、その結果、遂に狂人となるやうな悲劇を起すのであるが、淵源はとほく彼の故郷と血統と性格にもとづくこと、藤村は慎重な筆でこれを描いた。晩年の彼は、むろん政治家でもなく、詩人でもなく、商人でもなく、作家でもない、一種氣狂ひじみた求道者であつた。

#### 四 宣長の説

半藏が宿場の主人として安んずることが出来ず、すすんで平田派の門人となつたのは彼として大きな動きであつた。その頃から始る彼の思想的苦しみとはどんなものであつたらうか。まづ彼に言はせると、本居宣長は「近代」の父であつた。本居大人が古代の探求から見つけて來たものは、「直毘の靈」の精神で、言ふところを約めて見ると、「自然おのづからに歸れ」と教へたことになる。より明るい世界への啓示も、古代復歸の夢想も、中世の否定も、人間の解放も、又は大人の戀愛觀も、物のあはれの説も、すべてそこから出發してゐる。あはれあはれ上つ代は人の心のひたぶるに直ぐぞありける。」この上つ代とは一體何か。

「世に所謂古代ではもとよりなかつた。言つてみれば、それこそ本居平田諸大人が発見した上つ代である。中世以來の武家時代に生れ、何の道かの道といふ異國の沙汰にほだされ、仁者禮讓孝悌忠信などとやかましい名をくさぐさ作り設けて厳しく人間を縛りつけてしまつた封建社會の空氣の中に立ちながらも、本居平田諸大人のみがこの暗の世界に探り得たものこそ、その上つ代である。國學者として大きな諸先輩が創造の偉業は、古ながらの古に歸れと教へたところにあるのでなくて、新しき古を發見したところにある。そこま



で辿つて行つてみると、半藏は新しき古を人智のますます進み行く「近つ代」に結びつけて考へることも出来た。この新しき古は、中世のやうな権力萬能の殻を脱ぎ捨てることによつてのみ得らるる。この世に王と民としかなかつたやうな上つ代に歸つてもう一度あの出發點から出直すことによつてのみ得らるる。この彼が辿りついた解釋の仕方によれば、古代に歸ることは即ち自然に歸ることであり、自然に歸ることは即ち新しき古を發見することである。中世は捨てねばならぬ。近つ代は迎へねばならぬ。どうかして現代の生活を根から覆して、全く新規なものを始めたい……」

即ち現状打破の叫びであり、封建制度への反抗から生じた激しい憧憬をそのままに吐露したものである。かかる欲求の核心には「生命の元つ泉」への憧憬が宿つてゐることは云ふまでもない。「夜明け前」の各所に散見する本居、平田の言葉をよみ、これへの藤村の對し方をみると、この派の説は（殊に宣長のそれは）決して偏狭なものではなく、様々の思想的萌芽をふくむゆりのあるものだといふことがわかる。明かなやうに、「上つ代」へのあこがれは、決して排外主義とはなつてゐない。外國人との接觸や外國文化の輸入か

ら、新形態の商行為に至るまでを容認し、同時にさういふ新時代においても自然人としての素直さを忘れるなといふにある。これは「靜の岩屋」からの長い引用にも明確にあらはれてゐたと思ふ。

長谷川如是閑の「本居宣長の政治學」といふ論文は、本居の理想を理解する上に役立つが、氏もまた「玉勝間」を論評しつつ本居の古代意識の發見は、全く現代意識の基調をそこに見出したといふことに他ならぬ旨を強調してゐる。即ち各々の社會はその形態をもつといふのである。本居は必ずしも神代の事實に理想的世界を見出したといふわけではなく、神代の事實は、神代の神道で、必ずしも今の神道でないといふのである。社會のあらゆる形態と發展をみとめ、人間の物質的活動をもみとめる。つまり眞理は相對的であることをみとめてゐる。ただその背後に、日本に傳統する神の理念が働いてゐるのだから、人はつとめてそれに服しなければならぬ。かくて人間活動の背後に、神の遍在を強調してゐる點、一種の汎神論を聯想させ私には頗る興味ふかつた。

然し、すべての優れた大學説、ことに過渡期に成立するそれは、互に矛盾した要素を内



包し様々の萌芽を綜合してゐるものだが、本居の思想にもそれが見られる。ドイツ革命の夜明け前に、ヘーゲルの體系から、徹底した唯心論者と徹底した唯物論者とが生じたとは別の意味ではあるが、本居の思想からも時の流れにつれて異つた解釋や傾向が発生してきてゐることは注目し得る。現状打破といふ點では一致してゐても、各人の解釋によつて屢々反對のものをさへ生み出す現象、これを藤村は見事に描いた。

たとへば第一に、平田及び門人のある部分の如く、「上つ代」への憧憬を尊王攘夷論にまで發展させ、現状打破の理論的武器としたばかりでなく直接政治行動への指針とした場合。さういふときには、彼らはひとへに志士として行動し、何よりもまづ政治家たることを心がけた。暮田正香のやうな人物がその代表的なものである。この立場を徹底して行くと藩閥政府の組織者たる點に歸着するであらう。

第二に宮川寛齋のごとき場合がある。彼は學者から商人へ轉向したのであるが、その際やはり本居を信奉してゐる。「玉勝間」にもあるやうに「金銀ほしからずといふは、例の漢やうの虚偽いっはりにぞありける。」だから金を欲しいと思ひながら、欲しくないやうに言ふのは漢學者流の虚偽だといふのだ。ここでは、本居の説は、商行為の合理化に役立つてゐる。この態度を徹底して行くなら近代的ブルジョアジーになるだらう。

第三に、半藏たちの見解からいへば、宮川寛齋の行爲は一種の墮落で、本居の「自然に歸れ」といふ眞情を冒瀆したものであり、漢心からこころから脱却出来ぬ悪業だといふことになる。一君萬民の理想と、古代の素直さと、さういふ「直毘の靈」に重點をおく結果、求道者的探求心が強く前面にあらはれてくる。現状打破の思想的表現に相違なく、その意味で政治的要素でもあるが、むしろ純粹な精神的運動として展開され直接政治にむすびつかない。

かくの如く、本居の思想から、神の概念を強調してくれば極端な精神主義者を生むが、活動の概念を皮相に強調してくると貿易商人になつてしまふ。ここで前者を「反動」、後者を「進歩」といひ得るかどうか。半藏はいふまでもなく第三の方向をとるが、新しき時代の精神形態を把握したいといふ大きな慾望に憑かれた人である。彼の生涯はその戦ひでみたされてゐる。ある時には第一の道にさへ足をふみいれるが、結局、彼の詩人的態度、求道者的態度が、彼を純粹な精神活動にひきもどしてしまふ。この邊に藤村の解釋がどうか



がはれるのではなからうか。尤も、それが晩年の半藏にとって勝利だったか、敗北だったか。時代への適應力を喪失して狂死したことは何を意味するか。あらゆる過渡期のやうに、ここでも一個の思想的犠牲がわが身を實驗に供するといふ形で要求されてゐたわけである。

## 五 憂愁と行爲

彼の友人、景藏や香藏は、平田派門人として比較的急進的態度をとらうとしてゐる人達であつた。彼らは半藏のやうに先祖代々の宿場を守らうとせず、自ら京都へ赴き勤王の運動に参加してゐる。彼らの故郷へのたよりは、半藏の心を攪亂する。さうしてゐる間もこの山間の街道を和宮降嫁の行列がとほり、何となくあわただしい風雲を残してゆく。農村に飢饉は襲つてくる。京都の變、江戸おもての騷動、討幕と佐幕との争闘、それが遂に大政奉還に至るまでいつ果てるともなく續いてゐた。既に隠居した父の後をうけて半藏はわが家の重荷と、宿役人としての責任とに身を縛られ、じつとこの成行きをみまもつてゐるやうな人だつた。

さびしい雨の音を聽いてゐると過去の青年時代を繞りに繞つたやうな名のつけやうのな  
い憂鬱がまた彼に歸つて来る。

お民はすこし蒼ざめてゐる夫の顔を眺めながら言つた。

「あなたは溜息ばかり吐いてるぢやありませんか」

「どうして俺はかういふ家に生れて來たかと考へるからさ」

この嘆息はすでに「家」あたりからあらはれてゐるものだ。半藏はどこか非常に疲れてゐるらしくみえ、その心がかすかな溜息となつて傳はつてくる。再生のあこがれと時代への深い想ひと、それが「家」に縛られてゐるわが身を噛みくだいてゆく苦痛ともいふべきだらうか。これを堪えに堪えて、次第につのりくる疲労、世紀の重みともいふべき半藏の上に濃い影を宿してゐる。彼もまたはげしい憧憬ゆえにわが身を滅してゆく側の人である。ただ滅びまいとして彼は内的努力を最後まで放棄しないのである。自己の知的感情的要素のこまやかさが、却つて一身の行動を妨げるとでも反省したか「賢明で迷つてゐるよりも、愚直でまっすぐ進むんだね」といふ言葉が彼の口から洩れたりする。



平田派の門人となつたことが、彼の行爲の第一歩であるとするれば、やがて數々の旅は彼の第二の行爲であらう。心を起さうと思はばまづ身を起せとは、藤村が口癖のやうに言ふ言葉であるが、半藏にもまたさういふ決意の日が訪れてくる。然しこの決意は、外部的な異常の出来事から發したのではない。彼は彼らしくつもりにつもつた想ひをみたすべくゆるやかに立ちあがるのみである。それも勤王の運動に身を投ずるといふのではない。むしろ世の動亂を深く眺め考へる爲である。「夜明け前」第一部の後半には、半藏の數々の旅が描かれてゐるが、實に靜かな旅だ。江戸への旅、伊那への旅、名古屋への旅、しづかな身の動きである。かういふ旅が彼の行爲なのであつて、その都度本居、平田への思慕がつよめられて行くばかりだつた。このあたりの描寫をよむと、世界大戰當時パリの旅舎にあつて、窓外を過ぎゆくフランス兵の行進を凝視してゐた藤村を思ひ起す。動亂を眼のあたりみて、そぞろ望郷の念禁じえなかつた日の想ひ出が、この作品にもほのかに香つてゐる。

維新の運動は江戸を中心として激烈を極め、あたかも半藏の氣もちを無視するかのごと

く荒々しく進んで行つた。大政奉還の報せが村に届いた頃、半藏はしみじみとした心で友人の香藏に語るのである。「ひどい血を流さずに復古を迎へられたといふ話さ。そこがわれわれの國柄をあらはしてゐやしませんか」いかにも彼らしい莊重な回想ではないか。大政奉還は最も重大な革命の第一段階であり、討幕に身を挺して戦つたものの心になれば狂喜の絶頂に相違ないのである。がここにはさういふ感激の昂揚はない。もの靜かな曉の光のやうに、新しい希望がひそかに半藏の心をつつむ。胸に長い間描いてゐた理想が實現し、さうにみえてくる。一切は神の心であらうでござるといふ本居の言葉を思ひつつ、冬の日森深い街道を彼は歩きまはるのである。

## 六 民衆の繼子

彼の心に描いた理想は果して實現したらうか。否、容易に實現しないばかりかむしろ踏みにぢられてゆく。大政奉還は終つたが、その後にくる舊幕府軍の抵抗と鎮壓、外國の壓迫、文明開化による淺薄な洋風の侵入、百姓一揆、山林事件、宿場の廢止、一家の經濟沒



落と、次々くるものは彼を苦しめひきずり廻し、失望させるばかりである。「夜明け前」第二部は、本居、平田の流れをくむ彼の理想が、現実の發展と次第に矛盾し、相剋し、敗北してゆく悲劇である。藤村は第一章より四章に至るまで、當時の重要な社會事象を次々描いてみせてゐるが、私はここで半藏の身邊に直接起つた百姓一揆について短い感想を述べよう。

地方山間の下層インテリゲンチヤとして最も半藏の眼に近く映るのはいふまでもなく農民である。藤村もこの點には深い留意をよせて、「百姓一揆の處罰といへば、軽いものを答、入墨、追拂ひ、重いものは永牢、打首、獄門、あるひは家族非人入りのやうな嚴刑はありながら、進んでその苦痛を受けようとするほどの要求から動く百姓の誠實と、その犠牲的精神とは、他の社會に見られないものである。當時の急務は、下民百姓を教へることではなくて、あべこべに下民百姓から教へられることである。」と第一部に書いてゐる。しかし「夜明け前」全巻をとほして、半藏及び平田門人と農民との直接的結合はみられない。平田の學説を「百姓の宗教」と呼んでゐるやうに、彼らが農村窮乏の現實を知り改革を望

んでゐたのは事實だが、要するにそれを精神的に表現するに止まつてゐた。下民百姓から教へられる點の描寫は至つて少い。

尤も明治維新の原動力として、一般民衆が重要な改革的役割を果したといふことはない。明治革命における農民の役割は、むしろその消極的方面にあつた。即ち徳川の封建的搾取は、農村離脱や墮胎による土地の荒廢、農村人口の激減を結果し、封建的搾取の唯一の源泉を枯らして益々その經濟的基礎を危くせしめたことだつた。百姓一揆は當然頻發したが、そのよき指導者を缺いてゐたし、勤王の下層武士も彼ら農民と結合するに至らなかつた。接觸といふ點ではむしろ半藏たちのグループが近かつた。大政奉還以後の一揆は、當然それまで彼らの上にのしかかつてゐた直接の敵——地方の間屋にむけられたりした。だから半藏たちは、近いだけにむしろ反抗される側の人でもあつたのである。しかしすべては散發に終つてゐる。多くの間屋には相變らず和かな主従關係が繼續した。

「夜明け前」の主人公一家及びその地方自治にあらはれた精神は、一種の自由主義ともいふべきものであつて、半藏と彼の父なども出来る限り農民の窮乏を救濟しようとする。



「社會政策」を採用してゐる。半藏の村の百姓が一揆を起した後に、百姓と半藏との間に交された對話をみるがいい。「そんなに俺は百姓を知らないかなあ」と彼は嘆息してゐる。その場限りの「社會政策」などは百姓にとつて問題にならなかつたのである。半藏の描く理想は實にとほい。「新政府の信用も、まだそんなに民間に薄いのか。」と彼は嘆息するばかりである。彼が百姓から教へられた一番重大なことは、彼が百姓を知らないといふことだつた。

藤村の農民に對する關心は、いまに始つたことではなく、「農民のために」といふ大正年間に書かれた感想にも彼の心はよくあらはれてゐたと思ふ。「今日、農民の自覺を促さうとするやうな聲は高い。私達はさういふ千の聲よりも、農民と共に生き、その生活を知悉し、土から離れかけてゐる農民をもう一度土に歸らせるやうな一人の好い友達を欲しい」と。これは子息のひとりをも、木曾の農村に送られた人の切實な言葉である。

かういふ關心とともに、ロシアの知識階級が「民衆の中へ」行つた有様を追想し、農民は駄目だ、何と言つても自分らの頼りになるのは眼のさめた知識階級だといふゴリーキイの「冷い涙」にも通じてゐる藤村である。ロシアの偉大な轉換期に、農民の姿をみきわめべく身を投げ出した幾多のインテリゲンチヤがあつた。彼らがそこで感じた絶望と希望、この長きにわたる並々ならぬ犠牲の上に、はじめて農民の眞の姿が発見されたことも藤村は知つて居られるであらう。

半藏の思想的行爲において、平田入門が第一歩であり、諸地方への旅が第二歩であるなら、山林事件はその第三步であり、彼の行爲の一頂點をなすやうに思はれる。これは純粹な思想的行爲といふよりはそこから出發した一の政治的行爲であつた。時はすでに明治と變り、宿場は廢され、壯年の半藏は戸長兼學事掛といふ任務に従事してゐた。この山林事件といふのは、山林に住む農民がそれを伐採して生活の援けとなるやう伐採許可を嘆願する運動で、當時の官吏がこれを官有林として許可せず、徳川時代に許されてゐた個所にまで禁止を行つたことへの抗議だつた。木曾地方では長い間の懸案であり、くりかへされた運動であるといふ。

平田門人として彼がこの運動の先頭に立つに至つたことは、當然の經路とはいへ、彼と



してはよくよくの行爲だつた。従つてこの描寫は、全體をとほしても昂揚したものとなり、勝利にしる敗北にしる、半藏の心はもつと執拗に追求されねばならなかつたと思ふが、あまりに楚々たる筆に終つてゐるのはもの足りぬ感じを與へる。地方農民にとつて重大な生活問題であるが、半藏達はこの運動を直接さういふ百姓の生活にむすびつけておらず、運動は、戸長といふ少數者の嘆願となつてあらはれ、彼らと官吏との個人的交渉に終始してゐる。あきらかに指導者の弱みを曝露してゐるのであつて、結局半藏が戸長を免職されるとそのまま消えてしまふ。あとには彼ひとりだけが残る。半藏は政府の官吏に對しては敗北者となり、農民に對しては顔むけがならぬといふ二重の悲しみを味はねばならぬわけだつた。しかし藤村の筆はこの悲しみを決して生々と描いてはゐない。

ともすれば孤獨な冥想におちいりがちな半藏の性格、彼の直情、それは理解出来る。彼の憧憬は「片思ひ」に似て、相手はいつも彼の思ひを素直にうけいれぬ——さういふ苦惱が、半藏の動きを通して鮮かに表現出来なかつたのは何故であらうか。

半藏はすでに父を失ひ、自らは嫁にやるほどの娘の父としてなほ道を求めてやまない。

戸長を辭し、學事掛として彼は子弟の教育にあたらうとする。一家の經濟も傾きかけてきた。そこへ娘のお糸の自殺といふ悲劇がもちあがる。若くして世の動亂を経験した娘の深傷、父の血をうけついたりやうな多感な性格、自殺の試みから恢復への途上における寂しさ、痛々しい姿、さういふ慎ましい生の動きを描くところへくると、藤村の筆はさすがに深い味ひを帯びてくるのである。

## 九 齋いっさの道

かづかづの旅から、變革の渦卷を眺め、百姓一揆、山林事件と身を動して行つた半藏も、娘の自害あたりを契機として「一生の旅」の峠へさしかかつてきた。彼の「眞晝」が過ぎ去り、漸く落日の悲哀がつきまとふやうになつた時だ。四十三歳の半藏の言葉は、彼がいかに多くを夢みつつそれが現實に蹂躪されて行つたか、痛ましい失望の告白となつてゐる。「自然に歸れ」といふ復古の夢を追うて、これまでの半藏はともかく社會の動きに身を挺しようと様々の旅を試み、百姓一揆に關與し、山林事件にのり出したりした。然し第二部



十章あたりからの半藏の心理には大きな轉換がみられる。藤村はこの轉換を誇張することなく、淡々と描きつづけてゐるが、半藏の本質をみる上に興深い個所だと思ふ。社會の動きに身を近づけようとする心が薄れ、むしろ本居の謂ふ神の道に仕へんとして靜かな祈りが始まつたのである。

かういふ現象が何故半藏の心に起つたのか。彼は戦ひに疲れ敗れて行つたのか。この淵源をとほく故郷や血統や性格に求めることも出来よう。が、彼を平田結社の一員としてみると、かかる現象が起つたのは彼ひとりのみではなく、この没落は平田門人全體に起つたことがわかる。稀に彼らのうちの若干が新時代の政治家となつたかもしれないが、全體としてみると、本居平田の精神を深く信じたものほど新時代に挫折したといふ悲劇が在つた。前にも述べたとほり本居・平田の説から様々の解釋が生れ様々の生き方が生じたが、結局この説を未曾有の轉換期に再検討し綜合し發展せしめるだけの思想家がなかつたのだ。國外文化のめまぐるしい氾濫と日本資本主義の成立過程は、彼らの精神にはとうてい堪へ難つたのである。彼らは過渡期の犠牲者たるべく運命づけられてゐた。かういふ門人達が

最後に到達したところは「齋いっさの道」に仕へること、即ち各地方に散在する古い神社の官主となつて「上つ代」の心を教説することであつた。それが彼らに残された唯一の道でもあつた。

半藏にも當然この決意が起つた。しかし、つとめて新しい時代をみきわめようとする探求心は失はれない。落日の前の一入はげしい光茫のやうに、彼の東京への旅はそれを物語つてゐる。明治初年の東京で彼のみたものは何か。西洋文明の皮相な模倣、刻々失はれてゆく傳統。とりわけ彼を悲しませたのは「齋の道」から發した敬虔な心で勤めに向つた教務省神社掛といふ職場が、近代政治機構のもつ雇傭關係を露骨に示したことだつた。つまり、彼はそこでもはや高遠な理想をもつ平田門人として遇されず、日々の仕事を事務的に片づけるひとりのサラリーマンに過ぎなかつた。同僚達は本居大人を半ば揶揄しながら、その日の仕事を機械的に始末して行くのみだつた。半藏は全く「餘計者」となり、悶々として自ら職を去る。そして新しい東京の街をあてもなく漂泊する人となつた。本居・平田の説が果して時世おくれか、否、そんな筈はないと自問自答する。この前後の描寫は第二



部でも最も力こもつた部分であると思ふが、半藏の心の動搖がつよく我々をうつてこない。或る日天皇行幸の御道筋に御通輦を拜し、感極まつて自らの歌をしたためた扇子を獻じようと走り出すところなど、全篇を通しての劇的な場面であるが藤村はここでもあまりに楚々とかきつづけて行つた。訴人として捕縛され留置される、こんなことは半藏の性格としてよくよくの事であり、過去何十年間思ひに思ひつめた心の爆發であつたらう。なかば狂的な行爲である。彼の理想と現實のはげしい摩擦、現實への敗北から結果した激情ともみられよう。落日の前の最後の光りにも似てゐるのである。かういふ場面の描寫は、ともすれば誇張され、戲畫化され（東京における彼の姿からはすでに戲畫的なものが感じられる）作品の調和をみだし易いのであるが、それを深く戒めてか、藤村が筆の濫い一觸で過ぎ去つてしまつた。半藏はやがて東京を去り、多くの平田門人と同じ運命を辿つた。彼は飛驒高山のささやかな神社のまもりとして「齋の道」に仕へようとする。

## 八 落日

長き夜をひとりあらむと草枕かけてぞわぶる秋はきにけり

飛驒山中の作である。神のまもりとしての四年間は、半藏のしづかな落日を思はせる。もはや激しい光茫も失せ、穏かな光りが彼の周囲にみなぎつてゐるのみ。人生の半ばを過ぎ、あらゆる非難と苦痛を越えた人のやうに行ひすましてゐた晩年の姿がある。文明開化の片鱗すら知らぬ山中の青年さへ、彼の教を聞くとき吹き出したくなるほどにも、彼の心は世を遠く離れてしまつたやうである。やがてこれを最後の旅として半藏は傾いたわが家に歸つてくる。

家も傾き、身も心も傾いて、一種孤高の悲哀だけが彼の心につはつてゐた。さういふ時も、おそらく渾身の力で彼は心の戦ひをつづけてみせた。藤村の、悲しみをこめてさりげなく描いた筆のあとを辿つてみると、この戦ひの奥深いところに惨憺とした没落の苦惱が宿つてゐたことがうかがはれる。それは何か。「復古の道は絶えて、平田一門すでに破滅した」といふ寂しい叫びである。「平田門人は復古を約しながら、そんな古はどこにも歸つて來ないではないか。」これには返す言葉をもはや失つてゐる半藏である。然し、こ



れまで大和言葉のために戦つてきた國學者諸先輩の骨折がそのまま水泡に歸するとは彼には考へられもしなかつた。いつか先の方には再び國學の役に立つ時が來ると信じないかぎり、彼なぞの立つ瀬はなかつたのであつた。

ここまで考へつめた半藏が國學復興の希望を未來にかけ、それをせめて子供達に期待するのも無理はなかつた。最終に到つて彼の眼にうつる本居宣長の言葉は重大である。「吾にしたがひて物學ばむともがらも、わが後に、又よき考への出で來らむには、かならずわが説にななづみそ。」即ち宣長は、新しくすぐれたものの前にはわれを拒否せよと教へてゐるのである。西洋の學藝をうけいれることは何ら先師をばづかしめることではなかつた。

「道を思はで、いたづらに吾を尊まんは、わが心にあらざるぞかし」と言つた時、この道は必ずしも古代のそれではなく、現代における發見を強ひたものであつた。これをよむとツアラトウストラの有名な教説、「今我は汝等の我を失つて汝等自らを見出さむことを汝等に命ず。而して汝等が總て我を拒否したらんとき、始めて我汝等に歸り來らん」を想起するのである。おそらく古典の發見者が、古典の中に、最終的に聞く言葉はこれに相違ない。

古典に接するといふ試練は、あらゆる試練のうち最も苛酷なものである。それは現代を煽動しつつ、結局汝自身においてそれを處理せよと突き放すのだ。半藏も晩年に到つてこの聲をきいた。異常な天才を必要とするこの仕事に對して、彼はただ己の無能無才を嘆くのみであつた。時はすでにおそく彼の日は暮れつつあつた。

……昨日まで宗教廓清の急先鋒と目された平田門人等も今日は頑執盲排のともがら扱ひである。殊に愚かな彼のやうなものは、爲す事、爲す事、周圍のものに誤解されるばかりでなく、ややもすると「あんな狂人はやつつける」ぐらゐのことは言ひかねないやうな、そんな嘲りの聲さへ耳の底に聞きつけることがある。この周圍のものゝの誤解から來る敵意ほど、彼の心を悲しませるものもなかつた。

「俺には敵がある。」

彼はその考へに落ちて行つた。さてこそ妻の耳に聞えないものも彼の耳に聞え、妻の眼に見えないものも彼の眼に見えるのはそのためであつた。

「敵がゐる」「敵がゐる」——半藏にとつてはそれは大きな破壊の中からあらはれて來た



「文明」の假装者であり怪物であつた。文明の皮相性は許しえなかつた。「さあ、攻めるなら攻めて来い。」と狂的な挑戦がはじまる。齒ぎしりして震へ立つ半藏の姿がある。狂氣とも正氣とも判別つかぬ一種ハムレット的苦悶の表情が重い文章のなかから浮び出てきてゐる。半藏は寺院に放火し、村人からも家族からも全く狂人に扱はれ、最後にわが子の縛をうけて奥深い座敷牢に幽閉される。長い長い旅の果に彼を待つてゐたのはこんなものであつた。故郷は彼を迎へず彼を牢へつないだ。もはや完全に故郷を喪失したものの姿がここにあつた。

おのれを檻の中の熊にたとへ、荒い格子越しに「熊」といふ一文字を書いた紙片を娘に示したりした。さういふ時狂へる彼は、

……おのれを笑はうとするのか、それとも世を嘲らうとするのか、殆んどその區別もつけられないやうな聲で笑ひ出した。笑つた。笑つた。彼は娘の見てゐる前で、さんざん腹をかゝへて笑つた。驚くべきことには、その笑が何時の間には深い悲しみに變つて行つた。

きりぎりす啼くや霜夜のさむしろにころも片敷き獨りかも寝む。

この古歌を口ずさむ時の彼の蒼ざめた頬からは留め度もない涙が流れて來た。彼は

暗い座敷牢の格子に取りすがりながら、さめくくと泣いた……

かづかづの旅と事件と、最後まですすめた心の戦ひと、それにも拘らず救はれることになかつた晩年の寂寥といふものは、私などのとほく想像するに止まるものであるが、しみじみとした筆のあとを辿つて行くと、藤村自身のこみあげるやうな慟哭の聲が迫ってくる。青春の夢は慘忍に彼を欺いたのであつた。